明治三十二年九月二十四日發兌

女鑑

第百八拾四號

東京國光社



女鑑第百八拾九號

目　録

女　鑑

見識を保つべし……一

論　説

日本人今後の覺悟……三輪田眞佐子……五
度量……吉野　眞澄……八

史　談

もよ女……鏡井ふく子……一〇
せつ女傳……鷹尾の松……一二

家　政

茶の湯……關　器雄……一四
女禮式……有住常子……一六
臨時の客應接……三石直子……一六
折方……有住くわう子……一九
たちぬひ……西山たい子……二〇
たいところ……二一
栽花園……二二

學　園

貧窮問答の歌並短歌……田島　隨二……二四

漫　録

神國女訓抄(二)……山口　貫道……二九
釋人名(四)……釋　法忍……三二
さゝし草(二)……故兒島　顯齋……三三
日本人の性質(二)……三四
主從さゝし草……諏訪　忠元……三七
教梯抄(十五)……三九

飛鳥井家和歌の法式(五)……井上　頼文……四一
花がたま……井上　頼文……四三
競點歌……諏訪　忠元……四四
せつ女集……鷹尾の松……四六
はゝその教……はゝそ……四七
思立旅の記(二)……細川治年の女……四九
家兒消文(二)……白松園主人……五四
しのぶの露……井上　頼文……五七
奥州七ヶ濱の舟歌……漫　録　子……六一
禽獸の言行……田端の隱居……六四
意氣(二)……白魚　女史……六四

文　林

短歌……東久世通禧……六八
仝……鍋島　直大……六八
仝……長岡　護美……六八
仝……前田　利鬯……六八
仝……宮地　嚴夫……六八
仝……北郷　久政……六八
仝……阪　正臣……六八
仝……植松　有經……六八
仝……荻原　嚴雄……六八
仝……遠山　英一……六九
仝……岡部　譲……六九
仝……三輪　義方……六九
仝……足立　正枝……六九
仝……諏訪　忠元……六九
仝……佐々　豐水……六九
仝……蜂須賀隨子……六九
仝……前田　朗子……六九
仝……西四辻茂子……六九
仝……柳原　愛子……六九
仝……松平　健子……七〇
仝……北島以登子……七〇
仝……原田蒼生子……七〇
仝……山田　稻子……七〇
仝……大谷　章子……七〇
仝……河村　重子……七〇
仝……福島喜多子……七〇
文……師岡須賀子……七〇

雜　報

皇太子殿下御還啓……七三
葉山行啓……七三
御職務……七三
兩内親王殿下……七三
故久邇宮御事蹟……七三
帝國制度調査局……七四
義婦……七四
一對の孝婦……七五
妻のまこゝろ……七五
孝子……七六
某子爵夫人……七九
農事篤志者……七九
女子師範學校の國語專修科……八〇
北海道の女子高等教育……八〇
英國の子女其の職業……八〇
ちまたのさゝりく……八一
現今の家庭……八二

家の庭

兼題歌數百首　文數十章　ほかくさぐ

口畫……高橋松亭
插畫……同　人

茂代女



見識を保つべし

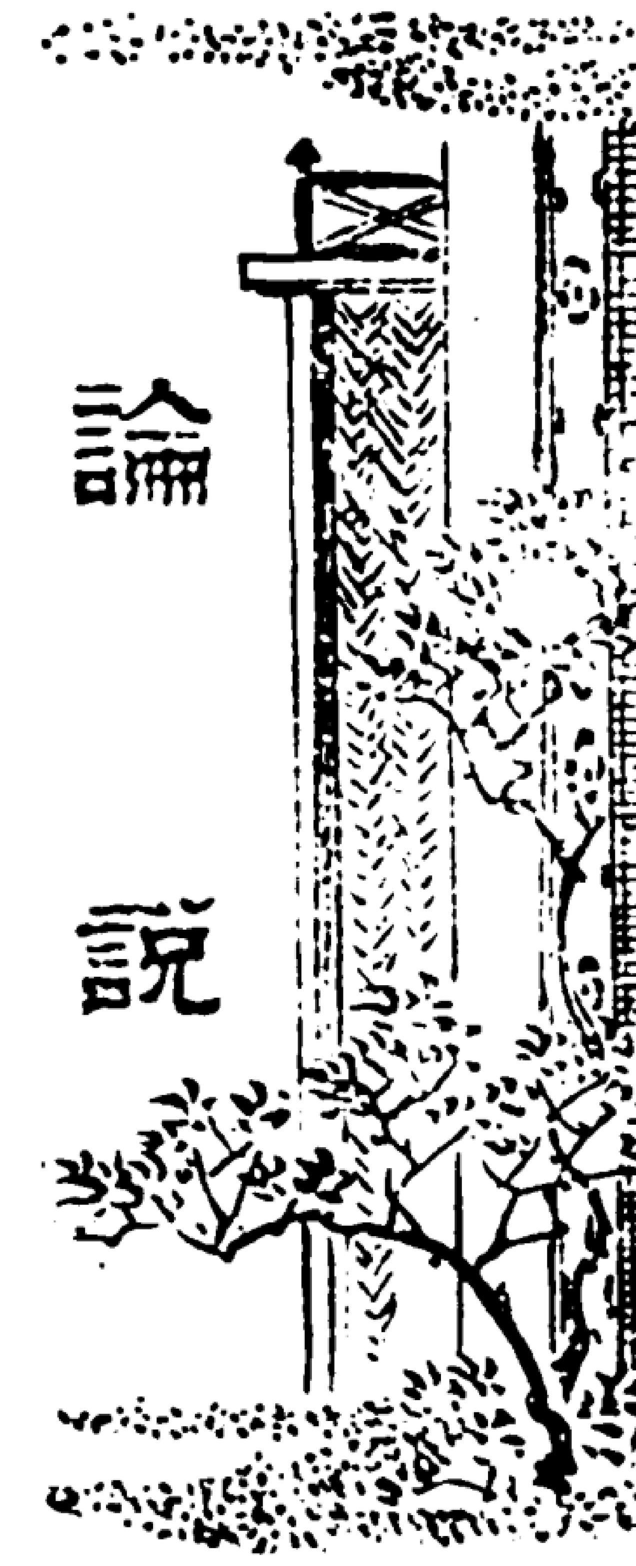
人は、見識を保たざるべからず。見識とて、俗に稱する如き、外貌を嚴つげによそほふにはあらず。威儼ぶるにもあらず。高ぶり、貴ぶり、かしこぶり、富貴ぶる等みなしからず。事の情を識り得て、意見を立つるを云ふなり。さりとて、分らぬ事を云ひ張り、云ひ貫く。之れまた意見あるにあらず。見識あるにあらず。名けて、頑固と云ひ、强情と稱するのみ。見識とは、よく見、よく聞き。よく思ひ、よく案じ、人の理を識り、道をさとり、善をとつて動かぬを云ふなり。女子、尤も此の見識に乏しく、意見を有する稀れなり。一事起る。難波江のよしあしをとはず。忽ち、人の向ふ方になびき、多きにくみす。恰かも、風見烏の風になびき、浮草の流れに漂ふが如し。或人、驢馬に騎り、子をうしろに隨へて、家に歸る道に、一人に逢へるに、

その人、その父に云ふやう、君は無慈悲なり。君は身体すでに固まれども、子息は未し。而るに、君騎り、子息あゆめりと。父急ぎ驢を下り、子をして代りて騎らしむ。未幾ならずして、又一人に逢へり。其の人、其の子に忠告するやう、汝は不孝なり。汝は年少けれども、父は老いたり。而るに、汝騎りて父をして歩ましむと。父之を聞き、亦一理ありと思ひ、即ち二人共に其の驢に騎れり。已にして、又一人あり。父子に忠告して曰く、汝等二人此の小動物に騎る。不仁甚しと。是に於て、二人亦之を理として共に下りて歩む。又人來れり。君等は、愚鈍なる人々なり。二人の中、一人驢に騎らば、勞を省くこと大ならずやと。此に至り、何れに從ふべきかを知らず。遂に、驢馬の四足を縛りて棒の中央に括り、兩人之を肩に舁ぎ、汗水を流して家に歸りぬ。己れに意見なく、唯諸人の愛を買はんとするときは、つねに困難を生ずと、ある書物に見えたり。これをかしきつくりばなしのやうに思はるれど、まことに、見識なきものは、かやうのためし少からず。むかし、江戸葛飾のほとりに、權兵衞と云ふ村長ありき。ある年の春、伊勢太神宮へ太々神樂を奏せんとて、村民十三人と共

に御師何某が家に宿れるに、山海の珍味をつくし、もてなせし後、各へ薄茶まゐらせんとて、茶室に招じ、茶をたて、丁寧にすゝめけるに、權兵衛もと農夫の身。さやうの好事は知らず。知らぬと云ふも面目なし。知りたりとせんには、如何に飮むべきと、さまぐ\に心勞し、くるしきもてなしをうけて、そうぐ\に歸り、さて、柳澤里恭の許に至り、その心勞のほどを語り、はづかしく思ひき。口惜しく思ひぬ。後、またかゝる目を見ざらんために、茶の手續を敎へ給へとあるに、里恭大に笑ひ、そのもとは、日頃に似げなき、不見識の人なり。農夫は農家に人となりて、農業の事にだにくはしければ、耻かしき事なかるべし。茶は、もと、隱遁の手すさびにて、その道、日用に足れりと云へども、農夫町人などの致すべき事にあらず。世をのがれし後などは、ともあれ。其許、もし茶を學ばゞ、一村、みな之に習ひて、農事に怠りなば、田畠は悉く不作なるべし。村長茶道を知らざるが故に、耕耘收藏時にたがはず、國中百人耕して五十の遊民あらば、その國必ず飢ゑぬべし。百人耕して十人遊ばゞ、その國、はたして豐なりと云へば、權兵衛感じて、茶の湯を習ふをやめたり

とぞ。不見識とはかやうの事にて、己れのとる所の固からぬが故なり。女子に尤も見る所なり。人中にて、茶をすゝめられし時、もしその道を知らずば、耻あるべしと習ふ。活花こそ用あれ。學ぶべき事とて學ぶ。やめよ、それなりは糸竹、音樂の業こそ肝要ならめと云へば、早も之に心をうつす。そは、皆藝なり。同じく藝に志さんには、美術をこそとるべきなれ。茶の湯、音樂、何の世を稗益する所かある、美術こそは女の手に叶たる、しかも世を優美ならしむる、よき術と人のそゝのかせば、亦や之に心を轉ず。藝は次なり。女子にも學問なかるべからずとて學ぶ。否、女子にはなまなか學問あるはわろし。さるよりはたちぬひ遊藝こそしかるべけれと云へば、亦之に從ふ。當時の世に、英學こそ肝要なれ。獨學こそ必用なれ。佛學こそそれもしろけれど、人の云ふまゝ、誘ふまゝに、なびく事青柳の糸の如く、うつろふ事紫陽花の花よりも易し。さるが故に、學も半ばにしてなびき、藝も半ばにしてうつる。遂に全き色香を呈する事能はず。口惜しきは不見識の人にて、耻づべきは、人として見識なきなり。ひめたちよ、くらからぬ心のたまをもちたる姫たちよ、よく

みがき、よく思ひ、日本女子の見識をたもたれよ。



日本女子今後の覺悟（五）

三輪田眞佐子

上に述つるごとくなるを以て、おのれは、若男若女の自由結婚を採らざると同時に、亦兩親の贈與結婚といもふべき風習も可なりと信ぜざるなり。されど、如何なる結婚の成立を以て最も美とすべきか、曰く親子協諾結婚こそそれよ。

そもそも、親たるものは、公平無私に、專ら、子の利害を慮りて、良縁を求むべし。されば、その多年の經驗と積年の知識とは、以て、眞の利害を洞察するに足れど、必ず惡縁を避くるならんかし。次に子たるものは、將來なさんとする生活の理想と、撰まんとする配偶の條件とを縷陳して、親の參考に供すべし。かくして親子の、共に適當なりと知るものを得んか。果して、幸福なる結果を見るなるべし。

或は疑はん。親子協諾結婚は、形式のみは完全ならんも、實行は難し。如何となれど、老人と若輩とは、思想を異にするを以て、親の、良しとおもふものを、子は好まず。子の適へりと感ずるものも、親の欲せざるは、自然の事理なるを以て、必ず、親子の衝突を免れず。故に止むを得ずして、親子、一方のみの決意に由る、自由結婚、若しくは贈與結婚に偏すべしと。おのれおもふ。かゝる恐は匹夫野人の家庭に於てのみ見るべきものなるも、決して、有識者、有德者の家庭に於ては憂ふるに足らざるべしと、凡そ人は、年齢によりて、多少見るところを異にせんも、虛心にして考ふれば、善として撰ぶ標準は、さまで大差なかるべし、曾子曰ひけらく、十目の視るところ、十手の指すところ、それ嚴なる乎とあり。實に、人の心は、その面のごとく、相異なるも、その小異を棄てゝ大同を取らんか、眞理に近づくこと難からず。されど、親子の結婚に對する意見に、小異はなしとせざるも、大同の點あるは疑ふべからず。その大同の點こそ、親子協諾結婚の成立する根底なれ。

蓋し親たり、子たるもの、各、充分の教育を受けて、義理に明通するものならんには、親自ら、老人は、なべて、有爲の氣力に乏しく、姑息に安んせんとする傾あれど、我、今子のために、婚を議するも、かゝる僻なきかと省み、子、自ら、若輩は血氣盛にして、目

下の感情に迷ひ、未來の禍を釀するを知らざる傾あれど、婚を求むるも、この僻に陷るなからじと祈らんか、親子相待ちて、中庸の途を得るに至らん。元來子たるものが、其の理想とする所を述べて、親の參考に供するは良しといへども、理想は實行することと能はざることをも忘想し易ければ、戒めざるべからず。すなはち、配偶を求むるは、その現今の位置に相應するものを適當となす、或は劣等なる家の女を娶れど、御し易しと解くものあり、勿論、劣等なる家より嫁き、自ら謙遜して、終を全うせんには、幸ならんも、實際、劣等なる家の女が、富貴の家に嫁くや。忽ち、天に登らん心地なしけん。反りて、高慢奢侈に流るゝ例もあり。若し小心翼々と愼まんも、夫たるものが、彼は、固と劣等なる家より我妻となりし、榮を得けれど、かゝるばかりの、非理は忍どんとて、その自遜に乘じて、それを奴隷視し、それを牛羊視せんか、決して幸福なる家庭を作ることと能はざるべし。亦、妻たるもの學識なくして、學者に嫁せんか、殆ど夫妻睦じく、日常の談話もなすこと能はざるより不愉快こよなかるべし。その他賢愚職業、及、互の性質を參酌して、理想を定むべし。されば、その理想は、實行せんも齟齬する恐なからん。

度量

吉野眞澄

度量は、能ふたけ、廣大なるを要す。度量廣大なるは、君子なり。狹小なるは小人なり。古人曰く、海はひろくして、魚のおとるにしたがふ。天は空しうして、鳥の飛ぶにまかす。大丈夫に非ざれば、此の度量あるあたはずと。げに、君子、丈夫の度は、限りあるべくもあらず。小人の量は眼眸にふれず。故に、よく衆なひき從かひ、萬世、仰ぐ。故に、爭闘して日に仇をまねく。試に思へ。出で山嶽にのぼれむ、鬱蒼たる松柏あり。是れ君子の風なり、百草を掩ふてさながら、丈夫の度あるに似たり。故に、時に或は至尊の雨をさけたまふ事あり。時に或は、神仙の座ともなる。又鹿々たる荊棘あり。即ち小人の姿なり。狗々とて、雜茂せる樣は、小人の爭擾するを見るが如し。時に或は馬牛にふまれ、猪鹿のしとねとなる。

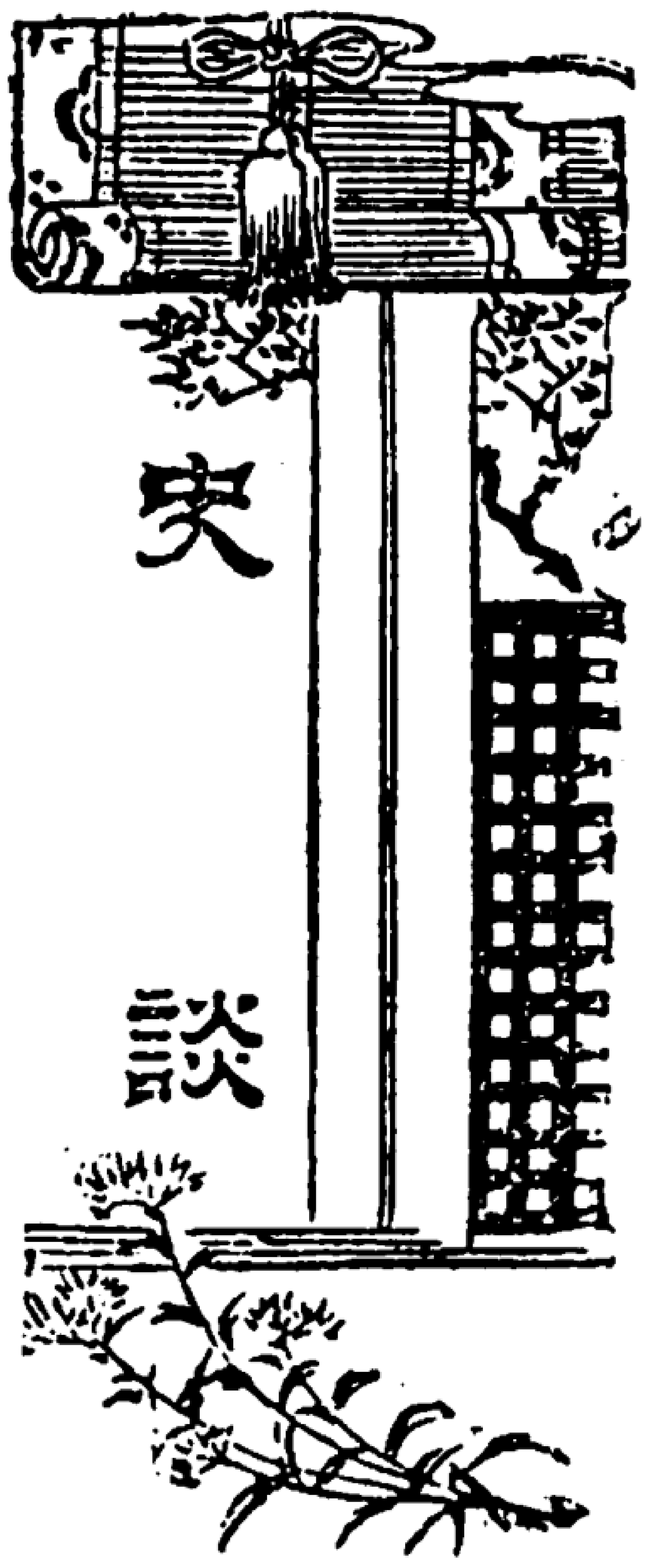
史を閲して、其の行蹟の偉大なるを見れば、皆度量宏大の士なり。其の小量なるは、嘗つて傳らざるず。

掛卷もかしこかれども　皇大御神の寛仁大度に御はしましをうかゝひまつれ。素戔嗚尊、ことにより、あらびたけりたまひて、大神の御田つくらせ玉まひしをりは、春は、即ち重播とて、一度、うゑたまへる苗代に、またかさねまき、毀畔とてあせを、取りはな

ちたまへ、塡渠とて、御田にそゝぐかけ樋をとり捨て、刺串とて、御田の底に串を立て置きたまひて、田夫働かんとせど、足をそこなひ田草など取ることを得ざらしめ、秋さりくれは、たわゝにしなへみのれるみとしを絡繩もて冐して、たふれしめ、又、班駒を御田の中に追ひ放ちたまひて、ふみたふさせたまひき。又、或時は、大神御衣を織らせ玉ふ織殿に、班駒を逆剝にして、御屋根の上より落し入れたまひしなど、なほ、かしこきは新嘗宮とて、忌み清まはりて、御祖神を御祭したまふ、御宮をけかしたまふ。されど、大神なは見なほし、聞きなほし玉ひて、少しも慍め玉はず、恒にたひらかなる心をもて、容したまへり。されど、萬上の至尊の高御位におはしまして、八百萬の神達をまたがひやわらげ玉へりしぞかし。

度量は、人の地位を定むる所なり、たとひ、高き地位にありとも、度量狹溢なるものは久しきを保たず、廣大なる時は、たとひ、下賤にありとも、遂には、衆人を掩ふに至るべきは必然なり。しかして一國は、宰臣の度量大なる時は、君を助け、下を治めて安寧なり。一家は主婦の度、如何によりて、主人の心もさだまり從て盛衰に關すると大なり。世の女子たちよ、一家擧れど、一國となるの心をもて、先づ、其の度量をさだめたまへよ。たとへ家内に小事ありとも、こと〴〵に爭ふ事なく、下々に少しは氣に入らぬ事

ありとも、おほらかに、去おきして、家内を圓滿にをさめ行くこそ、信に主婦として恥なけれ。何事にも、こちたくいひのゝしりて、家をめのたえさるは、其の主の度量狹少なるによるのみ。



もよ女

鹽井ふく子

寛政のころ、信濃の國伊那郡、羽廣村の農、惣助と云ふもゝの養女に、もよと云ふものあり。人とゝなりやさしく、信濃なるそのはゝにしはあらねと、惣助、夫婦を、已がはゝき木とたのみ、父のみと仰ぎしより、偏へにやさしくつかへければ、父も、いとめで、母もいつくしみ、塵をだにすゑじとすれど、もよ女もとより、撫子の庭のをしへを違へず。菓子など人に貰ひぬれど、必ず持ち歸りて二親にしめし、母の與ふるをまちて、之を食す。萬事、此の如くなれば、近隣の者ども擧つて之を賞美せり。惣助もと、飛驒の國高山にすみ、高一石三斗をもちて、不自由なくくらしけるが、明和七年の旱魃に逢うて、世渡りのたよりを失ひ、妻子を具して信濃の國にさまよひ、うつりし後は、朝夕のけぶりもたてかね、いつまでも、夫婦が掌のものとなしおく事能はず。早くも膝下をはなして、平澤村の平之亟と云ふものゝ家に仕へさせしめたり。もよ女時に十一歳、忠臣は、孝子の門に出ると云ふ。諺にも

れず。主につかへて、又、まめやかに、その身は、まだ、若竹のふしも短けれど、長けたるものと起きふしを異にせず、主の命、人の命する事、つゆ背かざれど、主人もよろこび、程にしたがひて、給銀を與へ、夏冬の衣服をも着せ、肴菓子やうの物をも、折りにふれてとらすれど、もよ女は、之を己が身につけんとはせずして、便りもとめて、二親の許に贈り、節句その餘の休日等に暇を貰ふ折りは、他の遊場には、決して、至らず。たゞ親の家をしたひ、父母をとふを、こよなき樂みとし。語るに己が身骨の勞を以てせず。主人の情あつきを語り。父母の心をやすませ、衣の垢つけるは、持ち歸りて、ねぶるまを去りて、之をすゝぎ、又、つゞり、父母もし、つゝがありときけば、夜もねぶらず。とく起きて、晝の事をしをへて、たそかれより、暇を乞ひて、その病をかへりみ、藥をあたゝめ、肩を撫で、腰をさすり、一夜を介抱に明せし、翌日の食物までとゝのへ、ねんごろにいたはりなぐさめて、朝にとく、主の許にかへり、いさゝかも用をかく事なく、あまつさへ、主の費をはぶき、五穀を重んじ、勞苦をいとはず、よくつかへければ、主人も得がたに思ひ、我義子ともなして、さるべき方が嫁がせんと云ひけるを、父母、やうやうおとろへたるを以て、もよ女はしひて、暇をとり、家に歸りて、父と母とを養へり、時に年二十二歳はやもとしの廿歳を越えたり。聘せんと欲する人なきにあらず。養子にやらんと云ふ人もあらざるにあらねど、もよ女は、父母が、老をなげくより外に、己を省るいとまなく、先きに、もよ女をもらひし後に、惣助が、誠の子、彌助するもの出で來れど、家は彌助つぐべし。養子を入るゝ必要もあらず。妾、父母のいつくしみによりて、手も、足ものべたるを、老いたるその人をはぐくまずして、何處に嫁がんやとて、更に耳にもかけざりけり。さるほどに、天明三年となりぬ。世の中なべて凶作にて、夫あり。子あり、日來まづしからず過せしものすら、市に食を求め、饑ゑて

作る丶さへあり。まして女の手一つ、艱苦は例へん方なく、種々の物をとり雑へたる食物の中にても、よき所を撰びで、父母にすゝめ、さらでも、荆釵錢にあたらぬをなほそぎ、薄き衣をはぎ、等して、食物ととりかへ、以て、父母にすゝめ、已れは、たゞ、なげきの涙に、いつも腹をみたしむるばかりなり。のち霜雪をつむ事幾年、もよ女は、偏に夜寒をいとひ、及ばずながら、ふすまをあつくし、衣をかさねしめしかど、枯木、また、春にあたらず、遂に母なる人、空しくなりはてたり。もよ女がなげきは、云ふにものなく、しばらくはいねもせず、食ひもせず、たゞ涙にかきくれけり。後は絶えず墓に詣で、香花をたむけ、膳具を供へ、いますが如くにかきくどきつゝ、物語りして、年月怠る事なかりしとなん。後は父のみに事ふる事、いやあつく、父かねてより、善光寺に詣でん事を願ひけれど、もよ女せめては其の本意を達せしめんものとて、晝は耕作夜は苧をうみ、糸をくり、一心遂に旅費をつくり、寛政四年、父を伴ひて出で、立ちにけり。時に、父の齢七十九歳、道行く事もはか〴〵しからねど、手を引き腰をおし、山坂を背負ひ、七十里の道をかひ〴〵しく介抱して、やがて、つゝがなく詣でしめ、秋のはじめに家に歸りぬ。しかのみならず、もよ女、弟にもやさしく、いよ〳〵、家政を怠らず、やう〳〵家をも起し、朝夕のけぶりも、立つに至り、近傍のものにも信切なりければ、村人擧つて、之を稱し、はては、代官より、領主に聞え、寛政五年の八月、その孝をあつく賞せられ、もよ女に銀、總助に老を養ふ扶持米を賜はりしとなん。

せつ女の傳

鷹尾の松

せつ女は、但馬生野の人なり。文化十二年己丑十一月に、父右太郎、病にて身まかりしより、尋いで、又、夫萬藏も、病を得、翌年五月七日といふに、遂に、死失

せぬ。其の頃、せつ廿六なりけり。夫の病中は、側を離れず。晝はひねもし、夜はよすから、帶をもとかずして、すこしの疎略なき看護は、口善惡なき人々をしてさへ、嘆賞の聲を禁ずる能はざらしめたりき。野邊の營み、亡き人々の後の世のこと、何一ッおろそかなることはあらざりき。家には、なほ、老いたる姑ありけり。朝夕の孝養、亦、人々の袖を濕さしめぬ。されど、世には、猶彼の女の眞心を知らぬも多かりけむ。また年わかき女の、一人の子とてもなけれど、再緣せよとすゝむるものもありけり。かゝることは、いかで、彼の女の能ふことならむ。耳をふさぎてありしか、後には、親族さへに、すゝむるもの、いで來にければ、他の事は、世の人のこゝろに背き申すまじけれども、再緣の事のみはゆるし給はれ。若し强ひてとならば詮方なし、尼となりなむとて、決心翻さしむべくもあらざりければ、其の後は、誰もすゝむるものもなかりしとぞ。かねて、歌を嗜み、加藤千蔭翁のかなの書をならひて、手さへ拙からざりき。夫の身まかりける時の歌に

もろともに泡と消えせでなみた川
　うきせにしつむ身をいかにせむ

又あるときに、

いたつらにたになけくらむおろかさよ
　有るにもあらぬ身に思ふとて

など讀めるにて、其の心のほども思ひやるべし。よろづ、行儀正しく、雜談の場をきらひ、假にも、たわふれ事をいはず、たわふれ云ふ人あれば、會釋もなく、其の處を立ち去れり。いとまある時は土產神、または、夫の墓所に詣づる外、他事なく、げに殊勝なる女なりきとぞ。かくのみして六十八歲にて逝けりといふ。同女の遺せしせつ女集といふものあり。本號漫錄中に收めしもの、卽ち是なり。讀む姬たち、其のこゝろはべにて見てよ。



茶の湯

茶禮初學（承前）

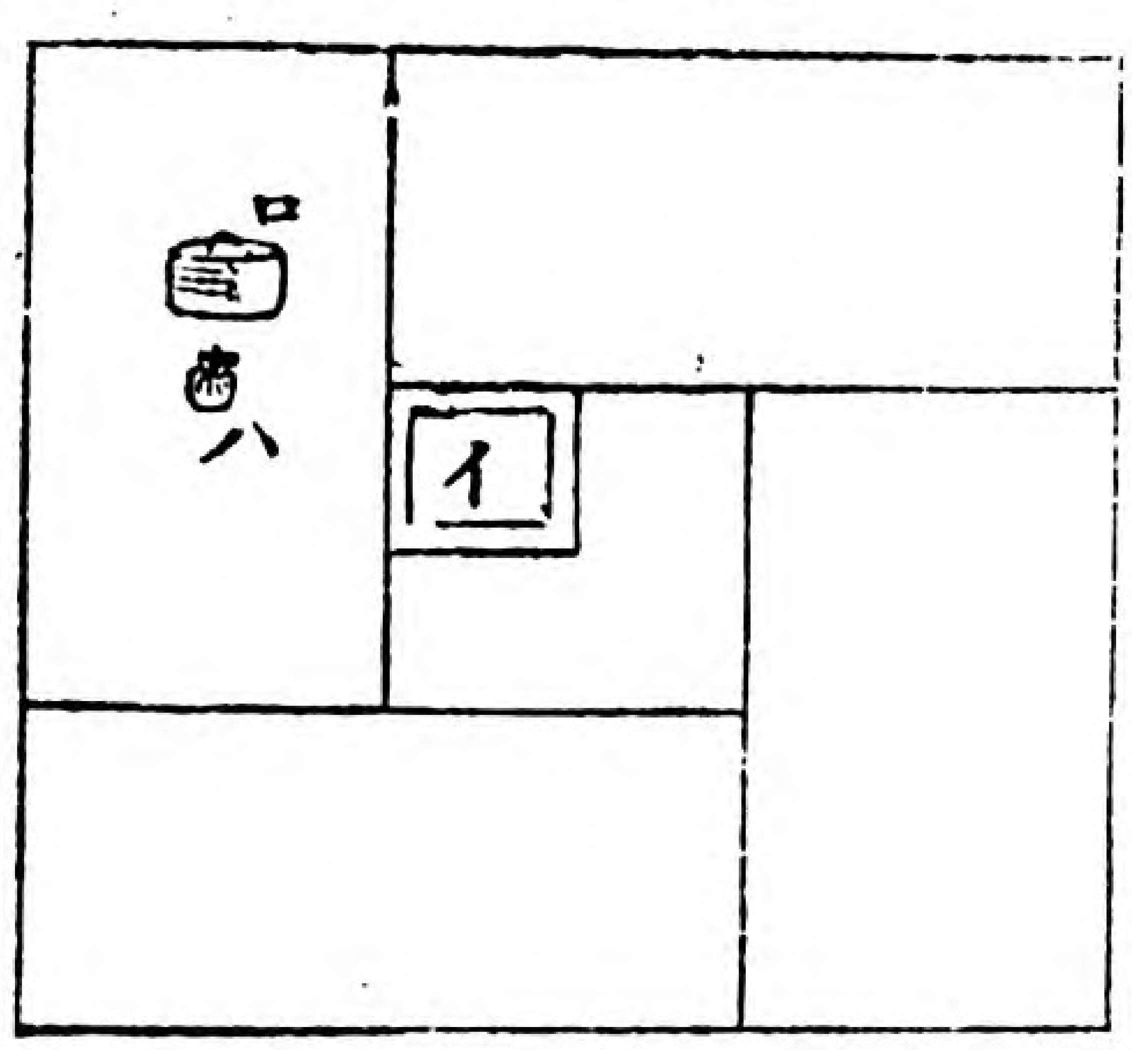
孤峰庵祿仙齋不羨
關　葦雄

四疊半切點前置合の圖

以上、六疊八疊十二疊たりとも、四疊半切の席は、みな同じ。

不羨曰、爐の切形と云ふものは、此の四疊半より廣き切形と云ふものは、無レ之ものなり。是則東山義政候のものせられて、十八疊敷を四つに割り、其の一四疊半なり。如二本文一十二疊は勿論、二十、三十、五十疊と雖、皆此の四疊半切、又四疊半點或は大目點なり。（但し此の四疊半切にて臺目點、爲得らるゝと心得べし。

始め客迎へ入る時飾圖

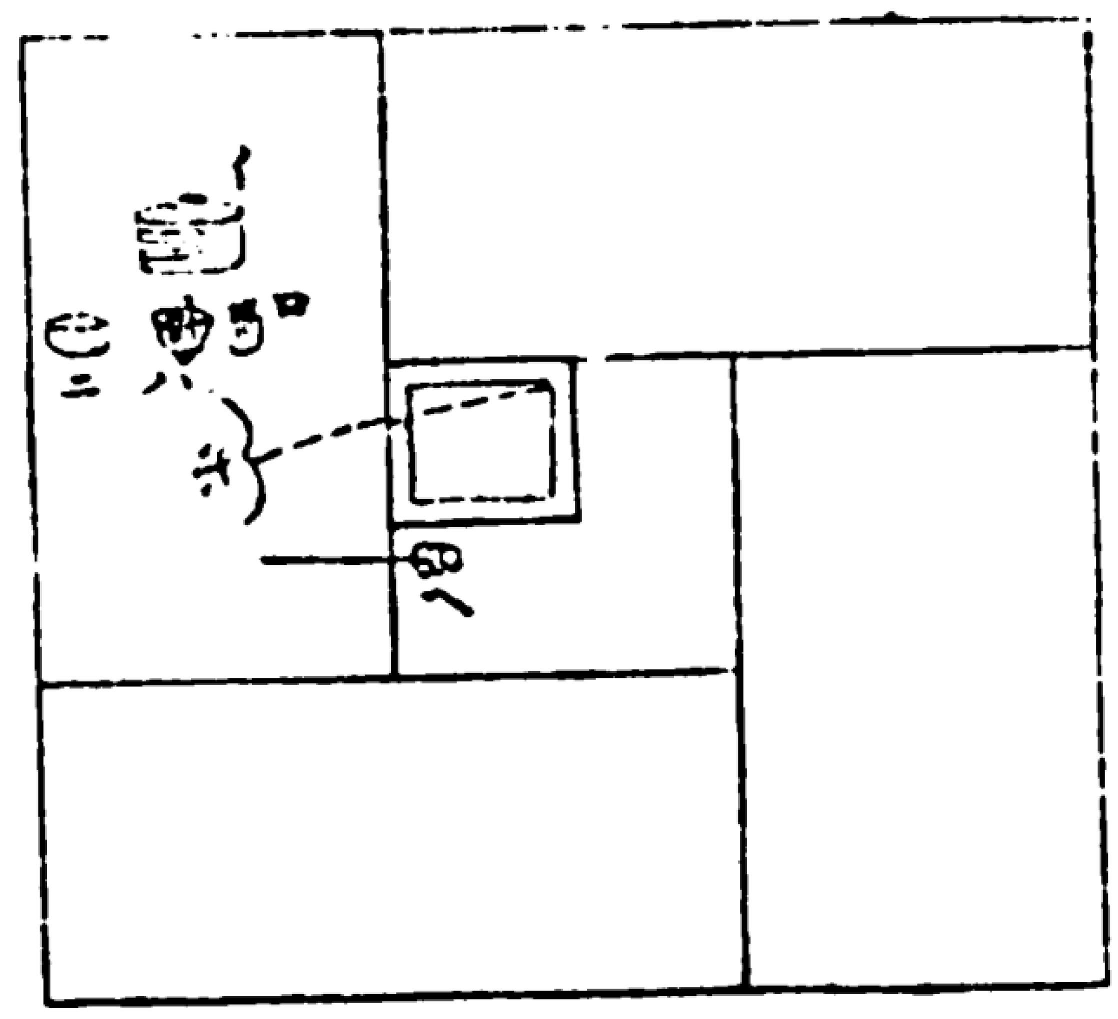


イ　釜
ロ　水指
ハ　茶入

不羨曰、水指は、向前の曲は、水指の盆付向の方、疊三尺二つ割の正中なり。左右は、満中に置付べし。能水指の前面を見るに習有り。置形或は釉藥の厚く、自然景色に見ゆる所を撰むべし。水指の蓋は、ばね一文字になる樣にすべし。又曲物水指は、綴目前に、蓋は木の目を横に、釣瓶水指は、取手竪に釜付の方を明くる樣にすべし。

茶入は、水指の前正中に、大概茶入一つ分明け置べし。離れたるは免し、絶近したるは不レ免。修覆の紐打留は、露と唱へ、不レ建様向へ素直にねせ置べし。

客を迎へ入て點前にかかる圖

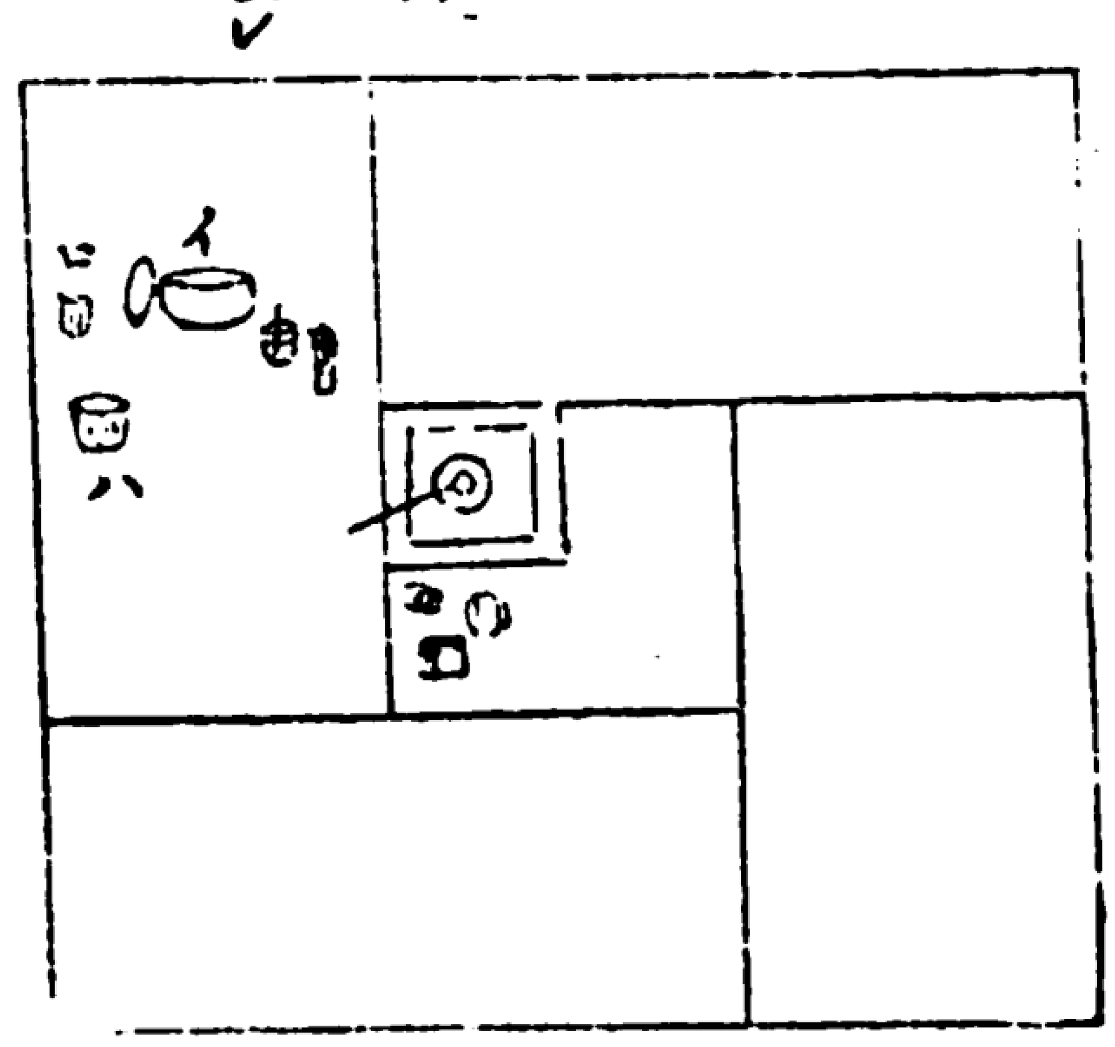


イ 水指　ロ 茶入
ハ 茶碗　ニ 建水
ホ ヒザ　ヘ 柄杓

點主居前膝の寸法は、圖の如くし、炉縁を三つに割り、其の一つ分より向の角を見通す也。柄杓は身の形に引なり。

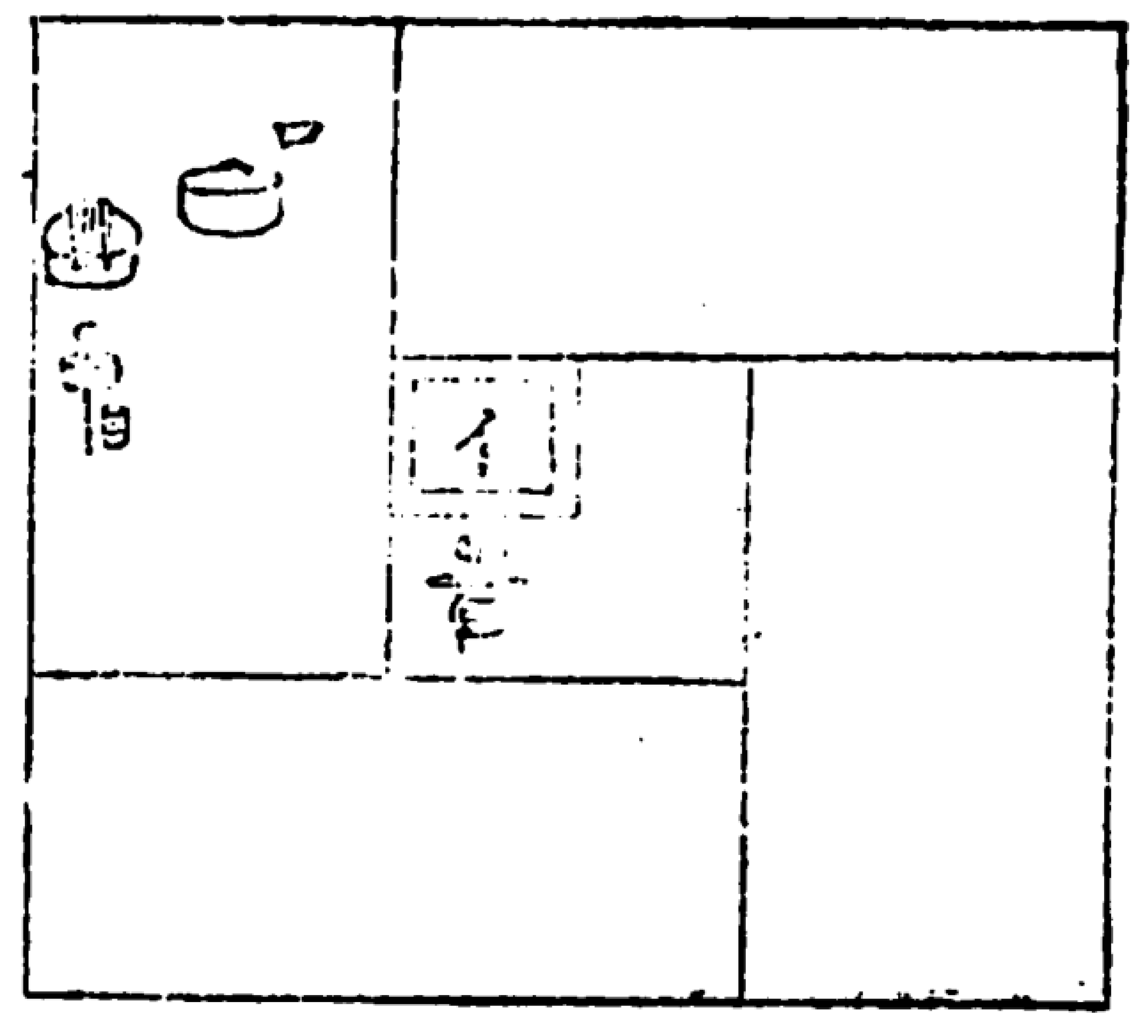
不美曰、居前の事は、故人も大に論究せられたる事にて、居前崩れたる時は、素より茶の可レ點所以なし。雖レ然修業未レ熟せされども、是を會得する事能はず、先爐へ筋違に座して、本文、爐縁三ツ割一ツ分の所を目當に左向ふ角爐縁の内隅を我身の正中に見通し、左の膝頭は、爐縁の左の外法の角にひとしく、右の膝頭は、爐縁の前の方外法の角より、大約八寸位と知べし、最人間は、男女共は身体骨格は其人に寄千差萬別定りなきものなれど、其の人の大小長短により、酌量すべし。

點茶中茶入茶投茶筌如レ圖



イ 水指
ロ フクロ
ハ コボシ

茶碗帛紗出す時、如レ斯。客方より返すも同し。蓋置々様、疊目三ッ目、大蓋中蓋の節は、四ッ目五ッ目の内、左略あるべし。



イ　釜

ロ　水指

茶入茶杓修覆出す時は、釜の環付を定規にすべし。客方より返すも同前、畳打返したるものと知るべし。

茶椀假置建水へ柄杓蓋置たゝみ置て、道具出すなり。

不蔑曰、此四圖は、第百四拾七號より百五拾壹號迄の、爐濃茶手前の圖式を示したるものなれば、右五號と見合詳細を知るべし。

女禮

有住常子

中酒出し様けいこの仕方

長江銚子なれば、右手に、きく金をもち、左手に、まがりの下、ねこ足のうへをもつ、又、燗鍋なれば、口を向にして、つるを、右手にて、下よりもち、左手にて、燗鍋のそこをうけ、持出て、しきゐそとにて、中座して、下に置き、左手を脇につき、右手は猶つるを持てひかへ居り、様子見斗ひ、立出て、下座の方に參り、左手をつき、一すゝみして、一献つぐべし、正面座の時は、貴人の左の方へ進みよりてつぎ、二ひざ引て、右ひざにて立ち、右足より三足引き、右へ廻り、左足よりしづかにあゆみ、御勝手に入るなり。但し、御膳、中に出すこともあり。又、御飯すみたる後に出す禮も有り、何れにても差支なし。

臨時の客の應接（一）

三石直子

近きころは、人の心も浮薄になりまかりて、下女はしたの如きも、主を主とも思ひたらず。ナンノ、わ

れ〳〵は、一年か、半期か、長うて二年とも居ぬ身ぞ。唯是れ、給金の手前に、はたらくなりなど、いと耻しきことを、耻しげもなく、放言する類のみ多かり。其等のもの丶すること、何につけてもこゝろゆくふしあらむや。實に、おろそかなることばかりにて、見るも、聞くも、いぶせきことのみなり。まことに、慨かはしきことならずや。つら〳〵思へば、主人たるもの丶心がけも、今の世は、亦あさましきかたのみ、多かりけり。彼の、口入とやらに頼まば、朝に來り夕に去るとも、下女下男に事かく時もあるまじと、唯目前の便利を思ひ計りで、召し使ふにも、僅の恕といふこともなく、主從の間に情義の存するものあることなし。斯れど、おしなべては無智無學のもの丶多き下女はしたをば、酷には、せむることも得ならぬ樣なり。古の人も、心は賢きより賢きにうつさむ、などかうつらざらむ、といへり。常々、よく訓へさとし、誡めみちびくことを怠らず、眞心を以つて、召し遣はば、如何に心なきものなりとて、おろそかなることをのみ爲むや。臨時客應接の一篇、こと〴〵しけに掲ぐるも、强ち要なきわざともいふべからず。

およそ、人を訪ひし時に、出でむかへたる者の、無禮なるばかり、不快に感ぜらる丶はあらず。先づ、其の家の人々をさへ、うとましうおぼゆるぞかし。然れど、玄關に

案内を乞ふ聲を聞かば、何事をおきても、取次に出づべし。行きながら綿襷、前垂をはづし、玄關、其の他、上り口まで出でむかへ、主人と同輩か、目上とおもはる丶人ならば、兩手をつき、目下と著き人にても、片手を突きて、口上を承るべし。人によりて、敬禮を異にするは、今の世には、爲べからざることのやうに、おもふめれど、あまりに、不相當なる敬禮は、うくる身にも、なか〳〵、不愉快なるものなれば、よく〳〵心すべきことなり。又、如何は

ど賤しげなるものにても、決して、禮を欠ぐやうのことあるべからず。さて、初めての人ならば、入口に待せおきて、主人に申しつぐべし。かねてより、しば〲來る人ならば、時宜により、直に玄關座敷、又は、次の間などへ通し置て、申し上ぐるも可ならむ。客人を座敷へ通す時は、座敷の入口、次の間にて、脇へ身を開き、手をつきて、丁寧に、彼方へ御通り下さるべき由をいふべし。夜分、取次に出づる時は、燈火を持ち出づべし。客人を席に通したる時は、其の燈火をば、とりあへず其の席へ置き、後にはやく座敷の燈火と引替ふるやうにすべし。必ず、客人を暗きところへおく樣の、粗忽あるべからず。又老人、盲者、身体不自由の人などは、よく心づけ、いたはりて、そろ〲と案内すべし。

夏むき、又は暖き日には、庭の方の障子を、跪きて開くべし。庭先、格別見苦しき時などは、閉ておきて、取片付方を勝手へ談ずべし。無人の場合には、茶、煙草盆など出したる後に、庭へ廻り、あまり物音せぬやうに、手早く取り片付、体裁を取繕ひおきて、勝手の方より出でゝ、障子を開くべし。庭に出でたるうちに、若し、座敷にて手を打つか、呼ぶ聲聞ゆとも、勝手の方の者に返事せしめ、庭にては返事すべからず。さて、おのれは、はやく、勝手か、次の間へ廻り、座敷へ出でゝ、用事を承るべし。

客人を、座敷に案内をはらば、早く煙草盆を出すべし、流塵を拂ひ、灰を和げ、先づ、有合の火を、体よく入れ、灰ならしにて灰をかきわげ、火入の緣を拭き、唾壺へ水を少し入れ、火入は客人の左、唾壺は右になるやうに、煙草盆へ組み付け、客人の右の膝の、五六寸前に出すべし。さて、客人の、主人よりも目上の方なるときは、次の間へ下り敷居際にて、同輩若しくは目下の方ならば、客人より三四尺下りたるところに、手を突きて、誰々唯今御目通仕りますとか、御目にかゝりますなど、客に應

して、然るべくいふべし。其の後にて、よき火を、外の煙草盆へいけ、前の通り唾壺を組み付けて、引替へ來るべし。煙草盆なき時は、火入ばかりにても取り替へ、其もなくば、座敷の火入をさげ、手早くいけかへて出すべし。

折形

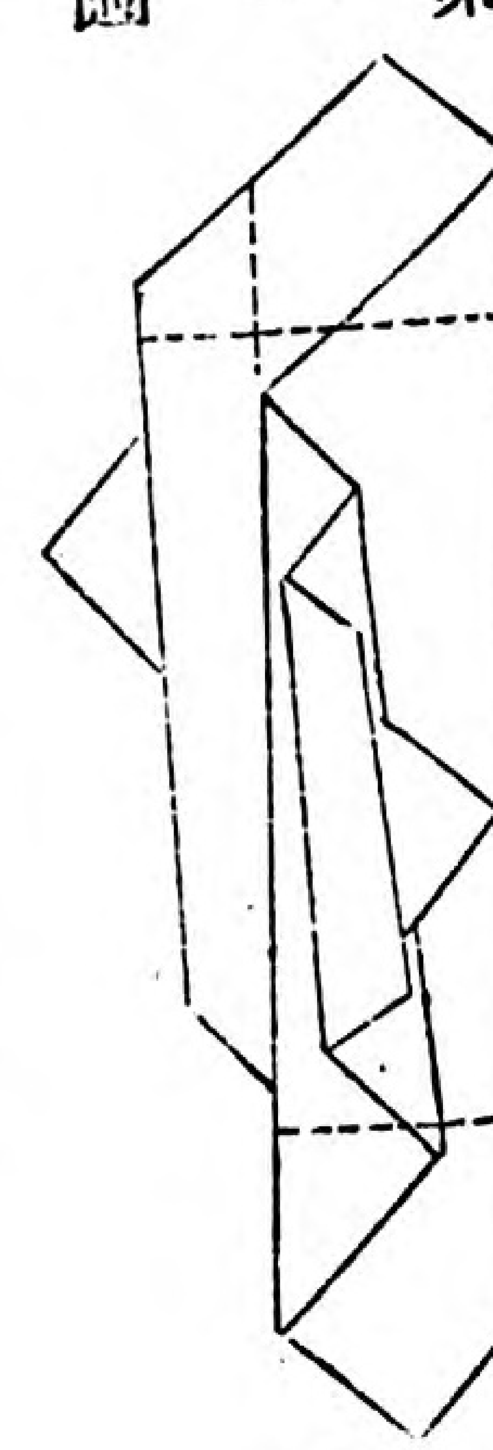
有住くわう子

毛垂髪撫包方

毛だれとは、前にもいひし如く、髪剃のことなり。髪なでとはまげぼうのことにて、其の包方かくのごとし。

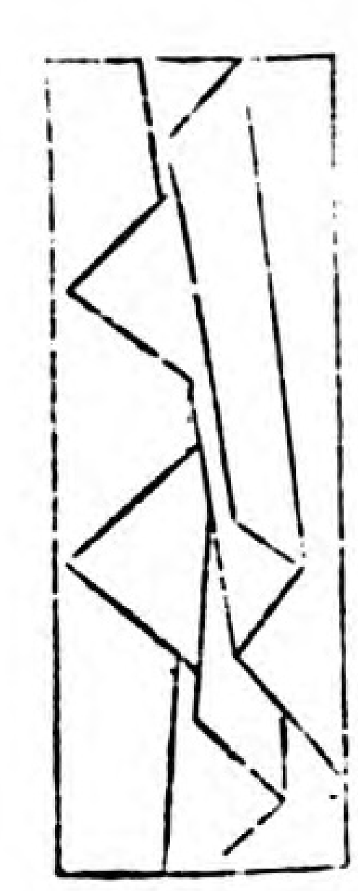
但水引をかくるなり。

第一圖



(初)

第二圖



(完)



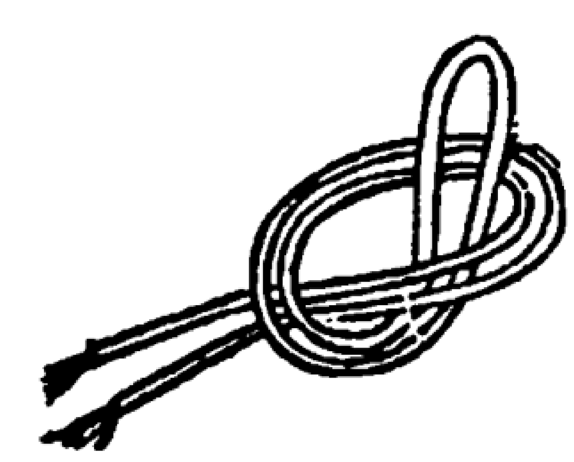
たちぬひ

西山たい子

まるぐけ

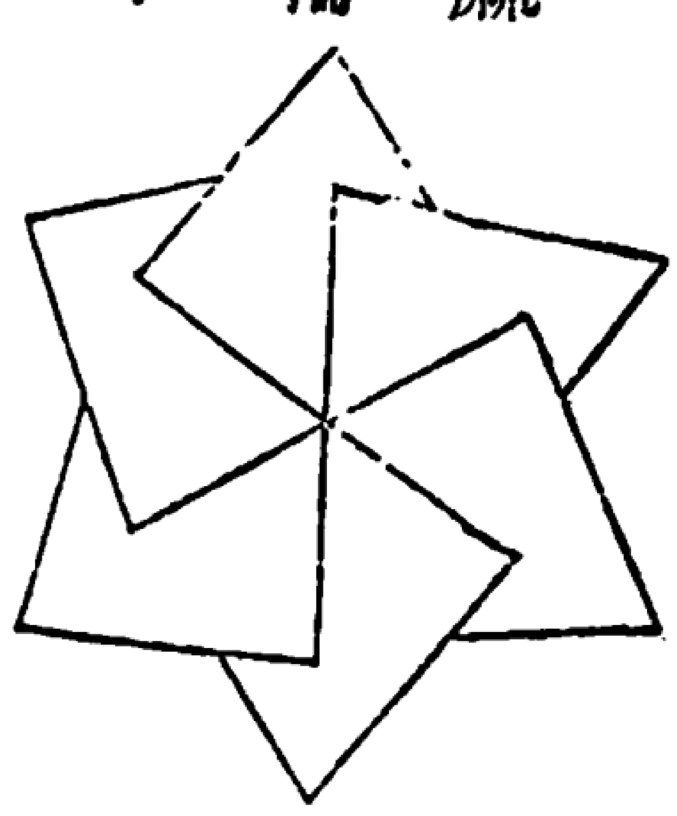
今は、あまりに流行らねど、まるぐけとて、乳呑兒のしむる帶なり。まるぐけと云へど、絎ては形よく、うつくしく出來ず。ぬひて、引きかへして、綿を入るゝも、また、綿、固く、丸く出來ず。これを縫ふに傳授あり。切れは、縮緬、純子等、又、唐ちりめんにてもよし、巾は、四寸ばかり、丈けは、四尺ばかりを要す。又、綿を太めにつくり、眞綿をひき、その綿の、一端に糸をつけおき、それより切れ、たてに、二つに折りて、はしを、少しぞかりぬひ、綿を入れ、綿につけおきし糸を引き出しては、又ぬひ、ぬひては、引き出し、出してはぬひ、ぬひては引きかへし、引き出し、出してはぬひて、はしまでぬひ終るべし。かやうにすれば、綿固く入り、形も丸く、恰好よく出來上るなり。それより、兩はしを大白の糸にてくゝり、房をさぐるなり。帶留、羽織紐等の細き丸絎は、なほ更、かやうにすべし。

三の圖

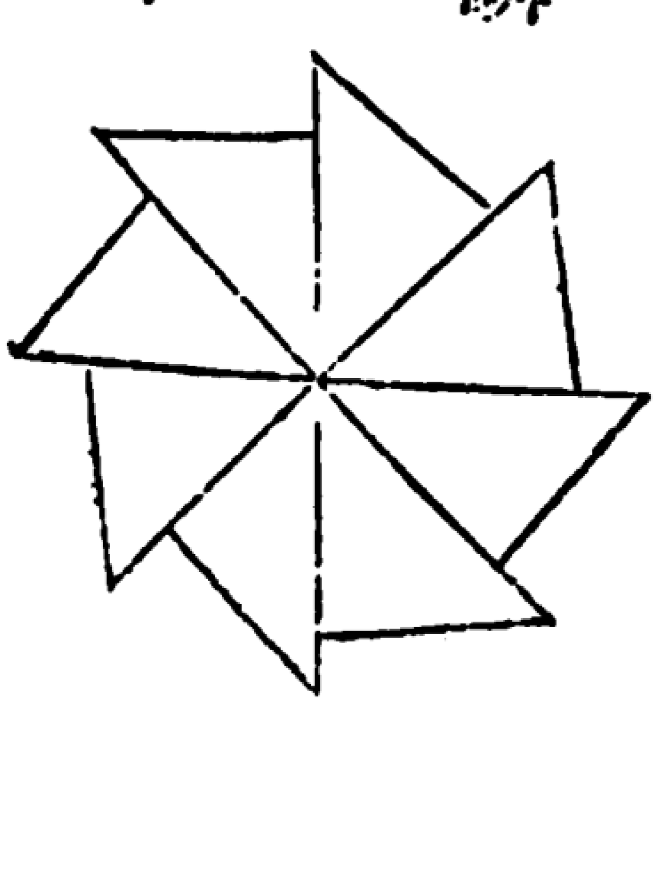


守りぬひ

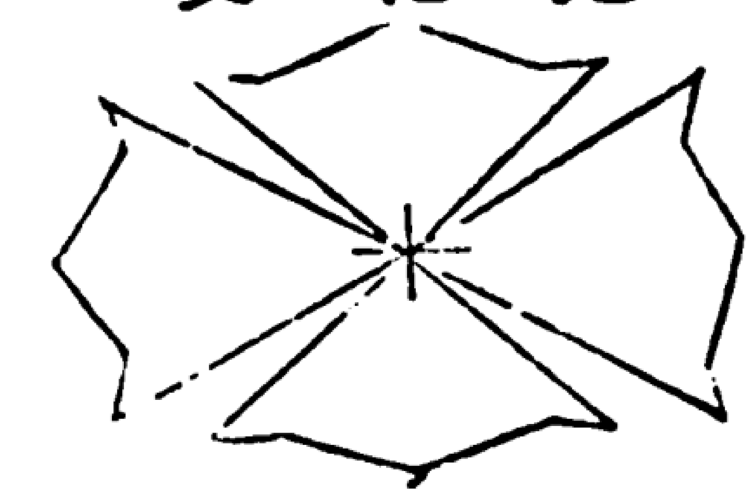
麻輪車



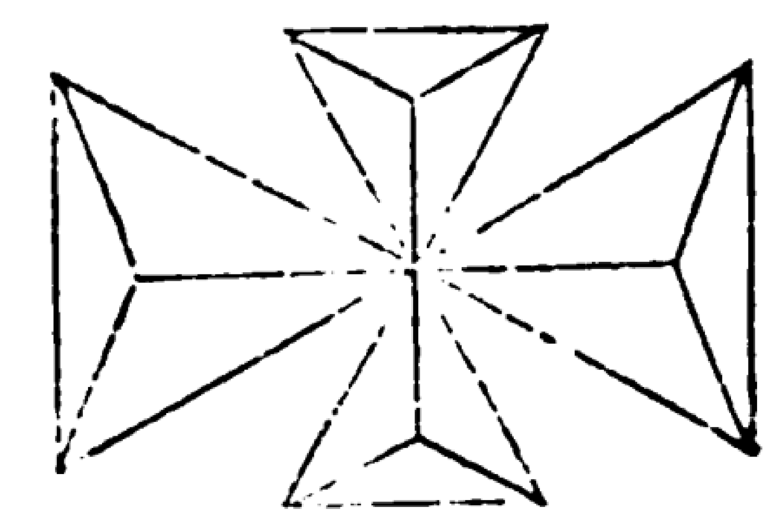
鱗車



鬼花菱



二重鼓



折鶴



だいどころ

季節料理

鯖のせんだ煮

鯖を、三枚に、卸し（又は、丸切にても、宜し）て、暫時、鹽をふり置、鹽を、洗ひおとし、湯煮し、又大根を、薄く、短冊にきり、鹽ゆでになし、椀に盛り、鰹節の煮汁にて、食鹽醤油等にて、鹽梅し、鍋をおろす前に、酢、少量を加へて椀の中に、注ぎ投るべし。

きす焼ぬき蒲鉾製方

先づ、きすの、頭と、尾を去り、三枚に、おろし、腹部の骨をへぎとり、皮を去りて、水にて、能くさらし、布巾にて、水氣をとり、庖丁の背にて、たたき、擂鉢にて、能く擂つぶし、鷄卵の白身と、食鹽をいれ、裏漉にて、こし味淋の、煮きりと、鰹節の煮汁にて、能程に、のばし、板につけ、七りんの下の火をとり、はうろくへ、火を、澤山のせ、天火にて、焼めの、つきたる時、美濃紙を、水にてぬらし、張付け、上の火は、極つよき火にて、焼上るなり。

きすせんべい

きすを、三枚に、おろし、皮を去り、腹部の骨をへぎとり、食鹽、少しふり、板に、美濃紙をしき、其上にのせ、又、美濃紙をきせ、板をのせ、強き壓をおき、六時間程にして、壓を除き、紙を去り、水氣を、能く、ふきとり、食鹽を、少しふり、日光に干し、干

わがりたる時、助炭にかけ、かはかせど、きすせんべいは出來るなり。

あなご茄子里芋甘炙

あなごを、開き、骨を、去り、能程にきり、一寸と、燒き、里芋は、ゆでゝ、茄子は、能程にきり、味淋、醬油にて、鹽梅し、鰹節を加へ、炙あぐる際、胡椒少しを加ふべし。

菜花園

秋の草木いろ〳〵（五）

○忍草　俳諧、季寄季として、出せしは、かの軒端にいりて、齒朶槍の葉のごとき物をいふなるべし。歌によむものは、大にたかへり。

俳　忍のぶくさ宙にぶらりの姿かな　浪化

○蔦　異名、龍艸、赤葛五爪龍、赤潑藤、烏炎（蔦は漢名なり）本朝にては、人家の壁間に植ゑて、秋紅葉す。蔦とは、蔓物の惣名なり。名品類多くして、其の内には、秋紅葉せぬもあれど、連歌の活法の書にも、散とも、色ともなくても秋なりとあり。

○芭蕉　異名甘蕉、芭苴、天苴、やれどせを（九月の季なり）

歌　やまおろしの風にはたへぬはせを葉を　かき根にたのむ宿そものうき　慈圓

俳　舟と成り帆となる風の芭蕉かな　一晶

○景天草　一名、救花草、異名、瓦花、掛壁青、天竹、和名、いきくさ、ちくさ、てきりくさ、ふくれくさ、辨慶草は、兒女子の付し異名也。そら豆の葉に似たり。折取りて、軒に掛れども凋む事なし。後、是を栽られ

は、又、活く也。故にいき草といふなるべし。如此強き草なるより、辨慶草といふ。

○草花　千種の花、百艸の花、野乃花、野の錦、諸草の花は、多く、秋咲故季とす、萩、くず、女郎花、なでしこ、其の外何によらず、秋さく花を云ふ。よつて、歌には、秋のちくさとも、又、八ちくさとも詠り。

歌、古今集

みどりなるひとつ草とぞ春は見し
あきはいろ〳〵の花にぞありける

○鷄頭花　異名、洗手艸、一朶雲、紫冠、花の形、鷄のとさかに似たるゆへ、名つく種類多し。

○雁來紅　眞紅にして、紫色をかぬるものを雁來紅といふ。又、かまつかの花といふ。これ淸少納言の枕草紙に、かまつかの花、雁の來る花と字には書きたり。(下略)如此みえたり。全体、葉青くして、秋に至り、黄緋、相交り、纐纈をなすものを、十樣錦といふ。種類多し。

九月手入すべきもの　（二）

下種すべきもの

罌粟　洛陽　苜蓿　麗春　石竹　紅花　菱　芍藥　百合　剪春羅

收種すべきもの

梧桐　石榴　秋葵　藍種　剪春羅　夜落金錢　鳳仙

澆灌すべきもの（草類肥に宜しく木の類肥を忌む）

牡丹　芍藥　瑞香　剪春羅

培壅

竹園　宜しく大麥糠、或は稻藁に河泥を添へて壅ふべし

整頓すべきもの

牡丹　毎枝、一二頭を留め、餘は、盡く除き去り、芍藥は舊梗を去る。蘭　萬年靑は、分栽、又は、盆中の土を換ふべし。　菊は土を加ふべし。

百合栽培法

山丹は、濕地を忌むものにして、砂地に栽植する時は、

地中の温地、高きに過ぎ、鱗球の發育充分ならざるものなり。此の種は、鱗球の附近に生ずる小鱗球を栽植肥大ならしむるものにして、秋季、莖葉の枯死せんとする頃、親球と隔離し、堆肥、及、油粕を原肥として栽植すべく、九月に本植せば、其の年内に發根し、翌年の發芽を速ならしむべく、一尺五寸巾の畦、上に、四五寸の距離を保たしむるを要す。此の如くせば、栽植翌年の秋季採收し得るに至るものなり。而して、花蕾の發現するに從つて摘除せざれば、鱗球を肥大ならしむる能はざるなり。卷丹は、葉腋間に生ずる鱗球、又は、根の周圍にある小鱗球より繁殖し得べきものにして、後法を以て得策なりとす。蓋し、迅速なる生長をなすものなればなり。此の種は、球根前者よりも大なるものなれば、畦巾を、二尺とし、距離を八寸乃至一尺となすべく、肥料、其の他の手入は、山丹と等しく本植後一年にして、席移植施肥すべく、二年目の七八月頃には、鱗球採收し得るに至るものなり。其の他、鱗片より繁殖し得るものにして、温暖なる場所に、苗床を設けて斜立せしめ、過半土を被ひ、發根するまで葭簀の如きものにて、日覆をなせば容易く、且つ、一時に多量の苗を得べし。



貧窮問答歌一首并短歌

田島隨二

是は、萬葉集にいでたる、山上憶良の歌なり。憶良は、文武、元明、元正、聖武の四朝に仕へ奉りし人にして、大寳元年、遣唐少錄となり、同三年、粟田眞人に從ひて、入唐し、慶雲元年七月に歸朝せり。和銅の末に、從五位に叙せられ、靈龜中伯

者守に任せらる。後、筑前守に轉じ、任を終へて京に歸り、七十四歳にして、天平五年六月に沒せり。紀貫之の古今集の序に、人丸赤人のみをあげて、此の人と、大伴家持とを載せず。然れば、俗間には、人丸赤人のごとき盛名なしとはいへども、決して、人丸、赤人の後にたつべき人々にあらず。若しそれ、貫之の語を學びていはゞ、人丸赤人は、家持、憶良の上にいづることかたく、家持憶良、亦、人丸赤人の後に立つこと難しとやいふべし。共に、和歌の聖なり。皆、萬葉に傳ふべき、佳作をのこせられども、特に、この貧窮問答のごときは、彼の有名なるゴールドスミツスの、寒村行をも凌ぐべき傑作として、學者間に賞せらる。凡べて、憶良の歌には、和歌として上乘の作あるのみならず、彼の令反惑情歌といひ、思子等歌といひ、世道人心を益するもの多し。閑を得ば、つぎ〴〵に註釋を試みむか。

風雜。雨布流欲乃。雨雜。雪布流欲波。爲部母奈久。寒之安禮婆。堅鹽乎。取都豆之呂比。糟湯酒。宇知須須呂比弖。之波夫可比。鼻毗之毗之爾。志可登阿良農。比宜可伎撫而。安禮乎於伎弖。人者安良自等。富己呂倍騰。寒之安禮波。麻被。引可賀布利。布可多衣。安里能許等其等。伎曾倍騰毛。寒夜須良乎。和禮欲利母。貧人乃。父母波。飢寒良牟。妻子等波。乞弖泣良牟。此時者。伊可爾之都都可。汝代者和多流。

かぜまじり、あめふるよの、あめまじり、ゆきふるよは、すべもなく、さむくしあれば、かたしほを、とりつゞしろひ、かすゆざけ、うちすゝろひて、しはぶかひ、はなびしびしに、しかとあらぬ、ひげかきなでて、あれをおきて、ひとはあらじと、ほころへど、さむくしあれば、あさぶすま、ひきかゞぶり、ぬのかたぎぬ、ありのことごと、きそへども、さむきよすらを、われよりも、まづしきひとの、ちゝはゝは、うゑさむからむ、めこどもは、こひてなくらむ、このときは、いかにしつゝ

か、ながよはわたる

天地者。比呂之等伊倍杼。安我多米波。狭也奈理奴流。日月波。安可之等伊倍騰。我多米波。照哉多麻波奴。人皆可。吾耳也之可流。和久良婆爾。比等等波安流乎。比等奈美爾。安禮母作乎。綿毛奈伎。布可多衣乃。美留乃其等。和和氣佐我禮流。可可布能尾。肩爾打懸。布勢伊保能。麻宜伊保乃内爾。直土爾。藁解敷而。父母波。枕乃可多爾。妻子等母波。足乃方爾。圍居而。憂吟。可麻度柔播。火氣布伎多弖受。許之伎爾波。久毛能須可伎弖。飯炊。事毛和須禮提。奴延鳥乃。能杼與比居爾。伊等乃伎提。短物乎。端伎流等。云之如。楚取。五十戸長我許恵波。寢屋度麻低。來立呼比奴。可久婆可里。須部奈伎物能可。世間乃道。

あめつちは、ひろしといへど、あがためは、せばくやなりぬる、ひつきは、あかしといへど、あがためは、てりやたまはぬ、ひとみなか、われのみやしかる、わくらばに、ひとゝはあるを、ひとなみに、あれもなれるを、わたもなき、ぬのかたぎぬの、みるのごと、わわけさがれるかゞふのみ、かたにうちかけ、ふせいほの、まげいほのうちに、ひたつちに、わらときしきて、ちゝはゝは、まくらのかたに、めこどもは、あとのへに、かくみゐて、うれへさまよひ、かまどには、けぶりふきたてず、こしきには、くものすかきて、いひかしく、こともわすれて、ぬえどりの、のどよひをるに、いとのきて、みじかきものを、はしきると、いへるがごとく、しもとゝる、さとをさがこゑは、ねやどまで、きたちよむひぬ、かくむかり、すべなきものか、よのなかのみち

世間乎、宇之等夜佐之等、於母倍杼母、飛立可禰都、鳥爾之安良禰婆

よのなかをうしとやさしと、おもへども、とびたちかねつ、とりにしあらねば

かたしは和名抄(わめうせう)に石鹽一名白鹽、又有二黒鹽一今按俗呼二黒鹽一爲二堅鹽一とあり。かたまりたる鹽(しほ)なり○つ

つしろひツヽシリを、延べていへるなり。下なるすろひ、志はぶかひ、はころへもスヽリ、シハブキ、ホコレといふべきを、延べていへるなり。つゝしり、源氏帚木の巻に、つゝしりうたふといふことあり。即ち、一口つゞ、きれ〳〵にうたふを云へり、こゝも、堅鹽を一口つゞ、食ひかきくひかきなどしたるをいへるなり○かすゆざけ酒の糟に、湯を和したるものなりといふ○はなびし〳〵に嚔しきりにするをいへり○あれ我をかくもいふ○あさぶすま麻衾なりふすまは、寝る時に、身の上に被ふもの○かゝぶり被りといふにおなじ○ぬのかたきぬ短くて、肩むかりに着るものなるべしといふ○ありのこと〴〵有るかぎりを悉くといふ意なり○よすら終夜なり○ながよはわたる汝が世は渡るなり。即ち如何にしてこの悲惨なる生活をつゞけむとするかとなり。

風まじりに、雨降る夜、雨まじりに雪降る夜は、せむ方もなく、寒くマアあれた、堅鹽を食ひては糟湯酒を飲みつゝ、咳をし、嚔を志きりにしながら、あるかなきかの髭をかき撫でゝ、我を措きては、世に人らしき人もなしと、心驕りし居れど。又、斯る夜の寒さには、堪へがたけれど、麻衾をひき被り、布肩衣の有る限り悉く、着襲ぬれども、猶凌ぎかぬる終夜をマア。我よりも一層貧しき人々は如何ならむよ。父母は、飢に苦しみ、寒にせめらるゝならむ。妻子は、飢寒に堪へかねて、食を乞ひ、暖を求めて、泣くならむ。アハレ、此の時は、如何にして、汝はこの世に居りはてむはするぞ。

是までは問にして、次の句より、また自ら答ふるとむなり。もと、一首の歌なれども、便宜のために二つにわかてるなり。

○わくらむにたまさかに、まれになどいふ意なり○わゝけ破れといふに同し○かゞふ破れさけて、何にもならぬ、布きれをいふ○ふせいほ伏せ家といふに同じく、家根を土にうちつけたらん様なる、家をい

ふ○まけいはまがり傾きて、倒れむかりの、家をいふなり○ひたつち間に何もなき、土ばかりのところなり○あとのへ足の方どいふ意なり○こしき飯を炊く器なり○かきてかけてといふにおなし。前にあるかくみも、かこみとおなしことなり○ぬえどりの枕詞なり○のどよひをるなすこともなく、さまよひをるをいふ。或は呻吟しをる意なりともいへり。○いとのきていとゞといふにおなし○さとをさ戸令に、「凡戸以二五十戸一爲レ里毎レ里置二長一人一とある、即ち其の長なり

天地は、廣大なりといへども、我一人の爲めには、狹くやアなりしならんか。日や、月や、其の光、明なりといへども、我一人のためには、照り給はぬならむかやア。人皆我と同じきか。或は又、我一人のみ、斯くの如き境遇に居るものか。あはれ。たま〳〵に、人間といはるゝ身にあるものをやア。我も亦、人間總べてある如く、人とは成れるものをやア。「斯く風まじり雨降る夜の、雨まじり雪降る夜の堪へ難き寒き時に」綿花も入らぬ布肩衣の、而かも、海松の如くに、破れ下れる、爲む樣もなき帛を、肩にうち懸くるのみにて、傾き壞れし陋屋の中に居りて、土の上に、唯わづかに藁を敷きて、其の上に寢ね、父母は、前に、妻子は、後に、圍み居て、憂苦呻吟す。竈には、久しく煙をたてず。甑には、既に蛛蜘巣をかけたり。されど、飯炊ぐ術も、忘るゝまでに、長く飢渇にせめられ、坐して、唯死を待つが如き、境遇に沈めるものを、かてゝ加へて、甚短きものを其の上にも短うせむとて、端を截るといへる樣に、田租賦役を督責する、恐しき里長の譴促する聲は、寢居る直傍まで來り喚びぬ。あな、あはれ。斯くの如くにやア、術なきものなるか。世わたりといふものは。アゝ。

徒然草に『心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。或るあらゑびすの、おそろしげなるが、か

たへの人にあひて、御子はおはすやと問ひしに、一人も持ち侍らずと答へしかば、さては、物の哀は知り給はじ。情なき御心にぞ、ものし給ふらむと、いと恐し。子ゆゑにこそ、萬のあはれは、思ひ知らるれといひたりし、然もありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝるもの〻心に、慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子もちてこそ、親のこゝろざしは、思ひ知るなれ』といへり。實に、是情の至誠なり。豈に又田舎の人、都會の人の差別あらむや。又同書同條に『おやのため、妻子のためには、耻をもわすれ、盗も爲つべき事なり』ともいへり。云ひすぎたりとは思はるれど、實には、世の中に例なきことにもあらず。然れば、親子兄弟持たるものは、常常に萬のこと、よく意を用ゐて、圓滿なる家庭に幸福なる生涯をすごさむことを心がくべきなり。



漫録

神國女訓抄

山内貫道

日頃、雨ふりつゞきて、いとつれ〲なるまゝに、したしき友を訪ひぬ。うちよりなにくれ物がたりしつゝあるまに、客きたれりとて、友は、室をさりながら、なになりと探しみたまへとあれど、立あがり、棚のあなたざま見れば、ふとき糸なはもて、まろめ束ねし反古ありけり。なにかならむと、徐かに取おろして、塵うちはらひて、ひもとけば、其の内に此の一編ありき。讀くだしみれば、姫たちの、一度は聞きてあるべきふしの多ければ、さは本誌にものせむよけむと、友にこひ持ちかへりぬ。次號より、順

を追ひて、かゝけむ。先づこゝには序文のみを出しぬ。（吉野眞澄しるす）

上は、天の時に律り、下は水土に襲りて、敎を施すは、人師の軌範にして、もし其の時、その地をしらずんば、却て、人をして迷はしむる邪路となる。愼まざるべけんや。そも〳〵、我大日本の、特に神國と稱するゆゑは、開國の運、水土の性、神妙不測にして、神皇統御の靈域なればなり。嗚呼、天の益人は、皆、天地の靈氣をうけ、神明の光胤をいたゞきながら、神道を信せずんば、永く生死の闇に沈み、根の國、底の國にさまよひなん。誰か、これを恐懼ざらむ。然かるに、中世より、釋氏法便說のみ盛にして、己が、身の外に佛身を說き、穢土の外に淨土を示す。彼を取り、此を捨て、ひたすら魂を、西方に飛さしむ。故に　おのづから、本國を賤しみ、神祇を輕慢す。かくの如き時は、唯、神道にそむくのみならず、法身實義の眞敎を失ふ。是れ、三寶の罪人ならずや。亂世極惡の衆生には　しばらく利する所ありといへども、今や、神君の靈德を以て、國治り、民、豐なり。賞罰儼明にして、たま〳〵、罪を犯すものあれど、一罪、半罪にて決斷し給へれば、（中略）五逆、十罪をつくるものなどなし。閻王の支配にあづからんや。此の國、此の時に生れて、下品下生を屑とすべき樣なし。しかるに、頑僧亂世隨機の說を改めず。上は、天時に逆ひ、下は水土を顧ず、人を誣る事甚し、就中、神道は、女人を親み、釋氏は、五障を說く、是れ全く、水土の變氣にして、敎化の差別、只、天壤のみならず、能々辨せずんば有るべからず。頃日、二三の女子の需に應じて、その大略を記して、神國女訓抄と題し侍る。其の言、拙なしといへども、高きにのぼり、遠きに行く、一助ともならん歟。明和二年丙冬至

攝州東成郡上宮神主
山口日向大神貫道書

續人名（四）

釋　法　忍

婦人の三從とて、女に、三ツのしたがふ道有り。家にありては、父母にしたがひ、他へ緣付ては、夫にしたがひ、老ては子にしたがふと、いにしへのひじりのをしへにも見えけり〳〵。されば女は、いとけなき時より老に至るまで、人にしたがふものなれど、ものごとうちむにして、人とあらそひつのる事なく、たとへ、理を持ちながらも、十分にいはでことばの內にふくみつけつけしうなく、ことばをあらさで、いかにもものやはらかに、しと〳〵との給はんこそ、いとうつくしう見え侍るものにておはしまし候。女の人とあらそひ、かほをあかめ、居だけたかに成、たゝみをうちたゝき、こゑおそろしくことばをあらして、理くつをいふは、殊なう見ぐるしく、あいそつきたるけはひにて、見るもいぶせくあさましきすがたにておはしまし候。ましてや、この身をまかせしたがふべき夫にむかひ、ことばをすこしもあらそふべき道理おはしまさず。理をまけても、夫にしたがふが、つまの習ひにておはしまし候。されどとて、その夫、身持、ほうらつにて、大酒、ばくえき、その外、身の害になることなど、身上の爲よろしからぬをもかまはず、夫の心まかせにせよとには侍らず。夫の身のうへも、よろしからぬ事おはしまし意見など仰あらんには、時節をかんがへ、機嫌をとり、心をやはらげ、うちとのものにも、きかせぬやうにさしむかひにてことばをやはらげ、夫の心にさはらぬやうに、しんじつをもつて、いひなだめ、一たびはいさめ、一たびはなげき、夫のがてん行やうに、まことを盡して、のたまはゞ、いか成無道の夫なりとも、わがために、心を盡し、なげきかなしみ意見するを、あしくきかんやうもなく、もちゐずといふこと有べからず。しかるを、女房の身として、をつとを仕置かんと人の聞をもはゞからず、うちとのものゝまへをもかまはず、か

さ高につひのゝしる故、男の意地にて、みす〱手まへにもあしとしりながらも、女房にいひこめられてはをらぬものなり。これは、女房のはからひあしく、時節をしらず、物いひかどたつ故、その理は尤なれども、をつとにむかひ、はぢをあたへ、ないかしろ成いひかた、すいさんなりと、はらをたて、それからは、ゆふにまくばどといひつのり、一寸もまけぬ氣になり、本理はわきになりて、女房のふとどきが、おものけんくはとなり。打たゝかれ、さるの、はしれのと、夫のためになることもいひとゝけず、かへつて、身のなんぎとなる。女房は、又、をつとのためをおもうていふものをきゝわけないさへあるに、打たゝき、むりのうへに、むりをかさねいひたいまゝばかりと、理を、一途におもふ故に、手まへのいひかたの道にそむけたるをしらず、爰ばかりが日が照る、をとこひでりはあるまじと、はや出で行く氣になり。おとこも、初めおどしにいひしも、女房にさやう出られては、引かぬ氣になり、あたりとなりのさへてもきかず、終には、りべつし侍ぬ。是、夫のかたはむりながら、理あり。これを非の内の理と申候ふ也。又女房のかたは、全くことわりなれども、夫にむかひ申しかた、道にそむきたる所あるし、是を理の内の非と申侍ふなり。つね〱とても、此のたぐひあり。たとへば、奉公人など、ふとあやまちありしとき、ことばをあらくして、はしたないやしめ云はるゝ時、そのもの、こゝろに、なるほどあやまちせしは、わが、不調法なれどしかり給ふは、尤なれど、あれほど迄には有まじき事と、かへつて根をふくみ、あたかたきの様におもふものなり。されど口はわざはひのかど、舌は、わざはひの根なりとは、か様の事にておはしまし候。惣じて、物をほどこすばかりを情とは申さず候。少しの心入ことども情にて、その人のために、命をもうしなひ、又、少のことばの恨にて、あたかたきにもなり候事、古今にためし多き御事にておはしまし候。まして、夫婦の中などにて、ことどとあ

らすと、以ての外の辨事にておはしまし候まゝ、よく
よく御つゝしみかんようの御事にておはしまし候。鴛
鴦といふものは、鳥類なれども、をとりのおとにつき
て、先だつことをせず、そのをとり、獵人のためにと
らるれど、ふたゝび外のをとりにつかはず、貞の道有
故に、君子、夫婦の道、正しきためしに引きたり〳〵。鳥
類すら然り、いはんや、人の身においてをや。みつか
らかへりみて、はぢおもふべきことにおはしまし候也。
あなかしこ〳〵。

わすれしと心にちかへたをやめの
　人に志たがふみつのをしへを
朝かすみ花の顔ぞせよそはふも
　道のためぞと身をかへりみよ

（續人名巻二終）

さゝし草（二）

故兒島願齋

父母その家をのがれ出で遠きに在らむ
たつね行くべき事

明の王原は、いたりて孝なる人なりき。いとけなきとき、父の王珣ゆゑありて、その地をのがれさり、いつこともなく逃れゆきけり。王原、ふかくなげきて、あなたこなた尋ねもとむることやまず。折しも、日くれぬれど、ある神祠のうちに宿りけるが、寝るかと思へは、輝縣といふを尋ぬべしと夢む。こは神のしわざなりとおもひつき、其の寺にたつね至れど、住持の僧、王原にむかひ、ことのよしを、くはしくきゝて、後、王珣を出して遇はしむ。父子とも、ものをもいはずして、涙にむせかへりけり。されども、王珣歸る心もなく、われ、妻子をすつること二十年にあまれり。何の面目ありてか、ふたゝび、いましか母を見むやといふ。王原

は、なみだながら、父の袂をひき、是非ともかへられてよといへど、住持もあはれと思ひけん、四海の廣きに、父子、かくまで相會ふ事を得たるは、人力にあらず、これひとへに、天の助ならずや。誠の天に通ずるは、孝心なる故なりと、强てかへしたりとなん。玉珣年、六十四なりとかや。

赤穂に、藤田自傚といふ醫師あり。術は、殊に鍼に妙なり。又、書をも能せり。時の人、これを賞したり。もと、江府の産なり。いとけなき時、その母、追ひ出されて、赤穂、何がしの家に再嫁し、自傚は、父の家にそだちて、父への事へも孝なりしが、父身まかりて。後また、母を思ふこといと切なりけり、父の神靈へはおそれあれどもとて、住なれし江府を立いで、縁をもとめて、赤穂の浦にたづねきたり、いつとなく、居をいとなみて、朝夕、母の安否をうかゝひしとなん。自傚か、孝心、そのさま推しはかるべし。唐土の末壽間が、七歳にして、母にわかれ、五十年すきて、はからず、母にめくりあひしも、誠の天に通ずるゆゑなり。自傚は、まことに末壽間をしたふ人ならむ。今の世にても、父母の家を遁れ、とほきにいますものあらば、子たるもの、王原末壽間か跡をふみて、自傚かことをたつねうべし。但し、禮には、出母には、喪せずといへども、親をおもふの情やみかたけれど、時にしたがひ、心の内にて、道にかなふやうにはからふべし。

日本人の性質（二）

これから一体日本はどうなりますか。内地雜居など、云ふことも起つて來ますが、此の十數年以來まア明治十年頃より、人情は輕薄になッて、法律の世の中だと云ふことで、いろ〳〵の法律を出した、法律は、入用には相違ない、民法とか商法とか刑法と云ふものなくてはならぬが、之は國を治むる機關でありますけれども、近來訴訟事件など非常に澤山ある。破廉恥、詐欺

取財なども、澤山出て來ます、斯う云ふ風に成り行くと云ふと、此の國の行末はどう云ふものであろうかと心配をして居ります、……………此の世の中に德義を重んじ思ひ付いた事業を貫いて往かうと云ふことは六ケ敷いやうでありますが、茲に寄ッて居る方々が私初め自分で愼みさへすれば自然と國が治まるのである、父母兄弟妻子和合してやると云ふのは、人世の仕合でありますから、それを行ッて、自分の身の上を愼み、家内和合をすれば、それで濟んで居る、他人の世話をするには及ばぬ、自分一個愼んで、子供を養育してやれば、誠に國が進歩して面倒なく往ける、一度に人のことまで世話をしやうと思ふからいけぬけれども、銘々のことゝすれば、十人百人千人一萬人十萬人百千萬人と云ふやうに及ぼして往くから、面倒もないことだ、それに、自分を修むることがいかぬのである、大學や中庸に言ッてある通り國を始め天下を齊ふると云ふことも身を脩むるより出つることで誠意正心より起るので身を脩め家を齊ふれば國治まるので少しも六ケ敷いことはない、併し、今の世の中に誠意正心にやると云ふものは、滅多にないのであります、世上の一般を見渡せば誠に危い、日本は危ぶない、……………人の世話をするに及ばぬ、自分だけ愼んで名譽を損じないやうにすればよい、金持になり大きな家を拵へると云ふことも結構であるが、急に拵へやうと思ッても、それはいかぬ、農家に育ッたものは農家、商家に育ッたものは商家に、夫々祖先から傳ッたものを、相當に殖やすなら殖すがよいが、横道からやッて殖やすやうなことをするのは宜敷くない、私はさう云ふことはしたくない、非道を以て金持になり富貴になると云ふことは宜敷くないと思ふ、東京などはさう云ふものが澤山ある、今金持になッて居るものは私共が知つて居るがそれは中々恐しいことをして居る、……………今日東京に出て居る所の靑年あなた方の知り人の中にも、さう云ふ方はありませうが、澤山の書生を世話をする其の中には、

善くなッたものもあり、惡くなッた者もある、仕舞には持逃をするとか盜をするとか金を借りて其の儘逃げたと云ふものも多い、……間違つたことをして僥倖を得やうと云ふのは間違だ、惡いことをする人も、最初は惡いことをせぬ、遂に、段々迫ッて惡いことをするやうになる、それでまあ、誠實に事をやり人を欺かぬと云ふやうにしなければならぬ……

人間の一番大事なことは勇氣を養はなければならぬが、勇氣と云ふことは、口喧ましいことを言ッて議論をするとか、只口先ばかりで騷ぐのでない、……

……大事に當ッてチャンと物を極めて行ふと云ふやうな人は誠に少ない、先づ言ハヾ口から先きに生れたと云ふ風な人が多い、勇氣と云うても、只少しのことに議論をしたり、喧ましいことを言ふ、人と直くに力づくになると云ふことは、何んでもない、詰り勇氣と云ふことは、支那の語で言ふならば、沈勇と云ふことで、勇氣があるけれども外に顯れない、極く温順に見ゆるが大事に當ッては一歩も退かぬと云ふものでなければならぬ、口先き計りで、大事に當ッては用に立たぬ、さう云ふ風な人が、役に立たぬ、只八釜敷い議論をしたり、若い書生の中に、政治論をする……學問の出來ぬ中に格別の書物も讀まずして、只口ばかり達者になる斯ふ云ふ者は、世の爲になることが少ない、それで、何卒、能く時世の變化を考へて、正道を履んで大事を成し遂げやうと云ふことを心掛けるやうにしなければならぬ、……無論相應に親から傳ッて居る所の財產を護り、益殖やして往くやうにすると云ふことは極く宜しい、大抵御一新前に豪家であつた金持であッたと云ふものは、今日は衰へて居る、私共にも大分親類がありましたが、親讓りの田畑も賣拂ひ、何處へ行ッたか分らぬと云ふやうなものが澤山あります、是等は世の變化で、御一新のあることを考へなかッた、以前でやうに考へて華美の風をやッて、是迄質朴であッた家が、立派な門を拵へるとか、家屋を新築をする

とか、衣服まで立派な羽織を着とか立派な袴を穿くと云ふやうに、左樣云ふ風になつて貧乏をした、………

主從心得草（前承）

諏訪忠元

遠方へやつた子供は、逢たい、見たいと思ふ筈なれ共、現に江戸の者は、娘を、御屋敷方へ、御奉公に上げ置、毎日でも使ひがある者なれど、宿下はなく共よささうな者也。然るに、何年目には宿下りをすると指を折て、待て居る。況や、遠方に在て、十年も、二十年も顔見る事ならぬ親達は案事る筈、逢たがる筈也。是は、尤千萬と思ふべし。又、江戸ッ子は、何所の御店に勤めて居る共、毎日も逢にゆける。又、使ひに出た次手にはよりもする。我家に居るも、同前なれ共、正月十六日には來る、七月十六日には來ると、うまい物を調へて、待て居るじやないか。是等は待にも及ぬ事也。度々來て、世話をかけるから、二年や、三年は來る事なかれといひさうな者也。然るに、右樣の事をいふ親は、一人もなし。江戸廣しといへ共、終に見た事なし。聞た事なし。是は親の慈悲にして、逢うても〳〵、逢たらぬ故也。況や、百里二百里三百里も隔ちたる親達の事なれど逢たがるも尤千萬也。又、二十年目三十年目に逢事なれば、是程の嬉しさは、跡にも、先にもあるべからず。嬉し涙にむせんで物のいはれぬも道理至極と思ふべし。

然るに、折角遠方の所海山へだてて、出世に來ながら、家業も身に入みず、不埒放蕩にして、主人の物を盗み、酒をのみ、女郎を買抔するは、我身知らずの大馬鹿者也。御主人には、大損をかけ、已は、貧乏の地獄へ落て、一生難儀大恥也。朋輩の者には顔は合せがたし。世間はせまくなつて、出世の道ふつになし。又、在所の親達は、案事煩うて、夜の目もあはす、なき悲ふ玉ふらん。不孝不忠の大罪遁るべからず。此の罪むかりて

も、生々世々、貧乏難儀の種蒔也。恐るべし。愼むべし。何卒辛抱を致し、家業を出精し、主人、親大事を忘るべからず。主人、親さへ大事にする心あらば、おまりわるき事はなき者也。何卒在所の親達に安心させ、追々出世の咄しの聞えるやうにすべし。さすれば、其の身も安穩、追々立身出世せん事疑ひなし。

又、一切の奉公人、宿に、一ッ尋ね度事あり。大切な親にわかれ、生れ古郷をふり捨て、遠方の江戸へ來る事何の爲なるか。承りたし。不埒、だらく、かさかき、鼻を落しに來たのか、又、立身出世に來たのか、しかと承りたし。是は。よくしれるやうに眞直にいひわけすべし。いひわけは、出來がたかるべし。知れたる事なれば、くどくはいわぬ。不埒、だらく、鼻たれか奉公人共、江戸へ、何しに來たといふ事を、深く考へて、是より、心を取直し、不埒だらくをやめて、急度辛抱を致し、家業を出精して、主家の御爲になるべし。左すれば、我身の出世も、其内にあり。是を、主從、親子目出度人といふ。何卒、よき人となつて、一家、親類、何事の寄合にも、上座をして、いふ事の通る人となるべし。此の一段をよく讀て、深く考ふべし。

いろは短歌に、爲になる事いふ者いかて、毒をあてかう人がすきとあり。是に相違ない。中年、以下の者共は、親の心遣ひも、我身の難儀となる事もしらず、何の辨もなく、人の飛所へ、われも飛び、不埒放蕩、此の上なし。親共のいふ事は、今時の風にあはず慶長時代の分別なり抔というて、そしる友達を、よい人と思うて、父母の仰を少しもきかぬ、どうらく仲間かいふには、父母のいふ事をあいさつすれは、六ヶしい、たび〳〵いうてもきかされど、後には、親も退屈して、いはぬやうになり。又、親父、御袋はやかて、位牌になるからかまはずにれけ。位牌にさへなれば、此方の心任せといふ人抔を、眞實の友と思ひ愼む心、露ばかりもなし。其の愼む心なき所より、大いなる災ひを引出し、

一生をあやまる事也。此の故に若年の人には愼む事をしらせたき者也、愼む心ある者は、あまり大惡はなさぬ者也。又、子供の氣隨、我儘なるは、親の愛におぼれて、子を敎へざるあやまり也。我子といへ共、親の爲には孫なり。主人の爲には家來也。然るに、禮義しつけ等をろく〳〵に敎へざるは、不忠不義也。是は、私の事にあらずして、天の命也。子たる者には、急度躾をいたすべし。

子は親のそだてからにてよくもなり
　わしき人にもなる者ぞかし

聞いれずなくや子供のかたいしを
　ため直すのが親の慈悲なり

何處の親達でも、子供のわるい事する、夫を制すると、子供がなく、さうするとかまはずに、我儘をさせてれく、大いにわろし、泣たとてかまふに及ばず、捨置べし。子供は、泣が商賣なり。泣せて置べし、なきくたびれると泣やむ也。あまやかして育てると子供の不仕合となり。福德を落して、一生人の手下となつて天窓の上る事なし。夫にてもよいと思ふ人は、御勝手次第子供不便と思ふ人は、躾をよく致し子供の福德を落さぬ様にすべし。

敎梯抄（十五）

續古今集雜下

題しらず　　前大納言　基良

たらちねのこゝろの闇をしるものは
　子を思ふ時のなみたなりけり

同　　衣笠前內大臣

同

なべて世の人こそさらにつらからね
　我こゝろだに身をもおもはず

玉葉集雜五

雜の歌の中に　　前大僧正　範憲

とにかくに君が代をのみいのるかな

法のためにもかみのためにも

同　同
題不知　西行法師
こゝろからこゝろに物をおもはせと
身をくるしむは我身なりけり

同　同
日吉社に奉りける百首歌の中に　前大僧正慈鎮
こゝろざし君にふかくてとしも經ぬ
また生れてもまたやいのらむ

同　同
萬葉集の詞一句を題にて人々に歌よませさせたまひけるにひかりは淸くといふことを
新院御製
天つ日のひかりはきよくてらす世に
人のこゝろのなどかくもれる
續千載集雜下

百首歌奉りける時　大僧正道順
なげくべき世のことわりは無き物を
おもふにも似ぬわかこゝろ哉

同　同
題しらず　平夏時
うらむべき世にしあらねむなかくに
數ならぬ身ぞすみよかりける
續後拾遺集雜中
土御門院御製
しづかなるこゝろのうちも久かたの
そらにくまなき月やしるらむ
風雅集雜下
伏見院御歌
天つそらてる日のしたにありながら
くもるこゝろの隈をもためや

同　同
雜歌の中に

太上天皇
てりくもり寒さあつさもときとして
民にこゝろのやすむ間もなし

同　同

百首歌奉りし時　　権大納言　資明
たれも皆こゝろをみかけひとをしる
君がかゝみのくもりなき世に

同　同

文保百首歌に
芬陀利花院（関白内大臣）
くもらじとおもふこゝろをみかさ山
いづる朝日もそらに知るらむ

同　同

中納言に拝任のときよみ侍りける
前中納言　為朝
のぼる瀬のありけるものとひく人の
なきにもよらぬ淀のかはふね

同　同

題不知　源　致雄
いのちをぞかろきになしてもの丶ふの
道よりおもきみちあらめやは

（未完）

飛鳥井家和歌の式法

飛鳥井家秘傳和歌切字可意得事

せそ下知　あからめなせそ　か　いつ　いつれ　いか
て　何　なと　たれ　たか　いかにして　むかふし
いとふなよ下知　頼むぞよ同　忘らざりき　哉　けり
らん　わするなよ下知　いへ下知詞　成敗詞　やは　ぬ　なは
んぬなり　春はきぬ秋はくれぬなど云ふぬ也　絶はてね　れか
ひのかな　世の中よ　いかにせん　いかゝせん　下知成敗詞大概同
様の詞也

貫之

袖ひちて結びし水のこほれるを
　春たつけふの風やとくらん

此の疑のやらんは、常に、誰も心得侍る事にて毎度、初心の人もよめるてには也。

紀友則
ひさかたの光のとけき春の日に
　しつ心なく花のちるらん

此のらんは云へすゑるらんとて、切字前になく續るらんなり。うたがひにあらず。

とならはさかすやははらぬ櫻はな
　見る我さへにしつ心なし

是は、やはあらぬと、二句に切りて間にてことわりを立たるなり。

定家
いつくにて風をも世をも恨まし
　吉野の奥も花はちるなり。

いつくにてと、五文字にて切りて、三句にて、ましととちめたるなり。上に切字なくては、ましとはいれす。たゝし、歌によるべし。

時しらぬ山はふしのねいつとてか
　かのこまたらに雪のふるらん

三句にて、かと切て、すゑにて、らんとうたかへる也。いつとてやとはいはぬ詞也。惣して手爾葉の分別、初心のときは、不辨にてよみちかへる事のみあり。口惜事也。

定家
雪のうちにいかてをらまし鶯の
　聲こそ梅のしるべなりけれ

是は、二句に、いかてと切りて、末にこそと、又、云切たるなり。前句理をのふるには、末にも切字を置きて綴る、事、此の類おほかるべし

同
卯のはなに夜の光を照させて
　月はかはらぬ玉川の里

切字のなき歌也。かやうによめるおほし。

同

紅葉せぬ常盤の山に宿もがな
　忘れて秋をよ所にくらさん

是、又、三句にて宿もかなと、云切りて、下の句にて三の意趣をいひ立侍る

同

志らさりき山より高き齢まで
　春の霞のたつをみんとは

知らざりきと、五文字に云切りて、末も見んとはと首尾を合するなり。

世の中に絶えて櫻のなかりせば
　春の心はのどけからまし

此のましといへるは、上の切字なくては、出侍れども、絶えて櫻のといへる歌の類なれどいひおほせらるゝ也。かやうなるは、切字なくて成べし。

俊成

いかにせんあまのさかてを打かへし
　恨みても猶あかすもある哉

此の歌いかにせんといひて、かなとはいひおほせられかたきなれども、かやうにことわりをいひたつれば、おひつく事也。能々分別あらんかし。

後鳥羽院

我戀は、槇の下葉にもる時雨
　ぬるとも袖の色に出めや

此のめやは、とがめていへるなり、色に出でめやとは、色に出でんものかととがめて、出でまじきと云心也。

花がたま

井上頼文

あさかほ

あさかほのや

あるは朝　あるはゆふべに
水とりて　おろしこものも
とり〳〵に　生ふし育てゝ
みふねなす　柱もたてれ
やかたなす　杖もこそやれ
しかれこそ　雨はふれとも
風ふけと　動きもやらず
咲き出ては　人もめつなれ
あはれその　賤か庭には
去年の夏　こほれし種か
おのつから　生ひ出しものか
遠ちこちに　はひまつはりて
くきふとく　葉さへひろこり
花さへも　しみゝにさけり
さはあれと　種ぞひとしき
しかあれと　育ちからかも
かみしもと　品は替れと
とにかくに　朝寐いさむる　朝顔あはれ

競點歌（二十五回）

諏訪忠元

阿部光忠翁許

春夜待友

友をまつ心はふかく夜も更て
うめが香ぞかりかよひける哉　豊田三叔

契りおきし友待をれは春の夜の
おぼろの月は窓にさしくる　串橋隆美

埋火も霜となるまでさゑかへる
はるの夜さむに友をまつかな　牛山晴儆

二句、霜となるは、霜と見るトスヘキニヤ。　兩角政徳

花くもりかたふく春の月影に
　ともを待つゝ夜を更しけり
二三ノ句、朧月夜のあはれさにト改メ玉ヒテハ如何
諏訪直子

春風に梅の香をりはかよへども
　わがまつ友のおとづれもなし
下句、わがまつともは、おとづれもせずニテハ如何
遊座貞方

まちわぶる友もとひこぬ春の夜の
　月はいつしか影ふけにけり
松井玉身

語りあひて忘れと思ふつれ〳〵を
　そひつゝそゝぐ夜半の春雨
初二ノ句、如此テハ、意餘リテ詞足ラヌニヤ、サレバかたらはんともまちをれど、ナドアラハ聞ユヘシヤ、四句そぴつゝはそぺつゝトナリテハ叶ハヌニヤ。
本間光義

春雨は晴て嬉しきおぼろ夜に
　みやびの友をまつの下庵
初句、春雨はトアルヲ、春雨のト改メタシ。
諏訪忠元

○梅か香をしるべにはして春の夜に
　我いほとはんみやびをもかな
津輕承昭

酒宴

ゆたかなる世をたのしくもむつみあひて
　酒くみかはす宿ぞ嬉しき
前田利嗣

へだてなき友をつどへてくみかはす
　酒のむしろにしくものぞなき
二句、自他違へりつどへてト改ムヘシ

にぎはしく汲もてめぐる盃の
　　そこには春のいつもすむらし
　　　　　　　　　　　　荒山徳隣

二句、以下ヲくみもてかはす盃にうかぶこゝろの春も見えけりナトシ給はゞ、意通ルベクヤ。

　　　　　　　　　　　　海老原秀之

盃の數もわすれてくみかはす
　　さけぞ心の友となさなん

初句ノ世の中のうきもナド改メ、下ノ句ヲ酒をば千世のともとなしてんナドアルモをかしカランカ。

（以下次號）

せつ女集（二）

初秋の風

きのふにも空のくもりはかはらぬを
　　今朝ふきそむる秋のはつかせ

すゝしさをわけてぞ思ふ青すだれ
　　うらかしそむる今朝の秋かせ

初秋の月

ほのかなるたか根の月の光りにも
　　秋のさやけきはしめとぞしる

花すゝきかりねのとこのしら露に
　　やとりそめたる月のかげかな

朝の女郎花

日陰さすあしたの露によそひつゝ
　　ひとりなまめく女郎花かな

ぬれてほすあしたのはらの女郎花
　　なひくもあはれ露のなごりに

秋の夕

さびしさは秋のならひとみてもなほ
　　袖につゆつるゆふぐれのそら

山とみる霧のまがきもたえ／＼に
　　風なきわたる秋のゆふぐれ

雨中の鹿

風ませに千草みだれてあきのあめ
　ふる夜もかれずさをしかのなく

ふる雨はなみだなるらし山もとに
　ふる男鹿の聲の身にしむ

樹間の月

梢みなもみづるいろと見ゆばかり
　またきにたどる秋の夜の月

葉分して風は見せなんあきの夜に
　月にくまなすみねの杉むら

月前の松

なみたてる松の緑りもさやかなり
　うきくもゝなき月のひかりに

故郷の月

花すゝきうちまねけとも月ならで
　とふ人もなくしかのふるさと

田家の月

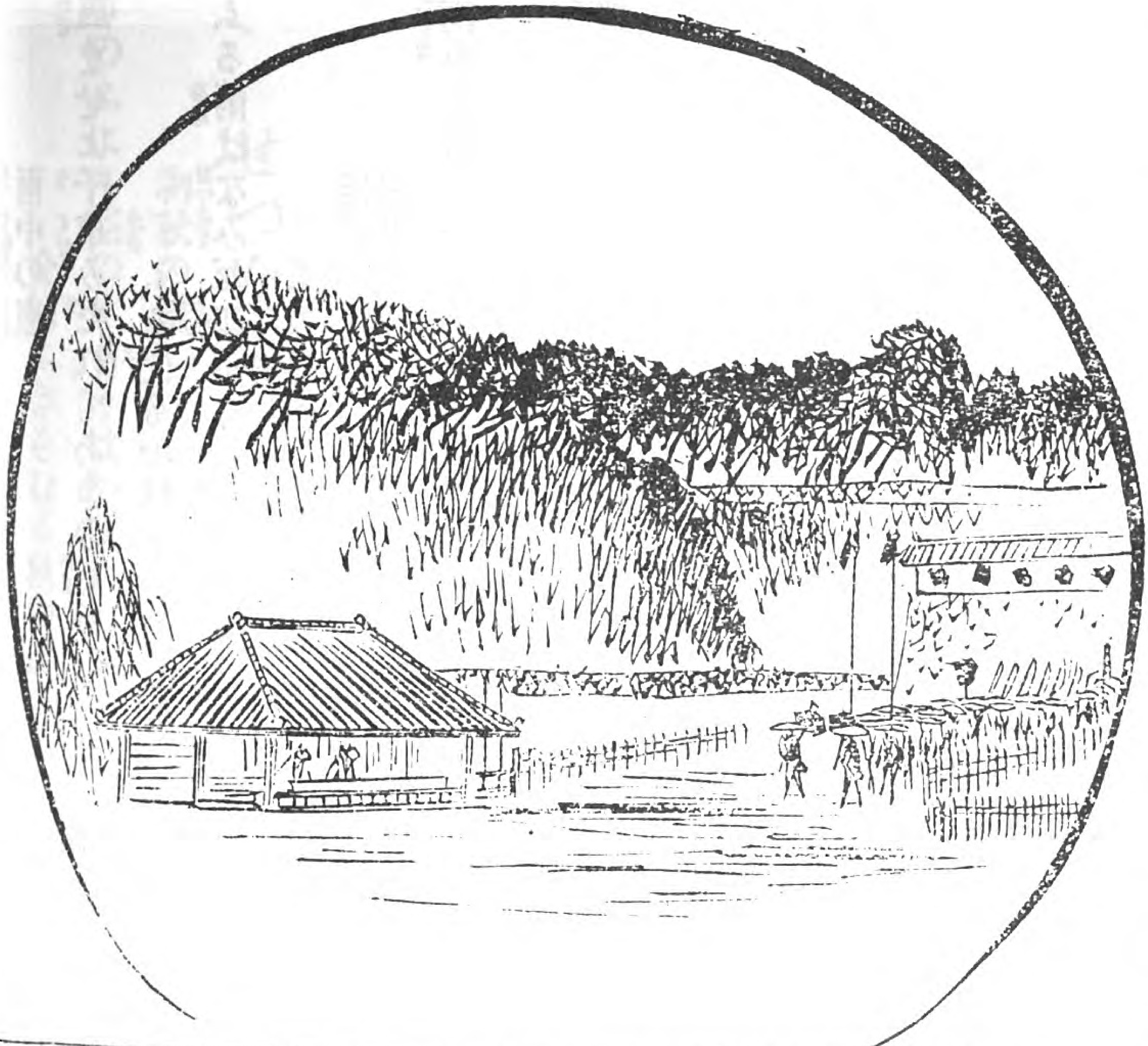
小山田のかりほのしづが袖さへに
　光りみちたるつきのかけかな

更ぬるかひえのたかねに月出でゝ
　すそのゝ田井にかけのさしいる

はゝその露

はゝろ

これも、誠に、一理ある事で、多くの人の上にたつ人は、きつと心得ておかねばなりません。御三代の將軍樣、即ち德川家光公の御ときでありました。朝鮮人が、日本にまゐりまして、いつ〳〵には、將軍と相見んと、日も定まつてをりましたが、それより前に、大風がふきまして、櫻田表のお矢倉のれ窓の戶の白土がおちました。ところが、將軍樣は、增上寺にれなりになりまして、ふと、此の土のをちてをるのを御らんになり、たま〳〵外つ國つ人の來るやさきに、これは見つともな



いとおぼしめし、松平伊豆守信綱に仰せ付けられますには、我還りまでに、白土をつけさせて、おけと仰せられました。信綱はかしこまり、御請け致しまして、さて、思ひますに、中々、一日や、二日に、白土をぬるも、お還りまでに出來上るためしはなし。よし、まに合せて外の御矢倉の戸をはづし、此の破れ戸を立てかへおき申さばやとて、下の者に、さやうに下知致しました、ところに、土井大炊守利勝が、之をきゝまして、けしからぬ。それは、豆州よからぬ作ぞや、お大名へはならざる事をぞ、ならぬわけをしろしめさるやうにいたすこそよけれ。すぐに、足代を申付け、出來るだけを修ふく致させおきめさるがよろし。御自分は、才あり、智ありて、さやうのはたらきも出來申さん。もし、他日、外の人へ、さやうの出來ぬ急なる事を申付けられ、誰も、其のはたらきに及ばぬときは、其の者は不調法者と思召されて、一分も立ち申すまじからんと大炊の守の申されました事、大いに、一理であります。伊豆の守も、誠に感服せられて、人に逢ふ毎に、此

の言をはなされまして、又、皆の心得にするやうにとて、後輩のものにも聞かせられましたのをちらと、書物で見まして、はゝそも、いたく感じましたが、皆さん、誠にさやうではありませんか。

思立旅の記

細川治年の女

五日

今日は、大井川をわたる、日なれどとて、いとゝくおき出ぬ。此ころの雨の、なほはれざれば、水かさまさりたり。今しもしせば、えわたすまじ、などいへど、心ならず立いづ。宇都の山を越行けば、木々の梢、かげふかく、れひかさなりて、雨中のけしき、何となく、もの心ぼそくおぼえて、

旅ころもぬるゝもよしやふるあめに
さらぬとてしもうつのやまみち

や、いそぐほどに、大井川にいたる。みなかす河原、ことにひろく、水のひゞき、いとすさましく、いづこをさしてわたるならんと、みるうちに、はや供の女房より、先へこすに、所のものども、われがちに、わたさんと、聲ごゑに、とりあらそふぞ、いとさわがしき。常になれしわざなれども、みやることゝちには、いとあやふくぞおぼゆる。皆、越はてぬれば、駕をもやがてかきわたす。かちなる男は、前後に、立そひ、れくれじと。みなぎる水に、足ふみなほし、波かきわけて、わたりゆく。これも、常に、覺悟のわざながらも、あやふし。されど、いさゝかの、あやまちもなく越えぬれど、いとうれしく、人々も、今は心やすしと、よろこび、まをしていさみぬ。なほゆくほどに、さやの中山にいたる。つれづれと、をやみなく、ふる雨に、そのかみ、西行法師が、命なりけりと、よみし、とほき世のふることなど、おもひいでられて、ものあはれなり。身も去年の秋、いたはることありて、心ちしぬべくおぼえけ

れば、かくては都へのぼらんことも、かなはじとおもひしに、運やつきざりけん、こたび、此山を、越ることよとおもへど、

我もまたいのちなりけりうれしくも
かくてこえゆくさやのなかやま

坂をくだれど、ほどなくやどりにつく、

六日

今日は、空もはれぬれど、うれしく、さしいづる日の影も、めづらしくおぼえて、道のほども、はかゆくこゝちぞする。天龍川にいたれば、渡舟さしよせたり。やがて、駕ながらのせて、こぎ出す、河原いとひろく、きよげに、いく瀬ともなくみえわたる。さて、いかなるゆゑやらん。あなたの岸は、ほどとほくもあらず。舟はつべき所は、みゆれども、此川の水のわやにや流るらん。すぐにもいたらずして、はるかに、めぐるやうにして、むかひの岸に、こぎよすれば、はや、日もかたふきぬ。それよりいそぎゆけば、戌の時ばかりに、濱松のやどりにいたりぬ。

七日

朝日影しづかにさしいづるころ、やどりを立、荒井にいたれど、參州吉田のぬしより、舟の儲したまふに、やがてのりて、海ぎはとほくこぎいだせど、浪もなく、風しづかにて、遠江灘までも、はるかに、みえわたりたるけしき、いとたぐひなくおぼえて、

海ばらやふな路しづかにこぎいでゝ
たきなみとほくみるものどけし

なほ、山坂を、越行けば、道のほどはかどらず。やうやう遠江、參河のさかひにいたり、川をわたりて、坂を越ゆれど、はや、日もくれすぎぬ。今宵は、吉田に枕をかる、

八日

あくれば、空ものどかなり。辰の時ばかりに、やどりをいづ。今日はこゝかしこと、目とゞめもせず。いそぎゆくほどに、黄昏のころ、岡崎の驛につきぬ。

九日

岡崎を立て、矢はぎの橋にいたる、海道第一のはしときゝ、わたりみるに、いとながし。其かたはらに、しばしやすらひて、ながむるに、すべて、川の面よものけしき、いとをかしくぞある。めかれぬうちに、時うつれど、心のこして立いづ、なほゆきて、大濱といふ所にいたり。しばしがほどやすむ。家のたゝずまひの、何となく、ひなには、めづらしくおぼえて、みながせど、なげしの上に、家の紋に、すこしもたがはぬを、ふたつまで、はりつけてあり、いといぶかしく、たづぬるに、いつごろよりか、此の主人には、先祖より、參勤下向のたびごとに、立寄て、家よりも、念ごろに、をりにふれての、引出ものとらせぬるとて、今も持傳へけるなどきくに、うれしくも、むかしこひしくおぼえければ、

なつかしきあとともしらで我はまた
　おもはずこゝにたづねきにけり

また、こゝに、年々立よりたまふ、人々のしるしの札、おほくありけるをみる中に、ふと父君の、御名ありければ、いとなつかしく、われ筑紫の熊本に生れし時は、ともにありしが、ほどなく、吾妻へのぼりたまひ、同年の秋といふに、世をさりたまひしかば、年月の重りゆくにつけても、こひしさのいやまさり、世の中の人の上には、またあるべきことのやうにもおぼえず。わが身ひとつに、はかなきことのみ、おもひつづけ、あけくれなげきしに、はからずも、こたび、しるしの札をみるも、一世とやらんきゝぬれど、さすがに、つきぬえにしにやと、うれしくも、いとかなし、ありしむかしは、とやありけん、かくやありけんと、心のやるかたなく、おぼえけれど、

あらぬ世にしるしの名のみ朽もせで
　いまはたこゝにみるぞかなしき

今日も、とかくのうちに暮ければ、あつたの宮のやどりへといそぐ。

十日

今日は、とくやどりを立て、未の時ばかり、さや川にいたる。尾州、桑名の兩主より、まふけの舟出る。尾州の舟に、うちのりて、ゆくほどに、あとよりは、桑名の舟ども、こゑをそろへて、うちならす、太鼓の音の、しづかなる浪にひゞきて、いとをかし。供の舟どもは、はるか先に、こぎつらねてゆくを、こなたより、みやるはいと興あり。なみ木の松の梢よりは、山々のうすくこく、遠近のさだかに、みえたるもいとめでたく、このもかのもみやるうちに、三里間の道のほどときゝしも、夢のこゝちして、舟は地ちかくよせぬ。

十一日

よべよりふる雨の、つとめてもなほやまず、さればとて、今日はゆくほども、遠ければ、しのゝめつぐる、鶏のこゑもろともに、立いづ、ゆくまゝに、雨はいたうふりしきる。玉ぼこの道は、いく筋となき、細きながれとなり、わけのぼる山坂は、あなたこなたの、岩根にあまる、瀧の音のみ、ひゞきて、いとさびしく、ものすごし。からうじて、ゆくほどに、日もくれぬ。いとゞ道もはかどらず。やうやうやどりへ、たどりつく。

十二日

きのふの雨の、なごりもなくはれわたれば、朝とくやどりを立つほどなく鈴鹿山にいたりぬ。先權現の社をふしをがみて、いくまがりともしらぬ坂路のいとくるしきを、やうやうとよぢのぼれば、清水の邊にすむ蛙の、こと所にもにず、いとこゑうるはしく、なくも、めづらしくおぼえて、

ふみいでゝ鈴鹿のやまになくかはづ
　　ところがらなるこゑのをかしさ

やがて、此山も越えすぎて、しばしゆけど、道のかたはらに、鳥井あり。そのほどすこしへだてゝ、社のみゆる、是なん田村明神といへば、ゆきてをがまんと、鳥井の前に、駕かきおかせて、あゆみゆくに、まことに、ひなのことなれば、ゆきあふものもなく、まづ

明神を禮拜なし、しばし社のそばに、たゝずみゝるに、いと神さびたるありさま、なかなかかたじけなくぞおぼゆる。かへさには、千手觀音の御堂を拜し、またもときし道よりゆけば、ほどなく、土山のやどりにいたる、

十三日

夜をこめて、やどりを立、道のほどもたどたどしく、やうやうと、一里半ほどゆけば、大野村といふ、立場あり。こゝにてしばしが間、やすらへば、夜もあけわたりぬ。山里の鷄のこゑも、のどかにきこえて、峰の横雲、ほのぼのと棚引たり。やがて日影もさしのぼれば、こゝもいそぎいでゝ、ひなのけしきを、うちながめつゝゆくも、いとめづらしく、面白し。今日は、ことさら、道もへだたりとはければ、石山へまゐらんと、心ざしければ、暮ぬさきにと、いそぎつゝ、かりそめの立場には、しばしも、足をとゞめず、ゆけども、ゆけども、はかどらぬこゝちして、やうやうと、申の時ばかりに、草津の驛につきければ、是より、はやほどちかし。なほいそがんとてゆくまゝに、瀨田の橋にいたる。夕日影の、にほひやかに、うつりたるぞたぐひなき。

夕日かげみづうみひろくみわたすも
　　ゆくすゑとほしせたのながはし

やがて、石山に詣でぬ。あなたこなた、みめぐりあるくほどに、はや月もうつるばかりになりぬ。こゝに月見のちんといふあり。しばし立やすらひて、四方をながむるに、あかずおもしろく、時のうつるもわすれぬ。かたへの人々の、日もくれ侍る。大津のやどりも、ほどしばしありと、いふに、ふとおどろかれて、いそぐほどに、亥の時ばかりにゆきつきぬ。

十四日

朝、とく、やどりを立つ。空はすこしくもりぬれど、雨は、ふらず。ゆけばほどなく、けあげといふ所にいたる。しばしがあひだ、やすらふうちに、日の光さし

出で、雲も、おほかたはれたり。駕にのりて、出たつに、何とやらん、旅のなごりの、今更にものうく、いとをしくおぼえければ、

さすがまた日數かさねてはるゞると
　なれこしたびのうらみをぞおもふ

ほどなく、三條の橋につきければ、今日、こゝにいたるを、待もふけたりとおぼえて、ものみる人々、いと所せきまで、立つどひたり。さらでだに、關の東のひなに住なれ、今更、都へのぼるなれど、たゞに、夢みるこゝちして、うれしきなかにも、身のほどを、かへりみつゝ、いとはづかしきに、なほゆくさきは、みもわかぬまで、人のみ立おほひたり。やゝ道のほどもちかづけど、

はるゞるとおもひたちにし旅ごろも
　いつかみやこにかくてきにけん

など、おもひつゞけて、未の時ばかりに、今出川の館につき侍りぬ。

豐水曰。齊樹朝臣とは。細川越中守なり。
○父君とは。細川越中守治年朝臣なり。
○同年の秋云云とは。治年朝臣の天明七年九月十六日の逝去のことなり○細川系圖云。熊本藩主。細川越中守源治年朝臣。第末女。就姫。久我前內大臣通明卿簾中。天明七年丁未二月廿五日於熊本出生。弘化四年丁未四月十三日卒年六十一。號利益妙院本就慧證日諦大姉。葬于京都妙覺寺。母淺尾氏。

家兄遺文（二）

白松園主人

第六段

おのれ幼き時より、小說をなん、いみじう好みて讀みける。小說をものする人は、勸善懲惡を旨とすといふめれど、これをよむ人、みなうつゝになりて、大事を

もすておき、飯くふことすら忘れて、よろづ忽になんなり行くなる。孝經、論語などこそ、勸善懲惡とはなるべけれ。さるを人このまねは、旨廣く、言葉むつかしくて、心に會得せられねばなり。小說てふ者は、もと、その事がらを、おのれの身にうけて、ふかく味ふときは、行ひのたすけともなるべけれど、見る人、深く味はず。たゞうはべのをかしきをのみよころびて、つひには家のわざをも、いつしかうち忘れ、それにのみぞ溺るなる。かゝれど、小說は、怠りの種とやいふべからむ。わが父、とくよりさる心を得たりければ、おのれが小說をよむごとに、いたく叱りこらしけれど、その味ひ忘れがたく、父のめをしのびつゝ、よみけり。されど、いづこにおもしろき小說ありと聞けど、一里も、二里をも遠しとせで、求め出しけり。かゝりけれど、人にさへすゝめてよませけり。かつて友につかはしける文に

昨日は、ふりはへとはせ給ひしとかや。ゐあはせずて、いとくちをしうなん。まことは、さる五里ばかりの人のもとに、をかしきふみ求めたりと聞きはべりしかど、かねて見わたりたらんには、まゐらせよとのたまひたりしかば、おのれも見がてら、そこへまかりて、よべなんもちかへり侍りし。すなはちこれをまゐらすれど、ゆるらかに見給へかし、まだおのれは見侍らねど、曲亭主人とあれど、かいなでの作にはあらざらむかし。

されど、文に堪能ならん人は、みな小說をよまぬはなしとぞきく。おのれ小說をこのむも、文の結構を學ぶにぞありける。

第七段

十四五歲のころ、ある所に、ものならひにゆきけるに、をりふし夏のなかばにて、道のべの藪の中に、いちごといへる物の實、赤うなりて、枝もたわゝに、いとうるはしかりければ、あれ食はゞやと、何心なく笠と書とをこわきにはさみ、藪おしわけ、手をさしのべてく

ひけるに、人の笑ふ聲しけり。おどろきてかへりみるに、田のくろに、草取る女、四五人いこひをり、こなたを見て、ひたすら笑ふさまなり。耻かしきさま、見られたりと思ひ、わざとつらふくらしてぞ過ぎたりける。後にて思へど、その時などて、笑にまぎらさゞりけむと、我ながらおかしう思ひぬ。

第八段

我里に、一つの池あり、水いとひやゝかに、玉藻おひしげり、魚もあまた住みけり。里のすき人ども、その池の中に、東屋やうの檜波屋をしつらひ、ふみづきばかりになれば、人々そこにつどひて、酒などのみけり。ある六月の頃、ひるいひくひて、たゞ一人そこに涼みにとて、いきけり。あしまに小舟つなぎすてたりけるにうち乗り、玉藻おしわけ、こゝかしこ、棹さしありきけるに、水底に竹の筒のみじかに切りたる、あまた束ねて沈めたるあり。何にする者にやと、思ひゐたるに、せ高くてひげおひたる男、勢たけくはせきて、聲怒らしていふやう、すやつ、何者なれば、たがゆるしをえて、その舟には乗りたる。このほど無下に魚のかからぬは、おのれが日々にきてしかするにこそ。とくわからずやといきまき罵しる。この舟は里のすき人のものせるにて、かねてたが乗りても、咎めあらぬを、この男がかくいはんやうなし。魚とる妨げすとは、心をえねど、罵らるゝがおそろしさに、舟をばもとの所につなぎてあがりけり。この事かへりて、父に語りしに、父いはく、その人は、けいぶといふ役する人にて、このごろすき人のかたをかりをるなり。竹の筒をしづめたるは、その人のわざにて、うなぎをとるなめり。魚幸なきはらたゝしさに、けいぶめいきほひをもて、罵りけるにこそ、さる所に行き合はせたるなんさちなかりし、といひて笑ひぬ。

第九段

愚なる人に、言葉すくなきと、多きとあり。うちだまりて、人の前にては、はかばかしう、ものもいはぬ

は、よそに聞くさへこゝろぐるしくて、袖などひきてもをしへまほしく、そゞろ哀れをもよほさるなり。またおのがおろかしさを、ひきつくろはんとて、くち賢しくいひ罵る、始めこそ何となく賢くも見ゆめれ。いつとなく言葉のはしに尾いできて、愚の素生をなんあらはすなる。その時おろかのうへにおろかをかさねて、おかしき事限りなし。中々にうちだまりたるかたぞまされる。さればおのが愚を知りたるは、人おのづからあはれを加ふる者ぞかし。口さきもて賢しく見するは、人その心のよこしまなるをにくみて、あはれとも思はず。いひあやまりてはちかきたるとき、あな心地よしとこそいふならめ。

第十段

ある物しりがほしたる男、めの子に教へらく、女の消息文のをはりに、かしくとかくは、もとから文字にて、しゆくすべしといふ心にて、可祝の字音なりと。我これを聞きて、ひそかに思へらく、かしくはかしこの誤りなる事をしらずして、まげてかゝる説をひき出したるおかしさよ、と後人々に語りしに、人々もあなおかしとて興じあひにけり。

(未完)

しのぶの露(上)

井上頼文

おのれ、としふくるまで　をのこゞもたざれど、とく生れよと祈りしを、そのかひなくて、女兒なりしかば、いとあかず思ひしに、その女兒さへ、こぞの夏、稲葉の露と消えうせにき。その後は、いとわびしくてのみあかし暮しゝに、妻みごもりたりときこゆれど、嬉くて、このたびは、男兒うましめたまへと、ねぎごとす

みむすびのかみに祈らぬ朝ぞなき
　健きをのこゞうましめたまへ

ある日、朝熊わたりの、老婆、ゆくりなく訪來ていへるは、うちぎみの顔かたちやつれず、腹ふくらかに、

平みたるは、女兒まうけ給ふべきしるしなり。おのれ、年來、姙める女の容貌によりて、男兒女兒の鑑定をなすに、ふつに誤りたる事なしといふ。こを聞くにつけても、又、こたびも、男兒にはあらざるか、變生男子の法はあらざるかと、さま〴〵に思ひわづらふ。

わか祈るわかまごゝろをあはれみて
　をのこ授けたまへみむすひのかみ

かくて、五月の廿九日の曉がた、產のけにやといふ間に、忽ちたへがたくなりぬといへど、やぬしの刀自よび起しに行くほどこそあれ。一聲たかく產聲あげたり。男か、はた、女かと、あはたゞしく見れば、男にぞありける。

われはもよ男兒得たり年まねく
　まねくまちつる男兒得たり

と、いふ〳〵家內走りつゝ

よろこびの極をしらに手のまひも
　足のふみどもおぼえざりけり

と、うちさわぐ

よろこひて立舞ふわれをそよめには
　ものくるはしと見てわらふらん

產婆に、人はしらせつるに、その使の歸りこぬ前に生れいでたるは、いと輕き產なりけり。

乳兒の泣く聲、いと高く家內にひゞきわたる。產婆も產守の老媼もいはく。此の乳兒、骨格も强く、聲も力あり。きはめて、すこやかなるべしといふ。

腕力をきはふ世なれど骨格の
　つよしときくぞ嬉しかりける

六月の廿六日の朝、二たび、三たび、乳を吐きければ直に醫師のもとにつれゆきて、診せしむるに、こは、乳汁多量に飮ませ過したるのみ。毫も身體に異狀をみとめず。此の乳兒は、昨年遠行せられし姉君には、たち勝りて强壯なり。去年にこりて、いさゝかの事に、藥さわぎせらるゝは、兒乳のためよろしからず。乳汁過度にて吐くは、いづこの乳兒も同樣なり。漢醫は、か

りそめのことにも、丸散藥など、多量に與ふれど、そは徒に、腸胃をそこなはしむるのみ。夏なれど、風邪にかゝるは、つねの事ぞかし。風ひきたりと思はゞ、湯に入れ、厚く衣服きせ、汗とらし玉れど、忽ち癒ゆべきものぞといふ。

七月の九日の朝、又、乳汁吐く。今日は、空かき曇り、雨風はげしく、ふりふゞきけれど、醫師を招きて診するに、乳汁飲み過ぎたると、風すこし引きたるとのみ。別段心配に及ばず。されど、氣やすめのため、藥いささか與へんと、たやすくいふ。されど

　わつかなる風も心にかゝりけり
　　稻葉のつゆもかくてきえきと

となんあやぶまる。夜に入りて、しきりに啼く。これまで、高き聲にて、をり〳〵は啼きしかど、つねは、心ちよくねぶりけるに、枕して、横にふさすれど、忽ち啼きたつ。かくしきりに啼くは、たゞごとにあらずと、心も心ならず。妻は、かきいだきて、夜一夜まどろまず。

十日朝、醫師の許につれゆきて診するに、少く腹痛の氣味なれど、させることなし。かにかくと心配すべき病症にはあらずとて、藥わたへぬ。醫師は、かくたはやすくいへど、きづかはるゝまゝは、人はしらせ、さきに、傭ひたりし、産守の老媼よびて抱す。乳兒は、膝にありて、をり〳〵はげしく啼けば、また醫師むかへに人はしらす。然るに、今宵は、醫會に趣けど、明早朝見舞ふべしといふ。老媼は、夜もすがら抱きつゝ、乳兒の啼くさま、とくと見て、乳兒には、かゝる例ままあるならひなれば、心やすくおぼすべしといふ。

十一日、今朝は、醫師、とく來べきちぎりなれど、今かまかと待てど、八時すぐる頃まで來らねば、人はしらす。

　いくたびか耳そばたてゝ門すくる
　　車の音もそれかとぞきく

乳兒の顏も唇の色も、昨日には似ず、つやゝかに、目

もとも、すゞやかになりぬ。老媼は、この容子にては氣つかひなし。おのれも用事あれば、今晩、また抱に來るべしといふ。

乳兒は、心ちよげにねぶり、をり〳〵目さまして、乳も飲みけれど、まづ、心おちつきて、おのれは、學館にゆく。されど、道すがらも、心にかゝりて、

つかへせぬ身にしありせばをさなごの
　病いゆるまで家にあらましを

かくて、教の鞭とる間も、ちごの事のみ思はるゝを、強て忍びつゝ、午前の課業を畢へたるに、俄に、車挽く男が、文もて來つ。とる手もおそしと開見れど、乳兒の病あつし。とく、この車にてとあれど、幹事に、その由つげて、直に乘る。

走らする小車よりもいそがれて
　とゞろくものは心なりけり

門に入るや、いな、妻は涕せきあへず、いとし兒は、早やこときれぬ。せめて、いまはの一目にも、あはせまほしかりしをと、うちなげく。いましばし早かりせばと思へどかひなし。

わが手していまはのきはに一杯の
　水さへえこそまさゞりけれ

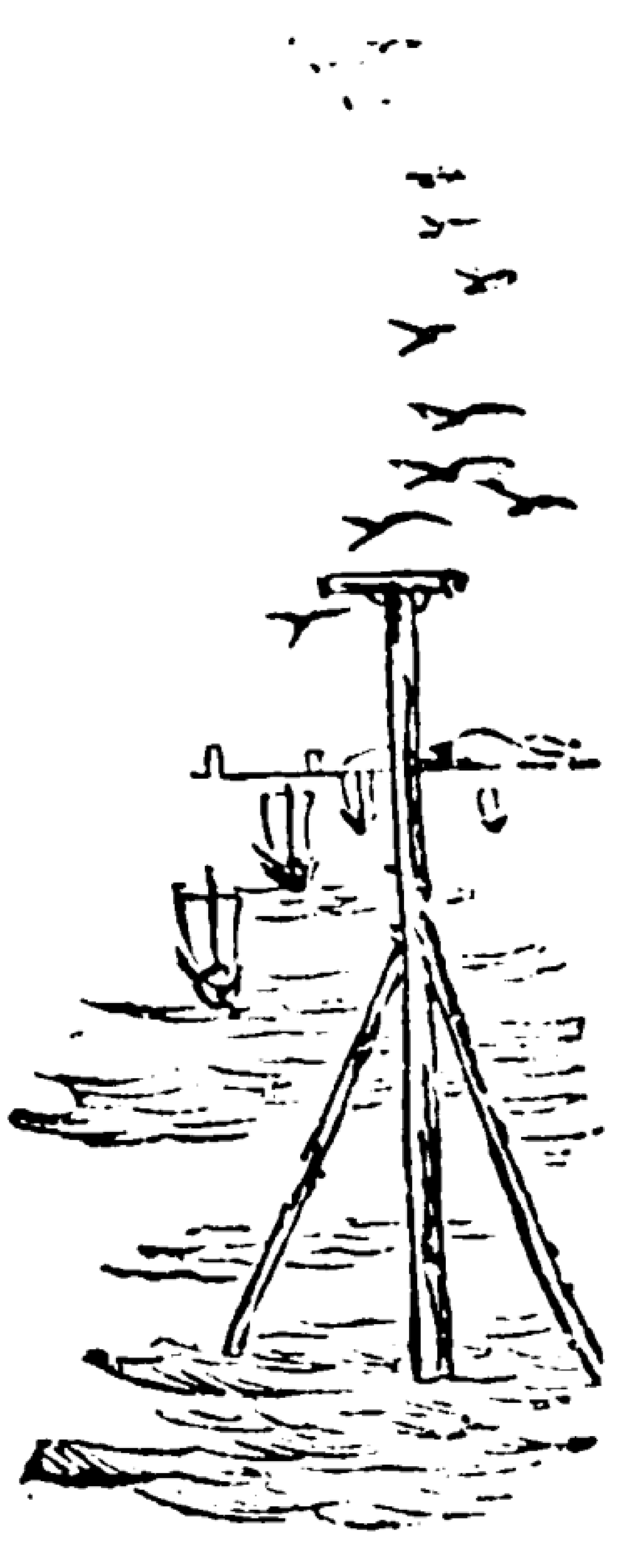
妻の泣く〳〵語るを聞けど、おのれ、學館にゆきたる後までも、なほ醫師は來らず。乳兒は、またはげしく啼きけれど、醫師の許に、人はしらせ、乳兒の容態きづかはし。とく來てよと請ふに、用事の濟み次第に見舞ふべしといふ。かくては、心もとなしと、近きあたりの醫師にも、急病なり。とく見舞てよといひやる。されど、醫師は兩人とも、とみに來らず。その心もとなさ、もどかしさいはんかたなし。をりかへして、また人はしらす間に、乳兒は、いとたへがたげに、もだへ、苦みけれど、如何にかせまじと、起つ居つ思ひまどふ程に、また、ひとしきり苦むよと見えしが、つと氣息ふたがりて、俄にこときれぬ。せめて、とく醫師の來て、よき藥の一口も飲ましめましかばと、口惜き

ことかぎりなし。ほどすぎて、やう〳〵もとの醫師も、おとのも、來りつれど、今は如何とも、ほどこすべき術なしといふのみ。なやみの最中にとはれましかど、たとひ、命は救ふすべなかりしにせよ。苦惱だに除かんすべはありけんものを。あまたゝび、人はしらせしを、兩人の醫師が、兩人まで、いまはの際の間に合はざりしこそ、かへす〳〵も恨なれといふ。いとあぢきなしともあぢきなき極にこそ。

妻は、かなしみに、えたへで、乳兒のあと追て、共に幽冥に行きたらましかど、かゝるうき目は見ざらましを。なまじひに生殘れるこそはけかなれ

うたかたの泡ときえなは嬉しからん
わかいとし兒にあふと思へど

と、うちなけくも、わりなしや。



奥州七ヶ濱の舟歌

漫録子

板、一枚の下は地獄といひならはしけむ、舟乘のわざこそ、いとあはれなれ。はてくみ育てられたる、親のために。愛しき、いとほしき、妻子等のために。朝は、朝日の登らぬ間より、夜は、夜もすがらさへ、大海の中に、たゞよひあかすことあり。若しそれ、風暴き日浪高き夜、或は七重八重の波濤に圍まれ、圍を出でしとおもへば、千仞の底に蹴おとさるゝが如き、危き中に、釣を下し網を投して、悠々たる彼等の心よ。いささかの雨風にも、簑笠のかげにかくろひ、或は鋤鍬をすてゝ、木のかげ、家の軒を、まどひ求むる人々には、思ひもかけぬことなるべし。まして、人を排擠しても、自己の榮達をのみ計り、他を詐り陥れても、自己の利益をばかり希ふ輩は、何故にかゝる危殆の地に身をおくかを、訝るならむ。否、心の驕りあがれるしれもの

は、愚物、生活の他の道を知らずとや、言ひ貶すらむ。然もあらばあれ、彼等は、祖先の遺業を守るものなり。父母を養ひて、萬の一も恩に報いむとするもの也。妻子を慰めいつくしみて、一家の平和をこよなき樂とするものなり。名譽の奴隷、富貴の乞食、即ち世間の所謂紳士紳商、斯る類のこと、見るをだに欲せず。聞くをだに厭ふ。生死を自然に委して、危と安とを思ひおかず。思ふは、唯わが家あるのみ。知れるは、たゞわが國あるのみ。あはれ、高潔の心なるかな。男は、斯くてあれど、さすがに、心やさしき女、又、老いたる人々、幼きものなどは、雨につけて、風につけて、如何にこゝろを動かすらむよ。

ナド旅のつれ／＼に、思ひみだるゝも、ものぐるはしや。今年の夏、脚病を煩ひて、奥州七ヶ濱の中なる、菖蒲田濱といふに、轉地してき。朝夕語らふものは、皆、海の業する人々なりけれど、唯しばしの旅人にも、斯樣のことのみ思ひいでらるゝぞかし。

濱邊の方、常よりは非常に騷しき朝ありけり。何事の起りけるぞと、出でゝ見れど、老いたるも、弱きも、男も、女も、村人の大方は、濱邊に集りて、何か、聲高に罵りあひ、或は高きにはせのぼり、或は磯邊にかけ下り、或は手をふり、或は意味もなう、めぐりなどのみす。喜び狂ふさま、比すべきものなし。何事ぞと聞けど、タイリヤウ、タイリヤウとて、其の他をいはず。折から、沖の方より、數十艘の漁船、高らかに舟歌うたひて來る。眞先の舟には、菅笠を高くさゝげ、其の下には、旗一旒、翩翻として風に飜れり。岸近くなるまゝに、うたふ聲も、いよ／＼高うなり、濱邊の狂ひも、ます／＼はげしうなれり。翁嫗は、手拍子うちて、舟人に和すめり。弱きが中には、浪の寄する中まで、むかへ出でゝ、手を擧げ喉をからして歡呼するもあり。舟のつきし時、漁物をいたす時、そのよろこびのさま、言ひもつくされず。書きもつくされず。彼の笠印と旗と歌とは、非常の大漁を、知らする印なりけり。あは

れ、天地の間に、このよろこびをおきては、又何事かあらむや。れのれも、そゝろうかれて、手拍子などそへうちうゝ、宿にかへりに。今は病もおこたりて、再び都の中にすめり。月あきらかなる宵、雨そぼふる夜など、唯その折をのみおもひいたされてなむ。

ふなうた　一

お祝事はヤヨ志げゝれば
　うつぼの松もヤヨそめく
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
そよめかむヤヨおかさねなされや
　お舛でお金をヤヨはつこむ
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
おうらが旦那がめでたい旦那で
　七つの藏をヤヨたてそろへ
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
花さく二度さく明星が島の
　野菊の花もヤヨ八重にさく
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
ゆる〳〵とお祝なされや
　遠方から舟のヤヨつくをみろ
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵

ふなうた　二

わさの出舟に花さきそろふ
　入舟みれ心ヤヨみがなる
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
御舟玉も大りやうなされて
　内ではお恵比壽よろこび
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
白金の出しさかづき
　祝ひの御酒をいたゝき
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
このや御酒を何とたべる
　からの菊酒みりん酒

ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵

このやおにはに三がい松に
　鶴はこがねのヤヨ巣をかける
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
巣の中をわけてみたれば
　子もちこかねはヤヨ九つある
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵
ちらし〳〵と夜はわけてみたれば
　五尺のしるしをヤヨ立てそろふ
　　ホーヨー、ヨイトコラサ〳〵〳〵

これもすてかたくて。唯耳づから壯快なる調を、聞えまゐらするすべなきをうらむ。

禽獸の言行

田端隱居

寢ねて食ひ、食ひて寢ぬ。之を人の中の牛とす。又、かけひきをはからず、死生を思はず、偏に敵陣に走せ入り、つきこむ。之を猪武者と云ふ。武者の中には、此の行ひ、いさぎよくよろしき事も、又、時にとりてはあれども、江戸兒の向ふ見ずとて、やたらに爭ひはこる。誠にあやふき行ひなり。たてがみあるのみが馬にあらず、角あるのみが鹿にあらず、教へなく、思慮なきは、人の中の馬なり。鹿なり。人ならむ如何なるものにもれんちの心あるべきを。仁なく、義なく、人の人たるの道を知らず。以て恥とせざる、これ、すべて禽獸なり。禽獸は、れんちの心なし。人の中にてたはぶれあひ、人の中にてかみあひ、人の中にて食を爭ひあふ。人たらんと欲するものは、必ず恥を思ふべし。

意氣

白魚女史

朽ちたる木はゑるべからずと、それは晝寢。朝寢には



何と云ふらんと、又も、高き細き聲、かるかやもかやかやと笑ふに似たり。誰ぞ、ねてはをらぬとて、一作きつと眼を見張りしかど、心にとへど、ふとねぶりたり。流石にはづかしくて、捨てありし書物を拾ひとりて、後に人やあると見亘しぬ。秋も深くやなりけん。霧たち亘り見も分かず。

住み馴れし宿さへわかずなりにけり。母様、聲して玉へとうち呼びつゝ歸りくる小女、また花子のたはぶれ來るよと、云ふは、母の聲なるべし。姉様、何處とて、かけ出る妹、此處白雲の立ちたる所、漢の高祖にはあらねど、花のかげは、たゞ白雲の深き所を尋ぬれば、霞の中にも、霧の中にも分くはず、雪子さんには見えずやと、わけなき事をたはぶれつゝ、向へ出でたる妹の手にすがり、椽に腰うち下ろし、母樣、今朝も糞土の垣が見えましたよ。相かはらず、書物も眼も閉ぢをりて、あのくらゐなら、家にねぶりをれどよかるものをと話しにつゝけて、獨りごつれど、矢張り入江にお舟を漕ぎに來りしなるべしと母もたはぶる。花子も雪子も、共に呵々と笑ふ。花子は、今年十五歲、まさに開かんとするつぼみの花、笑める姿も香むしく、雪子は十一歲、冬子は、深き松の雪ながら、行く先もこもりてめづらしく、何れも、深山木の世にはなれねど、心さかしく、まれなる才智も供はりて、あどなき、罪なき事などたはぶれ、父母を興せさする事も多かり。

木の葉か、草か、さや〳〵とふみ分くる音。なく鹿にはあらずやと、外の方をうち見亘せば、例の一作なるに、あな、糞土の垣よとて、妹が袖をひきつゝ、幸に八重山吹の花の咲きをれり。道灌のむかしを思ひ出よとて、一枝を口なしに呈せんかと云へば、童心のたもしろく、雪子は、はや、はいれに立ちて、一枝を手折りぬ。

あな、母様、雪ちやんはいたづらものよ。朽ちたる木に花を咲かせんとて、山吹折りましたよとて、花子かげ辨慶、物のかげにてのたはぶれ聲、一作ふと、耳

をがすめ、思はずふりかへれど、あな、妹様こそいたづらものなるにとて、花をもうちすてゝ、雪子も内にかけこみぬ。

いつもの聲、朽木に花を咲かす。まさしく、今朝の言。さても如何なるものぞ。何なれど、かくはつねにたはぶれ事をするぞやと、しばし、たゝずめど、内に呵々と笑ふ聲の聞ゆるのみ。

なほ、非番、毎に、一作、入江に至りぬ。すぎし日の如き聲は聞えず、もちろん、已れもねぶらざりけり。歸へるさはつねに、彼方の門をすぎ、いつものぞき入るれど、かげを見し事なし、山姫か、狐狸かと疑ひつゝ、なほ變らず、入江に至り、門をすぎぬ。

「下にのみ、木の葉のかげのとゞまれど、かみなし月と云ふにやあるらん」と木の根によりかゝり、空を仰ぐ花子、今日こそは〳〵、一作見たり。

さらば、しも月とは如何にして呼ぶぞと妹のいへど、「木枯しに上のみならず散りはてぬ。しもつきたりと云ふにやあるらん」くるしき月やとて、ほゝと笑ふ。一作、なほ、つく〴〵と守りたり。山姫、立田姫、さやうの天つ少女の姿もあらず、顔にもあらず、正しく、人の中の女、女の中の美人にあらず。上品と云ふにもあらず、愛きやう深きにもあらず、されど、何となく高尚に、何となく愛らしく、何となくかしこげに、一作想像よりは、劣りて覺え、又、まさりて身にしみ、思はず、手にせる書物をおとして、ぼう然たゝずみぬ。

糞土の垣がと妹の袖をそつとひくに、ふりかへる花子、何の思ひか、思はずも、顔にふゞきを散らして、家の内に入り、障子のやれめより、そつと見て、立見を禁ずと小さく云へるは、例のかけ辨慶なるべし。一作もとむねをうちて、家路に歸りぬ。

何思ひけん。一作、しばらくは、入江にも至らず、花子が門邊も過ぎず、一月ばかり隔て、花子の門を過ぎぬ。花子、朝まだき、朝ぎよめ終りて、ウツクシキギノハ――ナノハナノイロと歌ひつ、きつと口をつ

ぐみて、黄菊の花のもとによりたり。一作歌ひぶりのあどなくも思はれ、口をつぐめたるさまのしまりありげにも思はれ、思はず已れがすがたを守りて、そこそこ、家に引きかへしたり。



文林

引田部赤猪子　　東久世通禧

三輪河のあたら少女をとしへつゝ
めさすあり皃あたら少女を

海邊郭公　　鍋島直大

さやかにもなく聲す也ほとゝぎす
荒いそなみのおとにまぎれて

夏夜雨　　長岡護美

樫のはのまとうつおとの更る夜に
ふりくるあめのさわがしき哉

張良　　前田利鬯

川なみになかれしくつを捧けてぞ
たかきその名は世に流れける

潮聲近枕　　宮地嚴夫

楫まくらねふるとすれどみつ潮の
こゑにいくたび夢さますらん

叢螢　　北郷久政

さ月やみくるればやかて草むらの
露をはなれてとふほたるかな

山下烟　　阪正臣

夕づゝの影のみみねにきらめきて
けふりにくれぬ山もとのさと

樹陰水　　植松有經

夏やまの青葉のかげにむすみつは
したゝる露のたまるなりけり

傘破嵜第一世　　荻原嚴雄

天地にあまるうらみをへれなしま
かへらぬ浪にしづめつるかな

海眺望　　遠山英一

和田のはら沖は長閑に見ゆれとも
いそには浪のよせぬ日もなし

草花　　岡部讓

やちくさの花さきしよりをぐるまの
通ふ野みちもかちよりぞゆく

折にふれたる　　三輪義方

たわやめがよるおばしまに影さして
うみづらにはひつきはでにけり

院本をよめるか中に苅萱道心を　　足立正枝

高野山杉のむら立つれもなき
色こそ見ゆれうちしくれつゝ

夏なき濱　　諏訪忠元

たえまなく浪うちよせてわつきひも
夏なきはまと聞くか涼しさ

肥前國島原のさとに在し頃より親しくせし丸山作樂翁の逝去をかなしみて　　佐々豐水

敏心を代代木のさとのよゝかけて
ちかひしものをいづちいにけん

和氣公　　蜂須賀随子

光あるかみのめぐみのつゆかけて
あしたのにはを淸めしやたぞ

船納涼　　前田朗子

たかすゝむ船にかあらん靑すたれ
かけ渡したるうちそゆかしき

深山瀧　　西四辻茂子

とふとりの聲も聞ねぬおくやまの
瀧のひゝきのたかくもあるかな

竹風　　柳原愛子

わか竹のはわけの風のすゝしさに
なれしあふきもおき忘れけり

山家夏　松平健子

都ひとうらやましとや見るならん
　なつをはなれし山かけのいは

國旗　北島以登子

から人のすみし島ねも日のみはた
　輝くみよとなりにけるかな

山路　原田蒼生子

向つをの木々のこの葉はみえなから
　たとれど遠しやせのかげみち

田家烟　山田稲子

かたふける夕日の影にたなひくは
　山田のさとのけふりなるらん

孟母　大谷章子

機たちていさむる母のなかりせは
　まなひの道もすゝまさらまし

藤原百川公　河村重子

もゝかはと名にこそおへれ一筋の

　水のこゝろのきよくもあるかな

夕立　福島喜多子

鳴神のおとゝろきの岡かけて
　ふるもはけしき夕立の雨

盡きせぬ歎

師岡須賀子

今年一月の末つかた、我父の翁失せられしより、はや二百日に餘りぬ。今もなほ只、そのまゝに、露忘るゝ間なきものから、日數のみ、たゞ過ぎにすき行くぞわりなきや。年頃親しかりし君達、はた教子たちより病中日記おこせよ。遺稿わかちてよと、切に望まるゝか、せめては、いと嬉しかれと闇にくれたる當時は更なり、たま〳〵机に向ひても、先胸のみふたかりて、何時もいつも得堪へで止みぬるのみなりしを、あまりに、度々に促がされぬれど、我ながら、あまりに、心弱さの恥し

くて、此頃、辛うじて、その折の事どもかつ〳〵記し付けそめつれど、ともすれは、又、かき亂るる心地は、胸にも餘り、ていとゞ拙きは、筆の運び、いとゞ悲しきは、父なき身なりけり。あなあはれ。

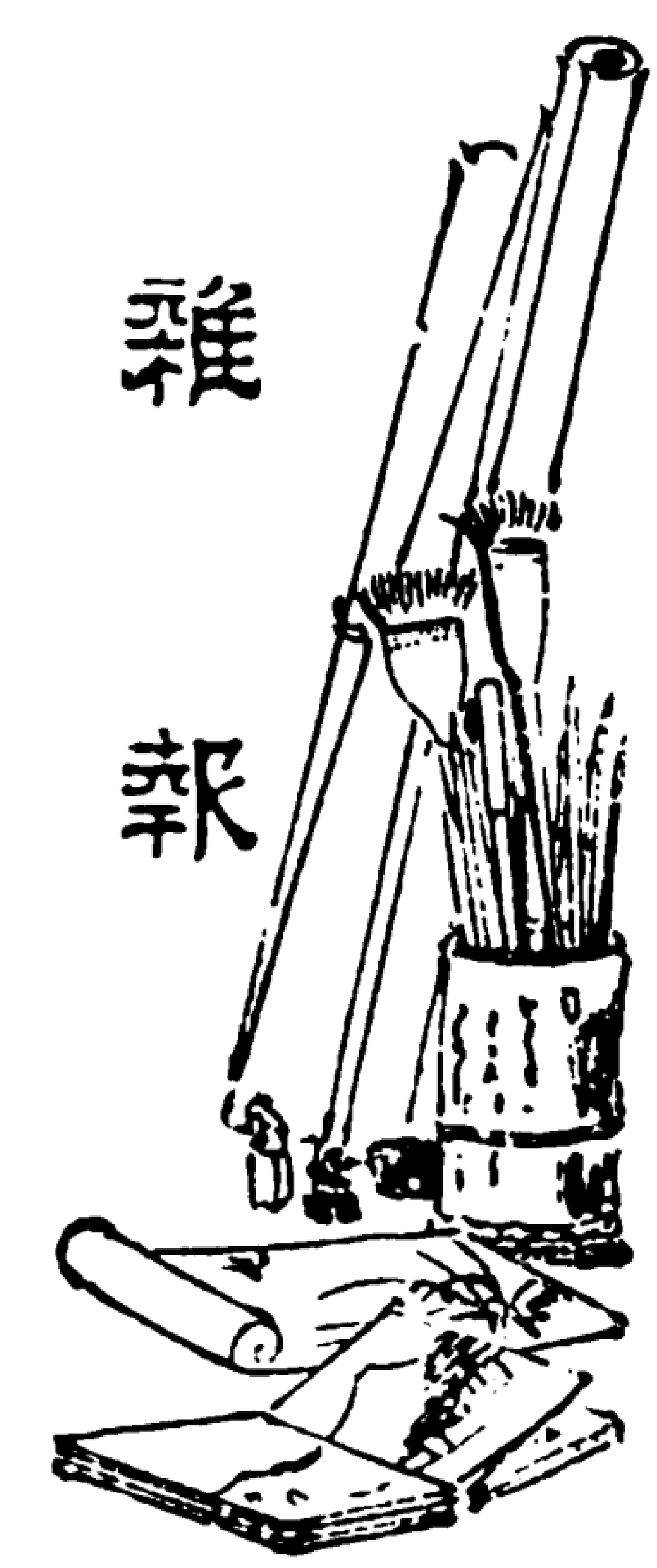
人のなきあとばかり悲しきはなしと、云ひけんも、また親の別れにます事はあらじ。我が父常は、いと健かにおはして、臥し病み給へる事などは、一度もおはせず此の八九年は、伊豫の松山に留り給ひて、いよゝ健かさに勝りたまへり。況して、明年は古稀にさへなり給へど、友同士教子達打ち集ひ、祝どもしてなど、心かまへして樂みをりしものを。今は御祭すべくなりぬ。あはれはかなしや。

さるは年頃、道の爲、世のため、いたつかれし、餘にも有るべく、一昨々年は、母君とも齊きたまひし伯母君、一昨年は叔父上、甥など差續き、先立たれしか、又甚く、御心を落させられたるにもあるべしかし。

さはいへ、去年の五月、おのれ、福井に在りつる程、おはして、京都の豊國の神の御祭、護王の神の御祭、拜みに、上りぬ。此の地の藤島の神、柴田の神、いかならむと、仰せて逢ひまつりし折は、少しも變る事もおはせず、足羽の山の、險しき坂路を、上り下りし給ふ時などは、一層の御健やかさにて、今頃、斯る歎に暮れぬべしとは思ひも掛けゝむや。劇しく繁き務に思ふまゝにも、送りまゐらせられざりし事ぞ、今更口をしき。かくて、夏の程、東京に歸省せる程に、口中に腫物出來ぬ。日々、數度の講義ものうし、指痛し。書き物つらし。酒も止めぬ。煙草も。只病院と道後温泉とに通ふのみと言ひおこされぬ。松山の人々も、懇にし、醫師も心をつくすとは聞けど、年老いたまふ御身の、いと心もとなければ、親族ども謀りて、己は福井の校を辭すること〳〵し、迎へまゐらする事に定めき。九月の末つ方より、松山を出立ちて、京都にて治療。十月の初めつ方歸り着きたまひぬ。

其の折は、少し痩せ、御顔の色も、年頃の如くつやづやしからず、体量も一貫九百目も減じぬとは承れど元氣は、少しも平生とかはり給はず。文机に推高き歌文の添削批評書狀の返事など例にもかはらず、取認め給へる故に心安き方も有りながら、早、食物とては、悉く流動物なる（ソップ）、牛乳玉子をさまべ〳〵に調じてまゐらするのみ。診察を受けらるゝ醫師は、誰も誰も頭傾けて、打案せざるはなし。赤十字社にも、大學醫院、第二醫院にも、御供しても、皆同じ診斷にて、舌の全部を切らで、一年、又は、一年半は存命せん。さらずば、只、このまゝに補ひ藥して、自然に任せむのみと云はるゝ心細さ云はん方なし。入院を嫌ひ給ひつれど、なほ醫師の注射に、治療に、眞心籠めたるが、一向頼みをかけられたり、其の程、伯母君の三年の御祭に史談會に、平田大人の御墓參になどまめなる性に平生の如く行き給ひぬ。此の頃は、大方は（ペフトン）と葡萄酒と肉汁の珍らしきものゝみとにて、凌ぎ給ふ。その程も歌合結歌御見舞の返事、いと繁かれどもさのみかはり給はず。十二月廿五日、例は暗きより目さめ給ふが、今日は晝までも睡りておはす。起しまゐらせんもと、幾度も猶豫しつれど、御藥まゐらすべき時刻なればと驚かしまつれど、なほ寢入り給へり。御額に手をあつれは冷々しく御脈もよろしからず。急ぎ起しまゐらせつ。母上樣妹も驚きて、急ぎ御藥まゐらせ、身内暖めまつり、種々、心盡しつる印にや、夕つ方よりは、御顔の色なほり、御脈たしかに、元氣さへ出で來たまひぬ。嬉しともうれしとて、夜すがら醫師を待つほども、心せかれぬ。





雜報

●皇太子殿下御還啓　久しく日光山に暑を避け玉ひし　皇太子殿下は、追々秋風もそよめきわたればとて、いにし十一日午前八時三十分母澤御用邸御出門、同九時日光停車場御發車あらせられ、有栖川威仁親王殿下を始め奉り、中山東宮太夫、黒田東宮武官長以下供奉せられて、御豫定の如く、午後二時十分上野停車場に着御大山參謀總長、土方帝室制度調查局副總裁、田中宮內大臣、香川皇后宮太夫、其の外文武官、數百名同停車場に奉迎す。殿下には、しばし便殿にて、御休憩、同三十分御料の御馬車に召させ玉ひて、青山御殿に御還啓せさせ給へり。此の日、殿下には陸軍步兵少佐の御略服を召されて、御氣色、いとも麗しくましまされたりき。

●葉山行啓　又　殿下は、同日、即ち十一日御參內、兩陛下に御對顔遊ばされ、翌日、葉山御用邸へ行啓仰出さるゝ御豫定なりしか、果して、十二日午前九時二十五分新橋發の滊車にて、葉山へ行啓あらせられたり。

●御職務　同殿下陸軍步兵少佐の御職務を近衛師團司令部付、海軍少佐の御職務を常備艦隊付と過日仰せ出されたり。

●兩內親王殿下　常宮周宮、兩內親王殿下は過る十日午前七時日光發の滊車に召させられて正午十二時、上野停車場御着あそばされ、十一日御參內あらせられしとぞ。

●故久邇宮の御事蹟　神宮祭主故朝彥親王御事歷取調は、既に、其の重要なる部を終了したる由なるが、親王が、最初尊融法親王と稱し、奈良一乘院宮に在し、夫より山城栗田青蓮院に、移らせ給ひし後、何時の頃

にか、洛東清水寺に至らせられ、月照和尚と御密會ありし事、今般發見されし由にて、久邇宮家扶、目下、京都に出張し、清水寺附近に住める某翁に、就きて、御事蹟の取調を爲し居ると云ふ。

●帝室制度調査局員任命　帝室制度調査局員は、兼て、伊藤總裁の手元にて內定し、上奏御裁可を請ひ奉りたるに、直に御裁可あり、左の通り仰付られたり。

帝室制度調査局副總裁被仰付
伯爵　土方久元
樞密顧問官　細川潤次郎
樞密顧問官男爵　高崎正風
樞密顧問官男爵　伊東巳代治
式部長男爵　三宮義胤
文事秘書官伯爵　廣橋賢光
東京帝國大學法科大學教授　梅謙次郎
東京帝國大學法科大學教授　穗積八束
內閣統計局長　花房直三郎

帝室制度調査局御用掛被仰付
內閣書記官　多田好門

帝室制度調査局主事被仰付
河上房申
關謙之

帝室制度調査局秘書被仰付
森泰次郎

●義婦　今の世の輕薄なる人心には、誠しからず思ふもあるべきばかりの、ありがたき美談こそあれ。府下荏原郡上目黑村の小杉清藏の妹にて、小川八重といふものあり。父は、小川定次郎とて、青山百人町に住み、溫飩蕎麥を商ひ、相應に生活せしが、父死亡りて後家運頓に衰へ、遂に、兄は目黑へ移轉し、お八重は群馬縣前橋市向町北浦字岩上町の機織業中澤せん方の織女となりき。このおせんに、龜次郎といふ、一人子ありけり。同市の星野某の養子となりて、是も、亦機織の業を營み、多勢の織女をつかふ身なりしが、不圖せしことより失敗、うちしきり、加へて、慢性の胃病に他の病さへ併發して、療養の甲斐もなく、腰拔となり、止むことを得ず、里方へ戻り來れり、如斯る折柄に實家もまた、不景氣のために、破產の悲境に陷り、多くの織女も、皆散々に歸り去れり。この時、お八重は、深く主人親子の落魄を嘆き、一人とゞまりて、二人を介抱せむことを乞ひて、これまで辛苦をつみて、貯ひし金

はもとより、衣類身の廻りの道具まで賣りて、龜次郎の藥の代とし、暇ある時には神佛に詣うで丶、平癒を祈るなど、眞實の親子兄弟も及ばぬ心づくしなりき。昨年十一月すゝむる人のありければ、神奈川縣橘樹郡登戸村に、お八重ひとりして、病人を伴ひゆき、吉田屋といふに宿りて、毎朝四時に起きては、粥を焚き、それより跣足にて、一町餘もある丸山教會まで、病人を脊負ひ行き、共に祈念を凝らし、宿にかへりては、藥のこと、其の他よろづに心おちなく介抱しけり。然れど、もとこれ織女の身、衣類道具とて、幾許もなきこととて、悉皆賣拂ひたる代金も、忽に盡きて、今は粥たくこともひたと絶えたれど、宿の主吉田順平いかにしつらむと、不審におもひ、來りて、是までの身の上を聞き大に感嘆し、さても〳〵、今の世に、又とあるまじき義婦なり、斯る人の宿をせしは、わが本懐にして、且つは、家の面目とも思ふぞ。此の後は宿料も要らず。能ふだけは、助力もせむとて、是より、お八重に、力を添へけれど、龜次郎の喜びいふもさらなり、お八重の喜はいかばかりなりけむ。この事いつしか、村人の耳にも入りけれど、天晴婦女の龜鑑よと、米麥粟を贈りて、其の善行を賞するもの多ければ、今は飢ゑず凍へず、専ら、信心と介抱とに力を盡し居るとぞ。

◉一對の孝婦　伊勢の人にて井上文之助といふものの妻タツと其の弟嫁ミトとは起居不自由の姑に仕へて、孝養を盡すこと、タツは二十八年、ミトは、十八年の久しきに至りて渝ることなく他の家の鑑とせられ居たりしが、この程、村の重立ちたる人々相計りて、兩孝女碑を建て丶、永く、其の徳を旌し、縣知事、亦金を賜ひて、篤行を賞せりと。是等も亦、今の世にはありがたき孝婦なりかし。

◉妻の至誠　廣島に荒龜、又は、泥龜と仇名され、喧嘩賭博は、いふに及ばず、世に惡事といふ惡事を爲ぬこともなき、荒木龜太郎といふがありけり。其の妻なにがし、夫には似ず、心やさしきものにて能く、貞節

を盡し、家事を勤め、折にふれ、事に託しては、徐に、夫を諫しかど、さしもわりし夫も、次第に本心にかへり、勤直にして、義俠なる、天晴なる男となり。今は近所の褒めものとなれりとぞ。まことは天をも動すといへり。實に至誠を以つて事をすれど、遂げぬことてはなかりけり。

●孝子傳　維新前、小堀氏の下領なりし、何鹿郡上杉村稻葉太郎右衛門は、元は、上杉八ヶ莊の庄屋を勤め、苗字帶刀を免されたるもの、余か、大伯母にあたる、一女みつ、家を分たれて、同じく稻葉を名乘れり。大伯母みつの婿なる人、早世し、其の嗣なかりければ、我、叔母上なるウタ養はれて、其の家にあり。やがて、清三郎を迎へられて、其が婿となされければ、此の清三郎は、余がためには義叔父なり。わが叔父上、母上のあるさへありがたきに、かゝる、よき行ひせられたるを見もし、聞きもし、さては、此に筆さることそ、返すくもうれしく、また、目出度心地すれ。清三郎は、今年六十八歲、うたは、六十二歲、わかきより、養母に事へ、その心をもて心とし、殆んど人の爲す能はざる所をなし、他の擧しがたきを擧したり。明治十七年、秋、みつ、中風にかゝり、坐作進退自由ならざれば、清三郎夫婦は、懇に介抱し、冬は、其の室を溫め、夏は、其の座を凉しくし、衣服蓐牀を淸らにし、交々、其の側に侍し、或は、其の腰を摩り、或は其の肩を扇ぎ、東司の末に至るまで、之を扶けざるなし、かくの如き事九年の久しき、さなから一日の如くなりしに、みつは、此の兩孝に侍せられつゝ、「二十五年九月」終に溘焉よみぢに旅立ちぬ。清三郎は富めるにあらねど、一輛の人車を購ひ、祭禮見物には、母を載せて、自らひき行き、車通ぜざるに及べは、自ら負ひ、たゞ、母の悅ぶを見て喜ぶ。頗る、古孝子の風あり。二十五年の春、みつの兄歿するや、清三郎、乃ち、母を負ひて、會葬し、朔後、墓詣にも同じくす。一日歸途、母、背より呼んで曰く、われ死せば、願くは、かの側に葬れよと。幾ばくもなく、その秋に逝きぬ。夫婦涙なから、遺言の如く、式を重くし、禮を厚くし、碑石等、一に、その兄氏の墓に倣ひたり。

母のいましゝうちは、珍しき食物あれば、必ず、先、母にすゝめ、其の食ひ終るを待ちて、夫婦打寄りて味ひ、殊に、母の嗜める菓子の類は、毎夜枕邊にうちおきて、すゝめぬ。飯はおのれ食しながら、其の茶碗より、直に、箸もて哺め食はしむるさま、恰も慈母の嬰兒におけるが如くなりき。

又、常に、往來の人馬を見せ、病人を慰めんとて、日々、蒲團のまゝ、店先きにつれ來り、又は、家内をひきまはりつゝ、夫婦聲を同うして、囃し立て、笑聲常にたゆることなく、或は村の小兒と共に、歌うたひつゝ、肩を搖し、手をかざしつゝ、あるきて、喜ばせなさするは、村人も感じあひて、珍しき者あれば、必、携へ來りて、之を贈り、或は店頭に集ひて、共に笑ひさゝめきて、老人を慰めき。これ等をもて、いかに孝の深かりしか、村民の稱服せしかの、一班を窺ふに足らむ。好事門を出でざれば、未だ足らざるが故なるべし。其の極に達すれば、何の匿はざることあらむ。清三郎の孝誠、終に官の聞に達し、府知事は、賞

狀と金圓を授けぬ。郡衙之を傳達せんとして、之を召すに會ひ、夫婦その何故たるを知らず、とにかく出向の旨を語る。母悲んで曰く、汝等、至孝至誠何の科かあるべき。而し汝等にして歸へりこずば、余は奈何せんと、涕泣已まず。夫婦、之を慰むるの道なく、僅に看護を隣人に托し、出頭せば、思ひきや、知事府の彰孝に接せんとは。且、驚き、且悅ぶ事、近隣の聞く所となり、來り賀するもの、數日間踵を接し、爲に祝宴を開くに至れり。

清三郎は、天資眞摯にして、虚飾なし、分家せし時は、相當の財產ありしかば、さして農事に勉めず、酒あれば、人と共に飮み、佳品あれば、他に頒ち、衆と共に樂み、衆と共に思ふ。貨殖の道に疎く、家產、漸次に傾きしが、維新の變遷に、一層の苦境に陷りしにも拘はらず、養母を待つこと、頗る厚く、其の好むもの、一として、購はざるなく、其の欲するもの、一として進めざるはなかりき。其妻も亦、また、誠實にして頗寡言。余の幼時、常に愛せられしは、殆、筆紙の盡す所に非ず。清三郎も、余を愛し給ふこと、父の如く、余の物心あるまでは、まことの叔父上とほか思はれざりき。

みつなる人も、亦、溫厚にして、罵詈叱咤するが如きは、嘗て、之を見たる人なし、殊に、農家の產に似もやらで、頗る裁縫に秀て、押繪に妙を得つれば、近隣の子女來りて、教を乞ふもの尠なからざりしは、今もなほ、余の双眸に映じて、忘れんと欲するも得べからず、其の分家せしや、その婿なる人、早世して、子なく、わが叔母上入りて、其後をうけ、清三郎を妻はしゝは、上記の如し。而、清三郎亦、子なく、養子せしがと、故ありて去り、しかも養母、此の長病に惱みしに、侍養すること多年。加ふるに、叔母上、また、二十七年の冬、中風症に罹り、積善の家には餘慶あり、陰德あれば陽報ありとは、古哲の金言、然而、此の孝子にして、此、仁人にして、逆運に處すること、此の如し。嗚呼、天道、果して、是耶、非耶、延原孝哉氏、普く善行者を歷訪せんと企て、丹波に至り、行いて、之を訪ひ、親て相語り、其の天眞爛熳たる至誠に感涙を灑き、朴吶無垢の態容に服して歸る、訪賢紀行の著あり、記して曰く、

『廿三日(明治廿九年十月)午前五時宿(舞鶴)を出て、眞倉、黑谷を經て、丹波に入り、何鹿郡東八田村に到りぬ。村の入口にて、稻葉氏の家を問へば、孝行者の清三郎ならずやと問ひ反せり。這は耳寄りのことを云ふものかなと思ひ、家に入りて、其の事實を問へば、誰れ知らぬもなしとて、誇り顏に語り出てぬ。孝子の家は代々嗣子なく、孝子夫婦も、亦、養子女にして、共に母(ミツ)に事へて、孝行の名高し。家極貧にして、形ばかりの饅頭店なれば、遠近のもの孝行饅頭と稱するに至れり。母七十餘より、中風を發し、手足自由ならざれば、夫婦、懇ろに介抱し、衣服蓐床等を清潔にするは勿論、母、殊に餈を好みければ、燒餈を始め、菓子などをも、毎夜枕元に置きて與へ、食事は、自分食しながら、其の茶碗より、直ちに箸を以て哺め食せしむるさま、恰も、慈母の赤子に於けるが如し。故に病人は、清三郎を呼びて「トウヤン」と云ひウタを稱して「カアヤン」と云へり。又、常に往來の人馬を見せて、病人の心を慰めんとて、日々蒲團のまゝ、先店さに連れ來り、夫婦聲を揃へて、「ヨイヤサー〳〵」と云ひて笑せ、或は臺所に、或は座敷に、日に幾回となく引き廻はりて、「ヨイヤサー〳〵」の笑ひ聲絶ゆる時なく、亦、其の間には、夫婦、代る〳〵脊負ひて、近隣、又は、畠の中など散歩するに、村の子供等

と共に、子守歌を歌ひ、肩を揺りて、病母を笑せるを常としければ、後には、村人まで口眞似して、店頭、終日笑聲を以て賑ふに至れり。又時時、車夫の店先に、車を置きて、饅頭など食することあれば、暫く車を借りて、静かに、病人を乘せ、自ら揚々として、數丁の町を往復するに常に伊勢參り歌を歌ふを例とし、大聲を揚げて「ヤートコセー……ヨイヤナー」と母も、子も笑ひさよめくを以て、病人を慰むの手段となせるなど、事、細かに語りぬ（孝哉）ハタと膝を打ち「嗚呼、是れ眞の孝子なり」の一語は、思はず、口より、迸り出でぬ。走りて、孝子の家に到れど、歡び迎へて遇せり。孝子六十六歳にして、其の妻は六十歳、養母は公賞に與かりし翌年八十一歳にて、世を去りぬと（孝哉）懇懃に、其の至孝を賞すれば、孝子の曰ふやう、我等、少しも孝行なるにあらで、全く、養母の出來善かりしなり。不幸にして、子なければ、一子を育つるむもで、一人の母に事へたるのみ。されば、養母も、亦、此の氣儘なる養子女をも、子の如くは思はで親の如く思ひ、甘まへ縋りて「トウヤン〻〻〻カアヤン」と云くるものを、いかに憑まむとて憑まるべきや。さてはらはらと有難た涙は、孝子の襟を傳ひぬ。（孝哉）其の天眞爛熳たる至情に感激し、三嘆敬服、復た、一言の口出つるものなきに至れり。嗚呼、適れ我が帝國の老萊先生、願くは、健全にて、命長かれかしと、平身低頭、暫くは、面を上ぐるを得ざりき。

稍あり、其褒状の一見を請へり。

不素、一家和合、且つ數年前姑、みつ中風症に罹り、臥蓐後は、妻うたと協力、能く、孝養を盡し、看護怠らざる段洵に奇特とす、依て爲非賞金壹圓下賜候事、

明治二十四年十二月二十四日

京都府知事従三位勲三等　北垣國

夫婦、各通に賜はりしものにて、文面の妻うたとあるを、夫清三郎とせしのみにて、他は同文なり。（孝哉）辭し退かんと思へども、いかにも、名殘惜しく、此の先生に、復た、何つれの時か、再會することを得べきと思ひ何か手つから書かれたるものにてもあらば、紀念の爲めに賜はれかしと請へば、無雜にて、御恥かしき限りなりと云ひつゝ、半紙を取出してサラ〳〵と書きぬ。

親

六十六歳　稲葉清三郎

嗚呼親なるかな。親なるかな。子の眼中、親の外、亦何物かある。

身體髮膚の本、生命靈魂の源、人の生涯、唯、親を忘れざれば足れり。之れに過ぎたる賜物はなし。永く傳へて、家の重寶になんと痛く喜び納めて、例の二帋を與へ、盡きぬ名殘を忍びて、暇を告げ、梅迫に至りて泊りき。』

予、一日、谷鐵臣翁を訪ふ、翁、予を室に欵く、談性善說に及ひ、翁、性は白然なりと說かる。適延原孝哉氏の來るあり。予の、延原氏を知る、之を始めとす。談、益々進む、翁、引例として、孝子清三郎の事に及び、清三郎か、親の一字を書きしことに至り、翁、其の天眞自然を激賞して止ます。展して、一軸を示さる、即、清三郎の自書したる、親の一字に翁の賛せられたるもの。

此丹波國何鹿郡八田村孝子稲葉氏之書也、門人延原孝哉各國訪賢過次至其家親受之云予整襟拜觀感涙沾臆嗚呼親之一字蘊蓄天地之性與

聖人之道而今出於孟性之人可貴可寶矣耳
丙申之冬日　　　　谷鐵臣拜書

予、即、語るに孝子のヿは、予の外伯母なるを以てす。翁、其の奇遇に感し、一層語を強めて、懇説せられたることありき。嗚呼孝子、其至誠の動くところ發して、此行ひとなる。予は、不幸にして予の學、京都にあるの時に、父を失へり。未以て、父恩を報ゆるの日なかりしなり母なる人最健に在す。以て此の孝子に倣ひ日夕奉養するも、而も此孝子の行ひに及はず。況んや、敎職に在るの身誠意の足らざる豈恒怩たるなからんや。予が此の記を作るもの、蓋、之を以て自戒、又、以て、子孫に示さんと欲するのみ。若し、夫れ貴重なる餘白を借りしに至りては、風敎に裨益あらんを希ひし一念に存す、幸に尤むる勿れ。

（池田保之助記　京都府敎育雜誌）

●某子爵夫人

華族の婦人としいへば、たとしへなきよき身になれ、奥のおくにひきこもりて、老いたるさへ、若やかに仕立て、身のきよらをかざる事をのみ仕事と思ふもの多しとか。然るに、國家の功勞者にして、しかも有力なる某子爵の夫人にして、朝よりくれにいたるまで、筒そでの綿衣にて、おまつさへ髪をもかざらず、或時は機をおり、ある時は、たちぬひ、またある時は、みつし事さへ手づから、下女に敎へなどして少しもたかぶらずと云ふ。されど、唯ひとつ、口惜しき事には、萬の寶にかへがたき子といふものなく、あけくれ、この事にのみなげきけるが、やうやくにして妾、一女あげたりといふ。されど、夫人、大によろこびひたすら養育に心をつくしつゝありけるが、今は年もたけ、やむことなき淑女なされたりとなむ女たちは、たれ〳〵も斯の心かけこそあらまほしけれ。

●農事篤志者

岩手縣西磐井郡萩荘村字を山口と呼ふ所に、千葉新四郎と稱する、老農家あり。家とみ、人の譽れもおぼろげならず。氏は、わかきより、何事にも、心あつく、又、人を惠む心をも備はれり。春、早く、人夫の群る畑を問へば、曰く、山口のなり。また、桑葉、わけて、しげれるを聞けば、即ち氏のなりと。夏は、麥菜、隣田の比に非ず。秋の田の垂穗の八束穗は、いとしなへ〳〵て、天つ御國にてものせられけんも、かくやとばかりおもはれる。冬さりて、山に行けど、古松老杉、並立ちて、風聲、他に異なるは、問はず

して山口の所有なるを知る。いにして、かく、もの〳〵人のに秀れたるかと、深く樣子を問けど、これや、よの常ならず、要意周到にて、作物の爲なりせど、いかなる事をもいとはず。夙に起ては、青田にのぞみ、夜は、弓張の月のかげ見えぬまで、畑にくさぎり、たゆむ事なくうむ事なし。げに、糞水を掬せざれど、以て、良農となる能さるの語を、能くも、克くも味はひられたる人なり。さるにても何なる暇ありてか。神をうやひひ、人を惠み、土產の祭くれど、甘菜辛菜、さき竹のとはゝ〳〵に、さゝげ、人の足らぬものありと聞けど己が所持の物を、をしげもなく、あたへ、さて、無上の樂とせり。惠む人の寶なれの言の葉に違はず、あまたの人を惠みても、つきはせで、仲々に、日月に榮えのみせり。爲に一鄕の風あづきに歸す。嗚呼、何事も、志のあつきに如かず。

●女子師範學校の國語專修科　國語は、殊に女にふさはしき學問にして、此の後、益々、さかりになり行かむおもむきあり。いと〳〵目出たき事にこそ。されどにや女子師範學校に於いても、右の奬勵には、色々とつくさるゝ由なるが、來年一月より、國語專修科といふを設け、生徒四十名を募り、五學期間(一ヶ年半)を期して、一通の女敎員を養成する事と定り、旣に志望者の申込も續々ありと云ふ。

●北海道の女子高等敎育　北海道尋常師範學校には、從來男子部のみにて、女子部を設置せず。之に換ふるに、高等女子學校を以てし、該校内に、別に、一部を置き、以て、同女子敎員の養成をなす、豫定にて、旣に來る三十三年度の敎育費豫算中には、右高等女學校新設費を算入せりと。而して、校舍學級等も、他府縣の例に準して、略、調査濟みとなり居り、現に道廳は、主務省と交涉中の由なれど、遠からず、其の設立準備に着手し、來年度早々開設の運こ至らしむべき計劃なりと。

●英國の子女と其の職業　英國々會議員スパイサー

氏の教育事業報告中に、左の統計あり。（童兒の職業）新聞賣子、一五、一八二人、走使傳使等七六、一七三人、農業に從事するもの六、一三人、雜事靴磨、給仕、叩き起し（是は職人など、毎朝出勤時間に遲れざる樣、戸を叩き、眠を覺し歩くもの）等一九、二六三人（女兒の職業）子守一一、五八五人、洗濯業、及、家事手傳九、二五四人裁縫、其の他四、〇一九人以上女兒の收入は、一週間、平均、一人に付、僅か十志に過ぎずといふ。

●ちまたのとり〳〵　△三人正直四谷區傳馬町二丁目小間物商遠藤ミネ（三十）といふもの、同町、往還に於て、五圓紙幣二葉を拾ひ、遺失主は左こそ困じ居る可けれど、警察署へ屆け出でんと、二三歩行過る處へ、年齡三十五六才位の女が、遽しく馳せ來り、只今の五圓札は、妾が取落せしなり。有難しと禮を述るに、ミネは、夫れは〳〵丁度宜しかりしと手渡しすると、其の女は、最早八王子行きの滊車の時間切迫し、居れりとて禮もそこ〳〵にして、停車場に驅付け乘車して、八王子に至りし後懷中を改めたるに落せしと思ひし、五圓紙幣は、小包の中よりいでたるのみか、傳馬町にて受取りしは、五圓二枚なれど、大に驚き、其儘四谷に乘り戻し、遠藤ミネを訪ひ、前記麁忽の申譯に、ミネも同人の正直なるを感心し、直に四谷警察署へ、屆出でたり。さて此の遺失主は、市谷谷町吉田吉五郎（七十）と判明し、同人に下渡されたれど、同人も、大に喜び、ミネに幾分の禮金を贈らんとするも、同人は、一錢も受けずと言張り、歸宅せりとぞ、△感心な生徒　佐賀尋常小學三年級久米定八の父、酒を好み、業を勵まず、屡々饑餓に瀕す、定八學校退出後、餅果物等を市中に行商し、其得る所を以て、月謝、及び、紙筆墨を辨じ、又、父疾病等の際は、自己の貯金中より、米代を支拂ふといふ、△彫刻術に熱心なる啞生　四谷區鹽町一丁目一番地の小林某方に同居する、千葉縣人片桐貞吉（四十）は、天性の啞者にして、前年小石川の盲啞學校に入り、

孜々勉學なしたる結果、優等を以て卒業せし者なるが、其の特殊の嗜好は、彫刻術にあり。されど、在校中より、既に、其の技に熟達し、深く將來に望を屬されゐりし由なるが、今回佛國巴里に、萬國大博覽會の開かるゝを聞き、拙けれども、自分も、何をか彫刻して、出品せんと、先頃より、日夜、心血を灑ぎて、縱二尺五寸幅一尺五寸の楠と黒柿へ、黄菊白菊の咲分を木象眼に現はしけるが、運刀自在にして、力あり、殊に、其の裏葉の蟲喰等の如きは、精妙、人をして感嘆せしむるものなりと。

●現今の家庭　都下の、某新聞紙は、種々なる題目の下に、現今の家庭の腐敗墮落せることを摘發したりき。余輩は、徒に、他の醜惡を發きて、以つて快とするものを惡むといへども、發きて快を爲さしむるだけの、醜惡を爲して恥ぢざるものを惡むことは、更に其より大なり。然れば、其等の記事を掲載するに至りたる情實についての、非難の聲あるにもかゝはらず、多少、世人を警醒し、反省せしめたるの功は、沒すべからざるを信ずるなり。

實に家庭の腐敗墮落、いづれの世か、今日より甚しき時あらむや。お染久松とやら、お半長右衛門とやらの痴情をうたひし、義太夫といふ者を語りて、朝夕妻子從僕をして謹聽せしむる紳士あり。常盤津、清元、富本、さては越中節を以つて、今、猶愛子の教育の、重なる課程となすものあり。淫靡なる琴歌は、最も高尚なる唱歌として、遂に改善を云ふものなく、卑猥なる小説院本、いまた、盛に後庭に珍重せらる。如斯家庭に生ずる事實、余輩は、今更に、わが女鑑の愛讀者なる諸孃の前に暴露して、清淨潔白なる心に、不快の感念を與ふるに忍びざるなり。あはれ、かゝる汚濁の世に立て、能く、其の惡德に染まず、遂に婦德を守る事を得る道は、女鑑論説に漫錄に、其の他に於て、常に懇々訓戒誘導せらる。唯其れ是等を反覆熟讀あらむことを望まむのみ。（愛弊生投）



教の庭

九月廿日兼題　海邊霧

天

よさの海や海士の漁火ほの消えて
　きりたちわたる天のはしたて　但馬國出石郡出石町　西川順子

地

あまを舟こくやいつこと眺むれど
　きりのうみ路にしら帆はのめく　甲府市山田町　名取正代子

人

あさきりに走島やまかくろひて
　白帆きえゆくみつしまのなた　備後國芦品郡府中町　立神富子

秀逸（十二首）

秋霧のおしてこめたる和田つ海は
　いよ〱限りも志られざりけり　甲府　坂田きみ子

みわたせばなみのうき霧末はれて
　浦のとまやにけふりたつなり　肥後　那須昌子

ほの〱とあけゆく朝に霧きえて
　あらはれわたる磯のまつはら　駒込　北島松子

松しまや島ねのまつもほのかにて
　うすぎりわたるうらの夕なぎ　横須賀　及川やす子

こぎゆかむ島わの松もうつもれて
　きりにたゞよふあまのつり船　山口　村上操子

きりたちて沖はみえねどつり舟の
　かへりきぬらし櫓の聲すなり　赤阪　河田いし子

たちこめし浦のあさきり末はれて
　あらはれそむる松のむらたち　羽前　金森とし子

磯山はきりたちこめぬわかふねの
　しるべの松やいつこなるらむ　芝　溝口留子

もしほやく烟ながらに立ちこめて
　とま屋を包むうらのゆふぎり　芝　田中すゞ子

釣舟もほのかにみえぬあさきりの
　袖かうらへにはれそめにけり　羽後　河方喜代子

霧こめて蜑のもしほ火たえ〱に
　みゆるもさびしすまの夕ぐれ　麹町　竹村貞子

きりふかみたゞ浪の音ぞ聞ゆなる
　ありし苫やはいづこなるらむ　四谷　都水春子

（以下原稿到着順）

あさきりのはれわたるらむ二見かた
　ひくしめなはも見えそめにけり　山田稲子

すまあかしけしきも見ねず今朝は又
あきぎりふかしすみよしのうら　内海順子

沖のしまほかけてりそふもみち葉も
見ねわかぬまできりたちにけり　名取よし子

さもの浦あさきり晴れてなきさへに
あまのあほしもみねそめにけり　立田原直子

あさきりも晴れわたるらんいそ山の
みれのまつばらみねそめにけり　立田原國子

なみよするいその松ばらきり立ちて
おきつしまやまかけみねわかず　小笠原元子

ふな人もこぎやまよはむしろかみの
ゆふやりふかき伊勢のうみづら　河村君子

うらかぜに霧もいつしかうすらぎて
こぎゆくふれのかずもみねけり　近藤彌榮子

霧ふかみかちたねれども ふな人の
ゆきかまごはむわたつみのはら　齋藤操子

わたつみにこぎいづろ舟はあさ霧の
たねまたねまにみねわたろかな　服部倫子

あま小舟なれししわざもまどふらん
かへり路さざすうらのあききり　徳永純子

朝ぼらけいそ家をつつむあききりに
かへりをまどふあまのつりふれ　徳永萬壽子

舟をたづれいそげごみねぬ夕きりに
はるかにさわぐあまのこゑこゑ　徳水廣子

も鹽焼くけふりさみねてほのぼのさ
くもゐにつづくうらのあさきり　徳永識子

おしなべていその松はらほのくらく
きりたちわたろあきのうなはら　澤田春子

もしほやくけふりはみねずあさ霧に
ふなうたうたふこゑばかりして　友永章子

うき霧にふれよぶこねもうづもれて
うみぢをぐらくよはあけにけり　村崎包子

こころしてこげよ舟ひさあきふかく
きりたちこめしおほわだのはら　黒田明子

いそ山はあさきりふかくたちこめて
うみはさごろくなみのおさかな　虎口資子

海はらやいそべもわかぬあさきりに
なみのおさのみきこねぬろかな　濱口良子

松かせの小琴のおさはたねずあれど
すまのうらわにきりたちにけり　中村壽枝子

あまの子が舟うたのみぞきこねけろ
きりたちわたろありあけのうみ　佐々小學子

白たへのそでのみなさをたちこめて
志賀のしまわにきりたちわたろ　佐々有鄰子

もしほやくけふりもまかふ夕きりに
あまのさまやもみねすなりけり　高やす子

あらいそを打つ波しげくきこゆれさ
ゆふきりふかみみねずもある哉　田代綾子

そでのうらいそのまつばら行く人の
すがたもきりにつゝまれにけり　東野さく子

海はらは日かけさせさもあさきりに
まだあけやらぬいそのまつはら　田代艷子

舟ひさのきそへろこゑのきこゆなり
きりのあなたにふれやゆくらん　高橋矢須子

ほのぼのさ明石のうらはきりはれて
見ねそめにけりあまのつりふれ　高橋類沃子

ま帆片帆いまはさたかにみねにけり
ささせしきりのつきに晴れつゝ　福原蓋子

舟とめむみなとのまつもみえぬまで
あさきりふかく立ちわたりけり　田村多豆子

あさ霧のたえまにひとつみえそめて
かせにかすそふあまのつりふね　横山柳子

かけてほすあまかころもしめる迄
とまやをこめてあさきりのたつ　横山壽[illegible]子

あさきりのはるゝまに〱塩かまの
うらの帆かけはみえそめにけり　荻原章子

島のみかゆきゝのふねのかけもなし
おほうみおほふあきのあさきり　香川顯子

ふなうたの聲ばかりしてあかしがた
あさきりふかく立ちへだてぬる　香川知惠子

けさはまた朝きりふかしほごちかく
あまのこゑのみきこえぬるかな　林環子

あまのたくけふりも空に立ちそめて
ゆふきりふかししほかまのうら　永井さい子

あけぬるかうみのおも遠く霧はれて
ほの〱見ゆるうらのまつはら　井原藤子

風さそふいそへのきりのたえ〱に
みえかくれするあまのつりふね　椎野ぬき子

あまの子が友よびかはすこゑすなり
いつこなるらんはまのあさきり　石井豐子

見わたせば高ねははれてほの〱と
なみにたゞよふあきのあさきり　井川すみ子

こぎ出でし舟はいつしかあさきりの
たてへだてぞ見えずなりにき　田中聽子

たちこめし磯のあさぎりはれそめて
しほやのけぶりほそくたなびく　河原芳子

むら松の木ずゑは晴れてをちかたの　淵本家壽子

しまやましろしうらのあさきり

和田の原やそしまかけてこぐふねの
ゆくゑも見えじきりふかくして　松井絲子

すみよしの濱のまつばら見えぬまで
きりたつゝこむるあきのゆふぐれ　坪田きみ子

あさぎりに汐路もみえずなりにけり
おきゆくふねをしまとみるまで　佐藤きみ子

釣小ぶねあまのすがたも分かぬまで
きり立ちこむる和歌のうらかな　山田靜子

足びきのやまのおろしにきりはれて
ちかくも見ゆるあはぢしまやま　山田婦美子

ほのぼのと昇るあさ日にうききりの
晴れて見えゆく四方のうなはら　兒平千賀子

高ねよりおろすあらしにきり晴れて
あらはれわたるおき津しまやま　宮島のぶ子

ゆく舟の帆かげもけさはみえぬまで
そでのうらわにわたるあきぎり　山田きよ子

ふなうたの聲は聞えてふねやいづこ
いそべのどかにたてるあきぎり　志業田久子

うちよするなみの浮ぎりすゑはれて
なごりをのこすとほのまつばら　坂井さと子

きりの上に立ち行く雁のかげ見えて
つきおほろなるたけしばのうら　坪井さよ子

ほの〱とあけゆく空にたつきりの
たえまにみゆる海士小ぶねかな　北島功子

見るがうちに海原とほくきりこめて
なかばかくるゝみほのまつはら　熊谷文子

海ばらのあかぬながめをとひくれば
なみまさへぎるゆふぎりぞ憂き　德山ふく子

朝きりはなみよりはれてまほかたほ
いそべのまつもみへそめにけり
きりたちてすなさる舟はみねれさも
さふくきこゆるなみのおとかな
もしほ焼けふりもそれさみねぬまて
すまのうらわにきりたちのほる
かせのれもたねてうみへの松かねに
おきよりかゝるあきのゆふきり
若まつなうみにはたれかうゑにけん
きりたちこむるすまのうらかな
ありあけの月かけうすくなるまゝに
きりたちわたるうらのまつはら
ほの〳〵さまづたちそめて難波がた
なみなへたつるあきのあさきり
あさひかげかくすあき霧はるゝらし
いそゆくふれもみねそめにけり
あま人や立かへるらんかちのおさの
きりなわたりてそらにきこゆる
こきいづる舟のゆくへもわかぬまて
きりたちのほるあきのうなはら
海士のよふ聲もかすかにきりこめて
ゆふへさひしきあしの屋のさと
海人の住むさま家もそれさわかぬ迄
きりたちこむるあきのゆふくれ
霧たちて月もてりあへぬあきの夜に
さすがにしろき三保のまつばら
もしほやくけふりたちそひ舟路なも
こねわかぬまてかすむゆふぎり
かきくらすこの夕きりにいそやまも

高原まつゑ子
千代田たき子
河田ふく子
瀬谷浪子
駒澤まつ子
小村琼子
青木たま子
榊原八千代子
矢田部信枝子
原りま子
日高かず子
松本その子
長谷川むろ子
新藤雪子
舘脇ます子

あまの小ふれもみねすなりけり
たちのほるもしほのけぶり切りて
きりにたくらきあきのうなはら
霧ふかみ八重のしほぢにたつなみも
たゝいそあらふおとはかりして
ゆく舟もかへるもそれさわかぬまて
きりたちこむるあきのうなはら
波のれはきこゑくれさもきりこめて
あきのうみへはなほろなりけり
磯のまつほのかにみねてうみはたゝ
あさきりはかりたちにけるかな
あさきりにこめられけりなくろ舟は
ひさよふふねのおさはかりして
靄がすむふせ屋もそこさわかぬまで
きり立ちこむるあきのゆふぐれ
和田のはらなみの浮ぎりふかければ
さすかたまよふあまのつりふれ
たね〴〵に安房の遠やま見ね初めて
きりはれわたるしなかはのおき
あかしの海霧はれそめてほの〴〵さ
あらわれたるあわじしまやま
朝な夕なもなれし舟人もまよふらむ
うみ路のきりのふかくこむれば
あきふかくたちかさなりて海の面の
なかめもわかぬ四方のあさきり
あさきりのはれゆく沖のなみの上に
かすそへにけりあまのつりふれ
舟うけていざ見にゆかむきしの松の
こずゑのみなる須磨のゆふきり

新海わか子
片山あや子
戸塚てつ子
吾妻ちか子
諸井久良子
曾田なか子
來栖登榮子
金原きつ子
高砂菊代子
高秋き代子
川端また子
川端まさ子
鈴木秀子
加島みつ子

舟よばふあまがこゑのみながくして　ゆふきりふかしあは路しまやま　大亦たか子

いさたるゝおきなも岩も見えぬかな　きりたちこめしゝらはまのうら　長尾五十子

見わたしの沖のしま〴〵みえぬまで　きりたちこめぬしらはまのうら　長尾たか子

朝日さすなみのうききりたえ〴〵に　あらはれいつるあまのつりふね　鹽　さき子

橋たてのまつのかげさへわかぬまで　きりたちわたるよさのうなはら　野崎園露子

きよみがた霧のたえまなかむれば　みえつかくれつふねのこぎゆく　石川千里子

朝日出でゝひがしの海のかた帆ま帆　さぎりのおくにほの見ゆるなり　畑野利武子

すまのうらきりたちこめし夕ぐれに　さもよふあまのこゑかすかなり　佐藤秀子

磯やまのまつにたなびくゆふぎりに　しほやくけむりたちそふらん　岡伊勢野子

こきなれし海路なれさもあききりの　ふかきあしたはなほまごふらむ　加藤露枝子

田子の浦わがみにくればいぶせくも　なみにたゞよふあきのあさぎり　淺川さめじ子

舟びさはなにをしなりにわたるらん　ゆくへもわかぬきりのうみずら　小川初野子

たちこめて浦こぐふねのゆくてさへ　さだかに見えぬなみのうききり　千石素子

さらでだに舟こぐわざのあやうきに　きりさへこむるいづのうなばら　二宮春枝子

あさぎりははれ渡るらむ眞帆かたほ　うみづらさほく見え初めにけり　代年子

ながめやるすまも明石もあやにくに　またきくれゆくあきのゆふぎり　下元もさ子

も汐たくあまがげぶりもうちまじり　ゆふぎり立ちぬしほがまのうら　北原季子

いくさぶね淡くも今朝は見ゆるかな　きりたち込めしゝながはのうみ　目黒佐喜子

も汐たくあまがけぶりもうちまじり　ゆふぎり立ちぬしほがまのうら　並原季子

つゆ島のちかきうみちもあききりは　さほくみせてぞたちわたりける　高市さし子

さゞ浪のよるかさぞ思ふあけたれど　いそやまあたりきりふかくして　三神ちよ子

海士のなもかへるふなぢやまごふらむ　わかのうらわはきりふかくして　佐伯きぬ子

立わたるあさぎりふかみふなびさも　さをさしまごふあきのうらなみ　田中房子

わがまどのまど見てまし秋ぎりは　うらこぐふねをへだてざらなむ　野中朝子

浦ちかくおりゆるきりはもしほやく　けぶりさ共にたちそめにけむ　山崎千代子

霧こめてそれさも見えずうらひさは　おもはぬかたにこゑのきこゆる　宇高まつ子

もしほやく烟もそひてたちぬらむ　うらはのまつにかゝるゆふぎり　越知かめ代子

いそ山も小じまもわかずなりにけり　見わたすかぎりきりのうなばら　近藤よし子

磯やまにたてるなみまつきりこめて　なみにこゑあるおきのつりふね　濱　さみ子

朝ぎりのなひくうらわにこゑすなり
　いつれのあまがふねいだすらむ　高橋より子

ほの〱と朝ぎりふかくたちこめぬ
　なぎさの小じまの見えわかぬまで　大谷津峰子

いまいでし小舟もそれとわかぬまで
　きりたちこめし和歌のうらかな　依田さく子

見わたせば船のゆくてもわかぬまで
　きりたちこめぬあきのうなばら　中山千代子

ふりさけてうなばら遠くみわたせば
　きりのまがきをふねこぎいづる　尾崎秀子

もしほやくあまの苫やをうすくこく
　たちそめにけりあきのゆふぎり　林久子

住よしのきしへのまつのおとばかり
　かくしかねたるあきのゆふぎり　林之子

すゝき釣るあまの小舟も見えぬまで
　きりたちこめしあきのうなばら　池江榮子

ふきさそふあらしも松にしつまりて
　きりたちこむるあまのはしだて　馬塲みか子

さす方ぞいづこなるらむゆくふねの
　きりにきえゆくあきのうなばら　藤非みゑ子

浦つゞききりたちこめてもしほやく
　けむりもそれと見えわかぬかな　大久保令子

ほばしらの末のみ見えてなにはがた
　ふかくもたてるあきのゆふぎり　笹子茂子

たやすくも秋のあはれを見せしとや
　すまのうらきりたちわたるらん　笹子歌子

舟おくるいかもこゝろをしらればや
　あききりふかくたちへだつらん　敷島花子

海ばらやなみのたちゐもわかぬまで　降田滿喜子

　ゆふぎりふかくたちこめにけり

秋ぎりはたちへだてゝもはまなの橋
　汽車のひゞきはかくれざりけり　賀茂笹子

よる波のおとばかりしてさひしきは
　とまやもみえぬうらのゆふぎり　加藤加壽子

みわたせばけぶりにきりも立そひて
　ゆふべさびしきあまのいへむら　服部房子

おきとほく日はさしながら霧こめて
　ふたみのうらはあけむともせず　河合縫子

ふたみがたむかふ朝日のみかゞみも
　くもるはきりのふかきなりけり　伊藤千代子

ふなぢよりまつをろがめば朝ぎりの
　とばりかけたりあきのみやじま　伊東いさ子

朝ほらけうきたつきりになにはがた
　あしまのふねやこれまよふらん　田尻保代子

浦かぜのふきのまに〱きりはれて
　さやかに見ゆるおきのとほやま　田尻ほき子

海原にうかぶ小舟の影もなく
　梶の音のみ遠ざかりけり　吉田久子

もゝ舟のほはしら見えずきりこめて
　みなとさびしきあきのゆふぐれ　淺井靜子



九月二十日兼題　暴風

天　甲府市　山田町　名取正代子

やよひばかり、ゆるうふきたる花風、水無月ばかり、涼しうかよひたる夕風をおきて、風としいへば、あらし、こがらし、いづれをわかず、厭はしからぬはなかるべ

し。さるが中に、花にいとふあらしもいみじけれど。なはやさしき秋野の千草を、いとをしくも、吹きまきあるる野わきの風こそ、又なくうらめしけれ。ひと日、夕つかたの空のけしき、たゞならずと見ゆるほど、俄にあらき風の音す。辰巳の方よりと見てあれど、又も戌亥の方より吹きかへして、むら雲立さわぎ、雨さへふりいでゝ、いとゞをどろ／＼しう吹きたつるまゝに、こゝかしこのつまどとざして、夜もすがら、いをねず。こもりいたるほど、何のこゝちかはせむ。あかつきがたに、やう／＼風なぎて、雨さへ靜まりぬ。さてもいみじかりつるよと、とくおきいでゝ、外面の野邊を見やれど、あはれ／＼、きのふまで、秋の錦とめではやしつる糸萩玉萩をはじめ、いづれも露おもげに打たふれたるさま、いみじうあはれなり。花薄はほにいづれど、まねくべき袖も打やぶられ、ぬき捨られし藤袴、風に亂れしかるかや、さては愛らしき撫子など、はひよろぼへるさま、いはん方なくあはれなり、ましてなまめかしき女郎花の、たけ高きをれふして、打なやめる姿を見るに、某僧正の昔もしのばれて、下露にもなびきたらましかば、かくあらき風にはあたらざらましをなど、おもふもまたあはれなり。その外、むかし憶良かえらひし七種ならぬ八千草の、いづれをわかず、うつろひはてたるあたらしさよ。かくと知りせば、とく手折りても見るべかりしを。さても口をしの野分の風よ、うらめしの暴風よと、くりかへすも、今更をこがましくや。

地

在清國上海　白岩艶子

宵の程は唯、庭松の梢を鳴らし、折々窓の板戸に、小雨吹きつくるばかりなりしか、夜と共に、やう／＼吹き荒みて、颯と吹きつくる時は、あはや屋根も戸も、破れはてんかと思はるゝばかり、恐ろしうなりゆき、家をゆらがし、草木を折り、ありとある物を飛す音、さながら百雷の一時に、落ちたるも、かくやとこそ思はるれ。況して風の絶え間に、篠つく雨の音のもの凄さ、身の毛もよだつ心地ぞする。はじめは、さもおぼえざりしを、實に今は、つむじとはなり果てたり。朝東風涼風の、床しさはいはずもあれ。花誘ふ春の嵐も、にくきうちに、なほ優しくこそあれ。露吹き結ぶ秋の野風も、すこしはあらふるものから、なほ飽かぬところは、ありけるものを。同じ風、同じ嵐。如何なればかく。恐ろしく、情なきにや。あはれ、海原遠くこぎ出て、浪にたゞよへる船も、數多あるべきを、この暴風にあひて、覆りもやすらん。さるにても、倒れかゝりたる賤が伏家、よも、このあらしには支へじ。この一夜を、如何にして明すらん。家の内に、閉ぢ籠り居るだに、かく恐ろしき夜を、人の軒端に、たゝずみ明か

す、かたゐや如何ならん。昔の人は「花のあたりをよきて吹け」と。うたはれしも、あらは、唯幾か伏家をとこそ、いはま欲しけれ。あはれ暴風よ、心あらは、さる、かなしきあたりをな吹き荒みそ、など例のつくづくと、思ひ玄づめる折柄、凄き音して、颯と、吹き入りたる風に、燈火はたと、消えぬる。心細さいはんかたなし。

八　東京四ッ谷區傳馬町壹ノ五十四　目黒佐喜子

結びつる夢暖き夜半の頃、閨の戸はた〳〵と音するに眼覺めて、枕をそばだつれど、宵の程までは、月清く虫の音面白かりしにも似ず。何時の間に風とはなりけむ。軒のむら竹ざは〳〵とそよぎ、吹きまく砂に、雨さへ交れりと覺ぼしく、板戸荒らかに打叩くなりけり。庭の樹立は、凄さまじきばかり枝をならし、閉しや放れけむ。竹の編戸は、忙はしげに煽る音す。何處よりかいとおどろ〳〵しき響の、襲ひ來るごとに、家は震ひ搖ぎて、今にも倒れやすらむと靜心なし、瞼も合せかねて、只打すくみ居るほど、うつゝごゝろなし。曉近くなる儘に、やう〳〵靜まりぬ。やをら起き出でゝ、まづ庭に下り立ち見れど、あなあはれ。盛りと見えしちぐさの花は、見る影もなくなり果てゝ、いたくど泥にまみれたる。傷はしともいたはし。柳は倒れて池水に浸り、清らかなりし苔の上は、折れたる松が枝、折れ散りし木の葉などにて埋めたり。隣ざかゐの中垣も打たふれつ、家居もあらはにぞ見られける。若木に、老木に、幹折れ、根ゆるみて傾きたる、あるは、またく倒れ伏したるなんど、幾本といふ數を知らず。實に、夜半の恐ろしさもわすれかねてなむ。

八　福島縣師範學校　瀨谷浪子

世に、暴風ばかり、おそろしくすごきはあらじ。くがにすさみては草木を吹き折り、家屋をも倒し、海に狂ひては、怒濤を起して、大ふねをもくつがへす。これに火をあやまたば、百千の高樓も烏有に歸し、幾多の財寶も烟と化すべし。風とし云へど、夏の夕ぐれのそよふく風の外は、花一ひらちらす春風だに、人にはうとまるゝを、かくもすさみ狂ひては、たれかは愛つべき。まいて故郷を遠くはなれ來て、まなび舍に起きふしする身の、庭の老松折れんばかりにさけび、窓の戸のあけんばかりにかまびすしき夜半には、ゆかみし家に、わびしうすまひ給ふたらちねの、如何ばかりかこち給ふらむと思はれて、さすがに夢の結びがたく、ふすまの襟をうるほすも、折々なるぞかし。されど、幾萬の寇を筑紫の海の藻屑として、國の憂をとこしへに去りし、弘安の昔をしのぶれど、そゞろに尊く思はるることもあれど、是は神の御わざなれどつねのことにならべいはむもかしこしや

人

三重縣度會郡宇治中之切町　河原芳子

穏やかなる時は、柳の糸にも姿をかくせど。あらぶる時は、石を飛ばし、船をも覆へし、家を倒し、立木を拔くなど、いとおやしう定なきものは、風なるけり。葉月の中つ頃より、長月の初にかけて、いつも〳〵、あらびいで、野とも云はず、山とも云はず、ひた吹きに吹きひた狂ひに狂ひて、あさましきありさまになしゆくめり。あはれ、この風、人の心の上にも、吹すさびてはど、心おかれてなん。

河村君子

少女子がうち鳴らす團扇にまれかるゝ風はやさしく、童かなぐさみの風車にもてはさるゝもいとめづらしけれど、なか月の頃天の八衢より吹き落ち、潮の八百重より吹きあぐる暴風こそ、いみじうおそろしけれ。

雲は空を走りて、そのけはひすさまじく、世界は常闇のごとく暗くなりて、家を倒し、木をつんざき、岩をくだき、船をも木の葉の如く吹きちらすめり、すぎにし日風いとあらく、山とも云はず、野とも云はず、ふきに吹きすさびにすさびて、賤が屋の倒るゝこと數しらず、近隣の老翁の話にも未だかゝる世を見しこと侍らずとか、げにおそろしきは暴風なりけり。ゆきかひの人の傘は取られて空にさばされ、我身をもあはせ吹かれんばかりなれば、皆外にね出です、その音は恰ゝ山裂け海あふれて、五百津のさくいかづち耳もとをつき破るが如し。天か下の家屋のひしひしに碎かれ、さては船のくつがへさるゝは宜べなりや。田さもなく畑さもなく吹きはらゝかされて、農夫は夏の暑さに汗を流してほねをりしかひもなく、悲しむ言葉だもいでず。すさまじかく流るゝは同じ大御代の光をうけつゝもむくつけきはせものゝ多き爲に、いぎたなき世のねむりをさまさんとにや。さるにても國の御柱をゆがさんとする暴風はなによりいちはやき豪傑にこそ。そのをり友垣のもとより如何にかなど云ひおこせしはしつ方に歌一首

おとづれん言の葉草もなきまでに
　文の林はあれはてにけり

さ、あはれ近頃この暴風の文の林にまで吹きすさぶことよと、そゞろにかなしまれてなん。

中村さく子

おだやかなる風は益風てふものは、空氣の、運動によりて、起すなり、ある事も、あるめれど、烈げしき風は、暴風とて、世にもおそろしきものなり。家屋を破り、人畜を害し木をぬき。土砂を、まき上げ、石を飛ばす、そがため、道路の往來、なんじうし、海上には、山の如き波の起り島はくづれ舟は破損するなど、いふもおそろしき事のみ多し、此風、我國にては、二百十日頃に、尤も、荒び、農家も、舟人も、おそろゝさか、

田中聴子

ふつきの末つかた、廿近六日の頃ほひより、雨降りいてゝ、十日あまりが稍降りつゞきければ、土地ひきゝ處の習ひとて、そよ吹く風に漣を起し、女の子男の子らは、木のこぎれもて、舟などもの、し篠つく雨に衣のぬるゝも、厭はず、水中をあくがれ歩くもをかし、學びの窓に通へる童の、風に雨傘とられ打ちふためくも一しほうさをます種とぞなる

彼の處にひさり此の處にひさり、肩に鍬かたけて、田のあせ路走りあるくは、田の面より水落さんとてなるべく、みの笠に身をかため、釣竿三つ二つ肩にして、大きやかなる竹籠を腰のあたりにさげ、川邊さして急き行くは、濁り水に糸たれむとてなる可し、然れど雨は中々やむけはひなく、大風さへ加はり、終日盆を覆さすが如く降り續きけれ

ば庭面は湖の如く路はかはりて、小川となり、里の賤が家は、水面にものせし辨財天かとうたがはる、遥か彼方の堤に三たり四たり打つどひて、あはてふためくは浦人共の堤の上より水の流れ入るを防ぐなるべし、沖にいで糸たれ居し漁夫共は、み空の只ならぬに、急ぎ糸など取りをさめ、直帆白帆風にはらはせ急ぎかへるさまもいと哀れなり日暮れに至り雲の飛びかふさま只ならぬに里人とも打わづらひ神佛に事なかれしと祈る甲斐もなく一回の驟雨に伴れて怪しき風の颯と吹き來ると共に、雲脚は次第に迅く、幾塊り妖雲東より西に走るを見ゝ、斯くして時針の進むに從ひて天候不穩の狀益々現はれ、午後十一時を過ぎ十二時の頃ほひより、果然東の疾風吹き起り、次で南東の烈風となり、一時二時と刻まるゝに附けて、風雨猛烈其凄まじきこと、たとふるに物なく、やがて風位は南に變り益々烈しく荒れに荒れて、吹き捲くる中に、電光は墨を流し大空に光り、凄然たる狀騷然なる響は、天地の晦暝を色取り今にも全村の家屋樹木の葉と散りぬべく思ばれけり、去る程に三時の頃にも風位西に轉じ稍威力を收め四時過に至りて、沈靜に歸したれば人々茲に始て蘇生せる心地せしならん、さては、村中の光景如何にと打着るに傾きたる家倒れし家、算なく、彼處にも壓死されし者あり、此の處にも變死人ありとさへ傳へられ、親は子をうしなひ子は親に別れて、歎き悲しみ、滿目の荒凄悲慘の狀實に窮りなく中々筆にも載せがたくなん草木も皆風に吹きはらはれし事とて、日頃のみどりも何處へかきえうせ今ははやちりをたゝへて見る目もいとゞあはれなり、家の倒れし、木々のこぎれはかしこの籬こゝの木の根にからまれて、日頃めでにし庭の面もあれ果てゝ何に一つとして、哀を催さぬ事はなし、二三日を經るうちにみ空も常にかへり、日は照りにてりて、あつさたへがたくありしに、夕つ方に至りて大雨とさ降り、鳴神はためくよと思ふまに、雨晴れ夕日きらめき、葉末の露にうつろひ　珠を連ねたるが如く、連日のうつ〳〵しきも一時に晴れやらむ心地すれど、親をうしなひ子に別れし人の心ぞ、如何ならむと思ひやるだに哀にて、中々に晴れやらぬぞうたてしや

佐々有鄰子

時候の野分ともおもひし、朝ぼらけ、東の空に、一筋しろく、狂雲は棚引きぬ、なにとなく、けしきかはりて、よのつれならず、いとものさわがし、ひとつふたつ辰巳の方よりさと、吹くるとおもふほどに、まがきの葛の葉うらかへり、庭の萩はらなれふせり、見るかげもなく、なるよとおもふまに窓の戸たたく雨は、銃玉のごとく、松がえたかくすぎゆく風の音は、大砲の聲よりも、すさまじく、ひびきわたり、隣家の米倉は、かはら飛ちり、荒戸山の喬木は、根ながらたをれ、袖の港の舟はしか島の沖に、ふきながされ。うちよする海潮は、雨に交りて、磯の松の青葉をからし、小田の稻くきは、糸のごとくふきさかれ、粟生もそばむぎも、風にまくられて、赤はだかのすがたとなれり、實に縣下の景況は、筆にも詞にもつくしがたく一重に天恩を仰ぐより、ほかの手段もなく、萬物の蘇たるはらからも、虫に鳥にひとしく、露にそぼち雨にうたれて朝夕涙の乾、ひまもなくなく、かくはしるしぬ、

徳永廣子

時候ながらも、其けしきなきには、にはかの風ふきいでて、いとどあれにあれて、いかばかり、人に苦勞をかけ侍ることかな、海路は、ことさらあまたの人といふ人にあやふきめをみせつるのみか、つひには海のもくづとなしはて、また舟は濱にゆらるゝまゝに、風にくだかれ。名をも形をも失ひぬ、陸地は、おほくの人の、家をたふし、屋根をうばはれ、喬木をさかれなどせり、あまつさへ、田畑の植ものまでも、荒されつるさまは、言の葉にもつくしがたし、風をうらむべきかかれば恨むにたらす。たゞ一斗の不幸と、いふべきことになんありける

中山信子

宵月夜のかげ、忽ちかきくれ、群雲まよひ、風荒々しう吹き出で燈火またたきて、書讀むべうもあらず、庭の松楓、植込の樅檜等、吹き荒む風と共に、凄まじき音たて、窓の戸もはしたなき程にさわぎていと物凄く、千草の花の上に、心置れ、今や吹きつぶされんか等安き心地せず、いれしともなく、明にけり。終夜、吹き荒みし風も明がたに至り

て、漸く、しづまりたれば、前栽を見出すに。虫籠さげし、松が枝は折れ、秋海棠鷄頭は入りみだれて、道に横はり、葛朝顔は垣ごめに秋の上にぞたふれふせる、根ながら持ち行かれたるもあり、垣固は大方崩れて、家居もあらはに外より見透さるゝやうに成り果ぬ。如何にしたまひしかととひ來る人の、かしこの木はたふれたり、この家は、かたぶきぬ等語ふ折しも、外の方にて、小供の栗多くひろひゐたりとて喜ぶ聲す。

山田きよ子

大風に、ふされざむれば、こはそもいかに、ゆめなるか、東風烈しく、其音のすさまじければ、おき出でゝ、見しにいよいよ吹き募る暴風に樹木吹たふされ、庭の池水も、あふれ出で、其有樣、實に、おどろくばかりなり。

昨夜見し、四方のけしきは、さながら、墨畫の如くに、さびわたり、むぐらのつゆは、置つこぼれつ、一しほ、月に風情をまし、さやかなる光りに、姿は、ひとりまなびのまどにて、歌など詠じなどしたりき、さばかりめでにし、ゆふべの、月のかげもなく、今朝見れば、かゝる嵐、只おどろくのみ、されば古人の、「明日有と思ふ心のあだ櫻夜半に嵐の吹かぬものかは」げに、明日をも、しれぬ、いともはかなきうき世にこそ

坂井とし子

月はさやかに、山の端を出て、心ゆくかぎり、晴れ渡れるに、夜やいたくふけぬらん、行きかふ人も、今はたえて、さと吹き入る風寒く、庭のもみぢば、かげ見えて、いとゞ、きよけく、いろどられたる、えもいはずをかし。をりしもあれ一むらの彩雲變るも早く、墨すり流したらんやうなる空になりぬあなうたてしと、ふしどに入りて、しばし、打まどろみたるに、暴れにあれたる風、窓にうちつくる雨の音、すさまじなんどいふばかりなし恐ろしうて、夜ひとよ夜具引かむり、耳つぶし居る程に、やう〳〵に、なごりなく、晴れやみて、一縷の微紅、東のかたに現れぬ、いそぎ、打出でゝ、庭の面影、如何あらんと、眺むれば、げに果敢なきは秋の千草にこそ、昨日まではあなめでた、あな美しと、もてはやされて、時めき渡りしを、昨夜の雨風にいたう暴らされていまはみるかげもなしあはれときめきしものをはかなけれ

北島功子

天災といふものゝ數多きがなかにわけていみじうもすさまじきものは暴風になんありける、むら立つ黒雲は見渡すかぎり天を掩ひ、おどろ〳〵に吹き荒ぶしまきの風は、山を動かし海をゆすり、砂をとばし石を捲きあげ、瓦といはず塀板といはず、下なるものは天に舞ひ、上なるものは地に打つけられ、雲衝く計りの大木も右方左方に吹き折られ、賤が伏家も高殿も、あはれ一時の間に粉碎せらる、ましてや萬物にかへがたなき人畜をさへ少なからず損ふにいたりては、實に〳〵おそろしといはんも、すさまじといはんもなか〳〵なり、誠や風神の憤り、くるひにくるふ計り世にも詮術なきものはあらじかし。

日高かず子

諸々の禍多きが中に、天災ほどいみじう恐しきはあらじ、今年八月故郷なる鹿兒島へものしぬ、行き着きしは、彼の十四日の夕つ方なりけり、吹く風の音空行く雲のけはひのたゞならぬに、暴風の警報は來ぬとて、人々たちさわぐわきて、今年はあやしう時候の不揃なるを、かゝる折こそはやちははげしけれと、老たる人の言につれて、燈火かゝぐる頃より雨戸くり出し、竹よ繩よと家のめぐりをからめさすうちに雨さへそひて何となふそう〳〵しうおぼゆ、うからやから嬉しきまどゐの言の葉もおのづからちり〳〵なり、夜の更くるにつけて、風はます〳〵はげしうなりもてゆくに心もとなき事限なし、眞夜中頃には降しきる雨吹すさむ風に、やがては家も身も飛なむ心地そする、余りの事にとり〳〵、顏見合せてのみありしが、かくてはあられじとおの〳〵雨戸をさゝへ樫を押へたちつ居つするにも空恐しう、雨の洩る音其處よこゝよとあわてさわぐ折ふし、夢の中なりし幼きが泣出すも心苦しや、戸の外には木の折るゝ音霰の樣なる雨の戸も碎くる斗に降りそゝぐ、ひまより稲妻の光の身を切るごとくにさし入るすさまじさげにいはん、方

なくなん、はや家をおられけん、人のちまたに泣きさけぶ聲は聞ゆれども、そが内にいれんすべさへなし風は思のまゝにあれにあれあすまでもかくあらんには家も人も殘るまじなど思へば、氣も魂も身に添はず偏に神佛を祈るのみなりけり、明け方ちかうなりてさしもの風次第に弱りゆくには、はじめて生きたる心地してやう/\目を開きぬ、明るをまちゆがめる妻戸押開けて立いづる外のけしき見るかげ最と無殘なり、家の瓦は落ち軒端は傾き籬垣はくづれ、夕まで水まきてめでにし盆栽の倒れたる上に、時ならぬ落葉うづ高う積れるをかき拂力だになしみのらばとまちにし菜の落ちたるを、惜しげに競ふ幼子もあはれなり、貧しき人の家はたとへん樣もなし、やう/\死したる人傷負ひたる人のたより聞くから、今更の樣に物すごくおそろしうけに拙き筆のもの盡すべきにあらずかし、

幾千の人の苦しみ呼ふ聲の雲の上まで聞えけん、かしこき御あたりにも大御心いためさたせまひ、折柄御人數多き中より尠からぬ黃金をめぐみたまふなど中々なるあな恨めしの風や、何しに昨日までは麗かゝげてさへまちけむよあはれ情なの風

田中すゞ子

例の物語さういで、夜ふかくよみふけりてありけるに、まきの板戸をたゝくものあり、かく世にさほざかりたるわがすまゐにましてや、このさびしき夜半、たれかはさひくべきはや時もすぎぬれば、水鷄の、わざにもあらむなどさ、かう思ひ亂るゝ程、いよゝ音しげくなりまさる、心にかゝるまゝ、ほそめに開きて、うかゞひしに、變りやすきさいひつたへたる、秋空のいつの程よりか、野分あら/\しう、ふき出でそがまに/\、散りこふ木の葉の故ありげに、おさなふにてありき、さてもあやにくなる時に、ふき出でけるよ、日頃まち渡りし花すゝきの、今日しもやう/\、ほに出でゝ友こよかしさまれき初めたるだにあるを、今を盛りなる、ま萩の枝もたわゝに、おく露の曉ごとに、數も添ふなるを、あはれ、ふせぐべきかげだにあられは、わびしさもさこそあらめなど、思ふ物から臥床に入りても、束の間もれむられぬに、風はいよよつよふなり行くぞいともうしろめたうてなんわが心も共にさはぎたちぬ。曉近くなるまゝさしもおそろしかりしひゞきのやう/\しづまり行くにいさうれしういそぎおき出でゝ庭になりたちしに、美しう散りしきたる、木の葉にたどらん道もなし、ふままへをしき心地せらるゝまゝ、はう木もてはき分けつゝ、千草のもとに至り見れば、錦のまがきに、たちかくれてはづかしげなりし、女郎花のいたく、打ちしほれて、ぬきすてけん、主だもさだかならぬ、ふぢ袴さゝもに、ふしまろび、すがりたる袖垣のそれながらにたほれて地を這ひつゝはつかにさき出でたる朝貌の樣もあはれなり、黃なる落葉の中に、赤きものあるは何ぞさ見れば、こよなうめでいつくしみし、なでしこなり。そがかたへに色づかん頃はさこそさ思はるゝ楓の一枝、うち折られしが、なを幹をはなれで、さかしまにたてるなど、みなさり/\に心ありげなり。日頃はかへりも見ざりし道のべの小草まで、かゝる折にはきつかはしくてなん。且は千町田の樣も心にかゝれは、やをら折枝戸おしひらきてもすそかゝげて露かふき野邊の、小みちをたさりゆきぬ、暴風さいふ題により。去年、ふる里にてありし景色の、はしなくも思ひ出でつるまゝかくなん。

高砂きよ子

葉月と云へば、唯さへ風の荒み勝ちなるに、殊に、二百十日は、農の作物に大切なる日とてそよ吹く風もいさふものから、何れの里にても、其前日には、風祭りして道のちまたに、御ふだなど立てゝ、御世やすかれと祈り、日和なれば、秋のたり穗の豐けさを共に打ち喜ぶあり。今年も例の風祭りして御世やすからんを祈りつるに、折ふしその日夕つかたより、東の山の端走る雲足早みて、高根おろしのいみじう吹きおろせば、鐘の小田の、稻の笹原、穗浪かたわきふしなびきて、鳴子をゆする音すさまじう、あしのまろ屋も吹きさばさんばかりのけしきにぞなりぬ、產土の森には塒にまどふ村烏の聲、風に交りて物さわがし、賤が心も安すからずかくては、秋のたのみも空しからんさ、打ちわぶるに風は終夜に入りて、いよ/\はげしく吹きすさびて、あなたの森には

木のたをるゝ音こなたの木立には枝折るゝこゑ、物すさまじくひゞき渡りて、家さへ今や吹きたをれんばかりゆるきそめぬ、幼き童の泣き叫ぶに親なる人は今年はかりいかにかくいまく〳〵しき事ばかりは出つるぞと顔見合せいぶかるのみあなうたてある世にもあるかな

綿野りき子

あきらかに治まりゆく大御代にいみじきわざはひ、こゝかしこに多かるは、そもことしは何の厄にかあたりけれは、宮山の大火耳をはなれぬまに横浜の火災、今又九州地方の暴風をきく、かへす〳〵も胸いたきかぎり也、ことはざに、地震雷など云へど、風またおさらずおそろし、如何なれば家をさばし、木をたふし、あるは舟をくつがへするいとすさまじ家のつぶされ、田畑のあらさるゝは、一時のわざはひながら、命ありてのもの種といふなる、其たふとき命を、うばゝむとす、彼の別子鉱山のわざはひにかゝりし人々、如何によみぢにまよひぬらむ、それもこれと皆風のしわざ、おそろしさも、おそろしきものはかぜになむ。

畑野利舞子

照りもせずくもりもはてぬ此夕方、岡べにあやなす紅葉は一ひらたにうごきもせず、野べに錦おりなす錦おりなす桔梗萩游萱など時を得顔にさきに匂ひ、あひだを流るゝいさゝ小川の水もいと清く、此處彼處に働ける人の歌ふなる聲ほのかに聞えて、いと〳〵静けき風情なりき、折しも雨をさへ交へていとゞはげしくふきすさぶ風こそ憎けれ、野も山もたちまちにして修羅の巷かとはかり、いさゝ小川も今は木の葉にうづもれしならん、流るゝ水の音さへ絶えて、遠く聞えし一聲は板戸の倒れたらんが如きのみ、

いかにあはたゞしかりけむあるは笠を負ひ蓑を逆りあるは手拭にてをかくし蓑を股にさつるなど、あやしき姿せる者三たり四人、しごろもごろに走り行く様、おかしさも又あはれなりり、

おのれも時々家ゆらるゝ音のして恐ろしかりければ、二階より下りて大きやかなる火鉢の傍にゆき父母の傍に兄妹ともに打よりて さきの農夫の様など話せしに、皆々はらをかゝへてぞ笑へける、

あくる朝とく起き出でゝ四方八方を眺むれば、山の木の葉は中程散り、野べの草花皆うつろひたふれ、はるか彼方の丘のうへにありける鐵砲小屋もいつしかに飛び去りて影だに見えずなりぬるなど、夢の間にかばりしけはひ、目もあてられぬばかりなるぞうたてしきのふの淵もけふの瀬となるためし、まことに世にあることなりけり

河方喜代子

此ほどより、空のけわひも只ならず、くもあし繁く、あやしき景色にいと心もとなく、あらしなどもや、あらんがと、あげわづらひてしに思ふに、たがらずよへよりも、俄に、つよう、ふり出、風さへ、はげしく、吹き來ぬれは、其ものすごき、云はん方もあらし、大木は、根よりたほされ、家根はたゞ紙鳶などの飛がやうにとびかひそこはかのへいくらたをるゝ音の、すさまじき川には、水の、かさまして、はしさへ、おし流さるゝなど、いと〳〵、おそろしさの限りなり、あゝ、天のなす處とはおもへども、實に、あらしほどおそろしきものは、あらじとぞおもふ

二宮壽枝子

此日頃空かき曇りふりつゞく雨に、人々心もとなくとく晴れなんことを祈りしかひもなく、此日の夕方より俄に大雨となり風さへ烈しく添ひければ皆々心痛むる一方ならず、かゝるに夜もすがらやまさりければ河々水かさまさり、堤もくづれ、大水一時に押しよせ來ぬ・心ゆるしてあらんには水に葬られやせんと、人々あわてさわぎ貝吹き鐘ならして、及ばん限り力をつくせども雨風ますく〳〵はげしく、稲妻ひらめき雷さへ鳴り渡り、賤のにはもかくやと、思ひやられていとものすごし、さて被害甚だしさはいぬるに家なく、炊ぐにかまどなく、親をおひて大樹にしがれ、子を抱きながら水に溺れたるもありとかや、誠にあはれなるは助けを呼びつゝ其まゝ水中に葬られて死したるもの、数しれずとかや、又田畑の荒らされたる幾町なるや限しれず、農夫が夏のあつさもいとはで草とり虫拂ひなど心つくしのしるしありてよく實かりたり、あすはうから打よりて刈り取らんなどゝいひて喜ひし稲も

皆な雨の爲に數尺の淵にしづみ見ろ限り荒海さなりはてたるそあさましき、

かくの如き有様を見聞くものさへ身の毛もよだつばかりなるを、まして被害者はいかゞあらん、

大谷津峰子

徒然なるまゝに、日頃好める、冊さもひもさかばやさ、燈火かひ立て、文机にむかへろ、折しも、さみに風ふ起りて、燈火ははたさ、消ねうはぬ、あな、にくやさ、つむやきながら、又燈せば、風來りて、又消ねは古てぬ、實にや、危き事を、風前の燈火なりさ、人の、言はれたりしも、道理にこそこたびは北窓さぢ、又燈して、書ども、見もて行くに風は、時を經ろまにく\、力ますく\加はり、雨さへそはりて、いさ烈し、物怖ぢする、幼き妹弟等は、書齋のかたへに、つどひまろびて、風よさく止みれかしさ、神佛を、いのろもおかし、烏羽玉の夜は、更け行けご吹きすさべる風はいよゝ強く、庭のわたりの、此方彼方に、何やらん物音、いさすさましうて、胸さゞろき、しばしの間も、眠りもねせず、午前五時さもおぼしき頃、やゝ風和ぎて、物音徐にしづまりにたれば、妹弟等さ、歡びあはてゝ、窓の戸押しあけ、打見れば、夜はほのく\さ、明け渡り、庭の樣の、いたくかはりて、そこにかしこに、見馴れぬ、木の葉の、堆く、積れろも、いつもにかはりてめづらしげもなし。又昨日まで、此方彼方に生ひたてりし、松の、或は折れ、或は倒れしなど目もあてられぬ、有樣掃き箒の能くつくすべくにあらず、よべ物音の、すざましかりしを何やらんさ、怪みたりしは、この松の折れし音、又倒れし音にやありけん。實に吹きある風計りおそろしくかつすさましきものは、あらじかし。

宇高まつ子

そよ吹く風春も秋もいさあはれになかし、けれさ野分たつ頃朝の程は何もなかりしに、空のけしきのおさろく\しう變りて吹き出づろ。風ごそいさおそろしけれ、夜に入りてはあやめもわかず雨さへふりまじりて、ますく\はげしく樹の枝なさの吹き折らろゝ音すさましく、かくては家なども、おぼつかなきに、つひぢなさの。くずる音したろ何こゝせんは、然れど我等はかくても猶家の内にすむ身なれは、こさもなきを、大ばらにれ起する舟人等は、いかに心ほそろらん、命さためろ楫かぢの波にさられすや風には折られずや。さ家にのこれろ妻子はいかに思ひさわくらむ、おもひやろもいさあはれなり。あはれ風の神よ、今年御心靜めて、なあらひ玉ひそさひたすら。いのりつかふろ程ごにいささびしき。

寄鳥祝　　山田婦美子

まひそふ田つのよはひを君うけて
千代より御代もさかねゆくらむ

秋郊虫　　仝人

はれをおきて月より外に影見ねぬ
野中にたれをまつむしのなく

秋夕　　田中睦子

打なびく稻葉にあきのかぜ見ねて
入日さみしきをちのやまざさ

庭夏草　　仝人

夏ぐさは心のまゝに茂りけり
もさより庭のをしへなければ



西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第五版

女子處世論　全

菊判美本

定價二十錢　郵税四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徵し女子たるものゝ世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所

東京京橋區築地二丁目廿一番地

國光社

和歌募集及豫約出版廣告

明治秀才 女子百人一首

全一冊和製頗美本○豫約郵税共金廿四錢○正價郵税共金三十五錢○郵券代用五厘或は一錢にて二割增○爲替振込局豐後國竹田郵便電信局

出版の目的

女子百人一首昔より今に至る迄これなきを慨し玆に該書を出版し以て女學の隆盛を計る故に江湖の諸媛諸孃左の各項に依り何卒金玉の詠を吝まず奮て投稿あらんことを

投稿の注意

自作の和歌五首及自己の寫眞と履歴書に豫約一部代金郵税共金廿四錢を添へ投稿せらるべし用紙は小判紙總て字体は楷書にて明記を要す但代金添附なきは沒書とす

出版方法

斯道諸大家に請ひ募集歌中より一人に付一首づゝ都合百首を撰拔し小倉百人一首の如く各人の肖像（御贈附の寫眞に似せ）を描き上に歌を書し上欄に履歴を掲ぐ撰拔せられざる人の歌は一首づゝ附錄に載す○書籍のみ購求者は〆切迄に金廿四錢を贈附あれ○〆切十月廿日限○十一月末日製本出來申込順序に依り贈本す

豐後國直入郡莊村百六十一番地

玉詠屆所　雅風舍主　三輪庫子

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

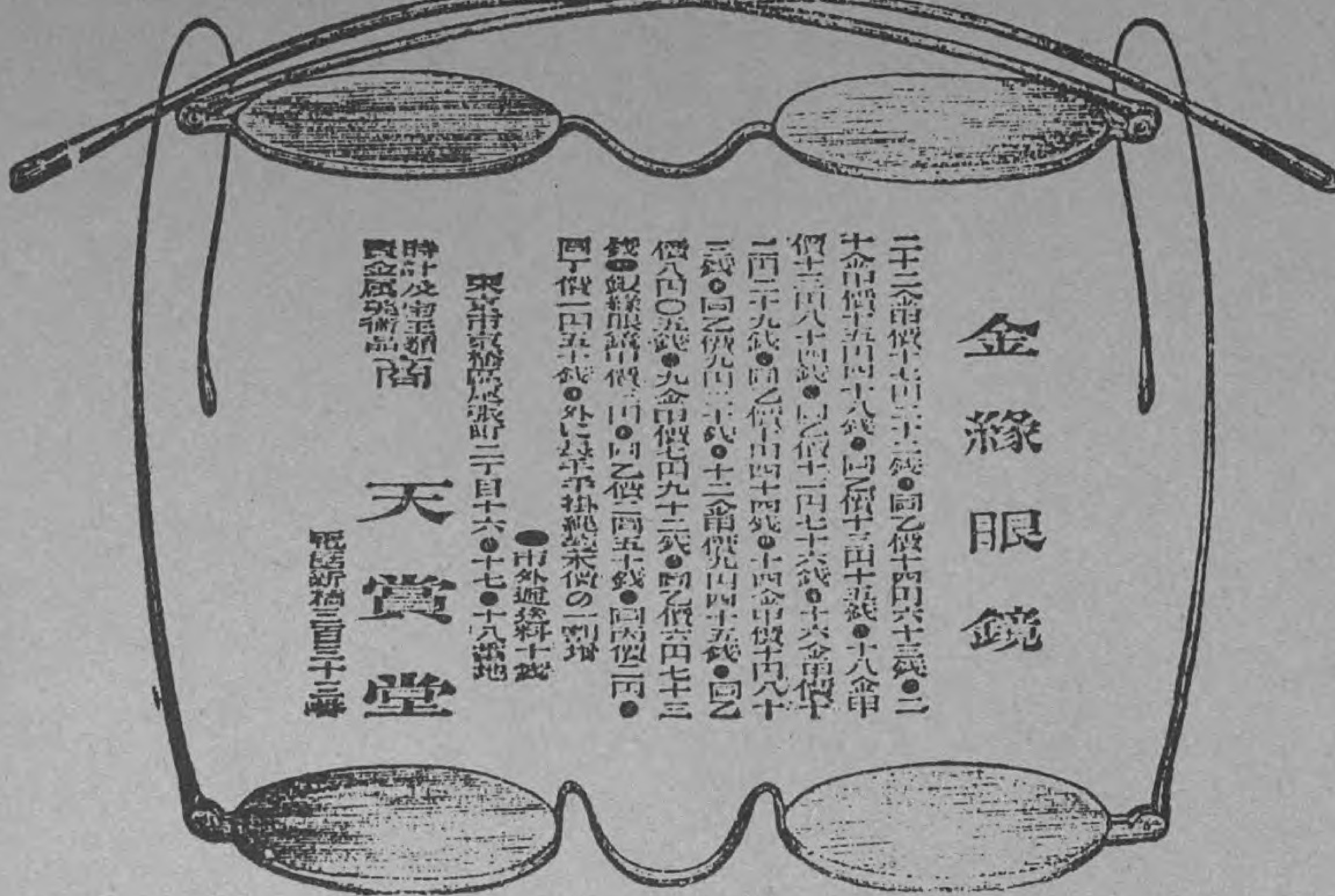
定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

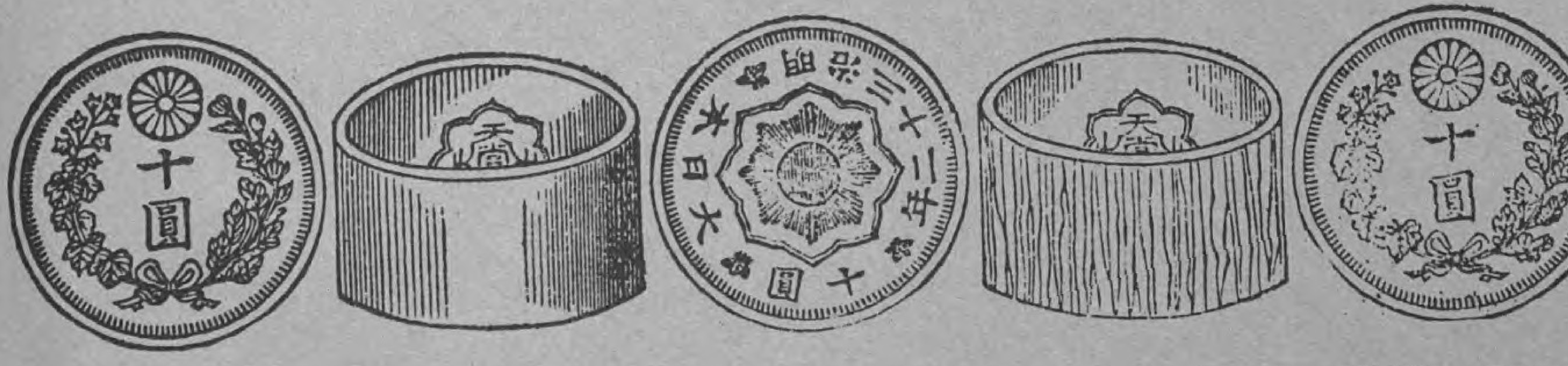
明治三十二年九月十九日印刷
明治三十二年九月二十日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號新橋八八）　國光社





天賞印 純金指輪

純金平打指輪 商標天賞印番號刻印付●目方正味一匁八分付

代金拾圓

●賣渡の日より三ヶ年の間に何時よても御持參あれ金九圓にて買戻すべし

●此指輪が三ヶ年用ゆれば一圓の損料にて純金平打上等の指輪が指せるも同じ事にて正金を貯ふるよりも用心よくて徳用なり

●是れは本堂にて御得意樣への御奉公なれば利得が離れての特別製造なりと思召せ

●市外遞送料金二十錢

東京市京橋區尾張町二丁目
(電話番號新橋三百三十三)

天賞堂

長距離電話(東京新橋 三百三十三)
(大坂東 七百三十三)

出張所々在地
東京神田、横濱、名古屋、大坂
廣島、熊本、長崎、福岡、小樽